

群馬県の中世城館跡

1988

群馬県教育委員会

群馬県の中世城館跡

1988

群馬県教育委員会



国指定史跡 金山城跡（太田市）



国指定史跡 箕輪城跡（群馬郡箕輪町）

序

わが国の中世という時代は、武士の台頭という封建制の萌芽によってはじまり、その後半は動乱の時代がありました。領国経営の拠点として館が、軍事的拠点として山城がつぎつぎに築かれ、土地と生活を維持するために、先人は文字どおり「一所懸命」の努力を重ねたのであります。

群馬県教育委員会では、昭和60年度から4か年にわたって、国の補助を受け、これらの城館跡の分布調査を県内全域でおこない、1,000余の遺跡を確認し、これによって本県の中世の様相の一端を知ることができました。

本県が心豊かな教育・文化の振興をはかるなかで、これら城館跡は、常に県民の目に触れることのできる遺跡として、積極的な保護と活用とをはかることが望まれております。

おりから、幹線交通網の整備・ゴルフ場等大規模開発の増加など、開発行為が平野部から丘陵・山間部までに及び、これら城館跡は、他の諸遺跡と同様に、開発の波という新たな動乱のただ中に置かれるところとなっております。

本書が中世城館跡の保護と、開発の適正な調整の資料として活用されることを願ってやみません。

最後に、本事業を指導された文化庁担当官・調査委員はじめ、ご協力いただいた県内各市町村教育委員会・調査員の各位に対し厚く御礼申し上げ、序文といたします。

平成元年3月31日

群馬県教育委員会

教育長 千吉良 覚

例　　言

1. 本書は群馬県が国庫補助金の交付を受けて、昭和60年度から昭和63年度までの4か年で実施した中世城館跡分布調査の報告書である。
2. 調査は群馬県教育委員会が主体となり、文化庁担当官・調査委員の指導を受け、群馬県内各市町村教育委員会・各地区毎に委嘱した調査員の協力を得て実施した。
調査の体制は、後述のとおりである。
3. 本書の編集は、調査委員の指導を受けながら、事務局（文化財保護課）がおこなった。
4. 本書の執筆は、調査委員及び事務局担当者がおこない、調査委員については目次に執筆部分を明示した。
5. 用語・語彙については可能な限り事務局で統一したが、術語にあっては学界の趨勢をふまえつつ、各調査委員の姿勢を尊重し、あえて統一していない。
6. 本書は本文及び市町村別城館跡一覧表・城館跡略測図・城館跡分布図・城館名頭字索引で構成されている。
7. 城館跡略測図は、山崎一調査委員の原図に各調査員の報告・公刊されている発掘調査報告書を加え、検討の上で調査委員等が再調査を行って、新たに作図してある。
8. 城館跡分布図は、国土地理院長の承認を受け、同院発行の2万5千分の1地形図を3万5千分の1に縮小して複製のうえ作成してある。

（承認番号）平元続復、第10号

なお、城館跡の範囲は調査終了時点で知り得たものであって、今後さらに拡大及び追加される可能性がある。

9. 本調査により作成された調査カード・写真・略測図等は、群馬県教育委員会事務局管理部文化財保護課に保管してある。

目 次

卷頭写真 国指定史跡 金山城跡 (太田市)	(太田市教育委員会提供)
卷頭写真 国指定史跡 箕輪城跡 (箕郷町)	
序	群馬県教育委員会教育長 千吉良 覚
例 言	
第1章 調査に至る経緯と経過.....	1
1. 調査に至る経緯	
2. 調査の方法と経過	
3. 調査の体制	
第2章 概 説.....	4
1. 上野の中世史と城館	調査委員 蜂岸純夫
2. 上野における中世城館の特色	調査委員 山崎 一
第3章 県内主要中世城館跡解説	
1. 北群馬の中世城館跡.....	23
白井城・長井坂城・沼田城・小川城・名胡桃城・榛名峠城・仙藏城・横尾八幡城・ 嵩山城・岩櫃城・大戸城・鎌原城	
調査委員 唐澤定市	
2. 東群馬の中世城館跡.....	38
厩橋城・大胡城・膳 城・山上城・高津戸城・桐生城・金山城・館林城	
調査委員 近藤義雄	
寒梅城・五箇田城・安養寺館・反町館・江田館・小泉城	
調査委員 山本隆志	
3. 西群馬の中世城館跡.....	59
寺尾城・和田城・倉賀野城・箕輪城・後閑城・安中城・板鼻城・宇田城・丹生城・ 内匠城・松井田城・国峰城・白倉城・平井城・高山城	
調査委員 山崎 一	
第4章 調査の成果と課題.....	85

1. 調査の成果

2. 今後の課題

城館跡一覧表	87
城館跡略測図	175
城館跡分布図	288
城館名頭字索引	393

第1章 調査に至る経緯と経過

1. 調査に至る経緯

上越新幹線・関越自動車道の相次ぐ開通は、本県においても社会的に大きな影響を及ぼし、ことに経済効果については新たな構造上の展開をみせることとなった。さらに、上信越自動車道・上武道路の建設工事等に代表される幹線交通網の整備は、都市型住宅地・工業団地の造成等県域内の地理的様相を一変させうるものとなることが予想される。とりわけ、ゴルフ場等リゾート施設の著しい増加は、丘陵・山間部に多く立地する中世城館跡の保護に深刻な問題を生じるところとなっている。

一方、本県内の城館跡の調査・研究は、山崎一氏の精力的な個人研究の成果に支えられ今日に至っているが、近年の発掘調査の進展等新たな成果も加え一層充実した資料の公刊が望まれていた。

群馬県教育委員会では、このような状況に対処するため、国の補助を受け、県内全域で中世城館跡等分布調査を実施することとした。

2. 調査の方法と経過

調査は、現地調査に3か年、調査報告書作成に1か年を当てるこことし、昭和60年度から事業を実施した。各年次の実施経過等は、以下のとおりである。

1) 昭和60年度

A 事業内容 前橋市・太田市・館林市

勢多郡（北橘村・赤城村・富士見村・大胡町・宮城村・柏川村・新里村・黒保根村・東村）

碓氷郡（松井田町）

新田郡（尾島町・新田町・藪塚本町・笠懸村）

邑楽郡（板倉町・明和村・千代田町・大泉町・邑楽町）

以上、3市・9町・10村の現地調査

B 実施期間 昭和60年4月5日～昭和61年3月31日

C 事業費 2,500,050円

2) 昭和61年度

A 事業内容 高崎市・桐生市・伊勢崎市・沼田市・渋川市・藤岡市・富岡市・安中市

群馬郡（榛名町・倉渕村・箕郷町・群馬町）

北群馬郡（子持村・小野上村・伊香保町・榛東村・吉岡村）

多野郡（新町・鬼石町）

甘楽郡（妙義町・下仁田町・南牧村・甘楽町）

吾妻郡（中之条町・東村・吾妻町・高山村）

第1章 調査に至る経緯と経過

佐波郡（東村・境町・玉村町）

山田郡（大間々町）

以上、8市・14町・9村の現地調査

B 実施期間 昭和61年4月5日～昭和62年3月31日

C 事業費 5,000,000円

3) 昭和62年度

A 事業内容 多野郡（吉井町・万場町・中里村・上野村）

吾妻郡（長野原町・嬬恋村・草津町・六合村）

利根郡（白沢村・利根村・片品村・月夜野町・川場村・水上町・新治村・昭和村）

佐波郡（赤堀町）

以上、7町・10村の現地調査

B 実施期間 昭和62年4月5日～昭和63年3月31日

C 事業費 5,005,021円

4) 昭和63年度

A 事業内容 調査報告書の作成・刊行

B 実施期間 昭和63年4月11日～平成元年3月31日

C 事業費 5,010,468円

3. 調査の体制

本事業の実施に際し、事業全般にわたる指導と助言とにあたる調査委員を、また現地調査にあたる協力者として実施年度ごとに調査員を委嘱した。

調査員の選考にさいしては、原則として各市町村教育委員会の推薦をうけた。

本事業にかかる事務は、群馬県教育委員会事務局管理部文化財保護課埋蔵文化財第二係がこれにあたった。

本事業の実施体制は、次のとおりである。

調査委員 近藤 義雄 (群馬県文化財保護審議会 副会長)

山崎 一 (同 委員)

峰岸 純夫 (東京都立大学教授)

唐澤 定市 (群馬県立高崎東高等学校 教頭)

山本 隆志 (筑波大学助教授)

調査員（昭和60年度） 久保田順一・矢島 宣宏・青木 宏・鹿田 雄三・新倉 明彦・若林 正人・

品川 久・落合 敏夫・宮田 茂・須田 努・川原喜久治・唐澤 保之・田中 尚・

代田 和年・大塚 一彦・樋口 良夫・津金澤吉茂・丸山 公夫 (18名)

3. 調査の体制

調査員（昭和61年度） 横倉 興一・久保 泰和・金子 智一・高橋 淳・桜井 衛・神戸 聖語・
早川 孝・竹之内 孝・田村 孝・茂木 渉・増田 修・大沢亥之七・天利 秀雄・
堀越 久・桜井 玉寿・星野 正明・川村 勝保・島田耕多郎・原沢 直久・星野 稔・
石北 直樹・武井 新平・岸 益雄・青木 吉・大島 史郎・中島 正男・浦部 正視・
関口 正巳・佐藤 尚志・塚越甲子郎・塚越 凡夫・飯塚 寿男・佐藤 道郎・柏木 一男・
茂木仁太郎・里見 倫夫・阿部 正恵・小板橋良平・小野 和之・中島昇太郎・中島 良一・
樋口秀二郎・柄沢 勇夫・木暮 正次・原田 文助・市川 光一・岡田 好次・斎藤 文雄・
秋月 保教・松本美智男・（故）五十嵐至・若狭 徹・小沢 武雄・生方 穂衛・佐藤 吉男・
小野 守明・新保 修宏・萩原 勉・岩田 実・田中 善作・二階堂俊良・本多 成臣・
千木良英一・中山 繁・桜井 西一・緑野 智天・横尾 好之・神島 一男・竹内 達夫・
市川 太平・茂木 鶴寿・丸沢良一郎・吉田 文作・神道 登・田中 長作・小林二三夫・
上原 富次・山口 武夫・松本倅一郎・田村 正勝・奈良 秀重・内藤 隆・田中 義明・
唐沢 文雄・丸山不二夫・青木 威・竹淵 清茂・脇屋 真一・稻川 昭三・平形作右衛門・
定方 義雄・尾内 達男・柿沼 恵介・坂爪 久純・井田 二郎・栗原 嘉二・若月 勝男・
瀬川 理一・早川光三郎・内山 京吉・五十嵐昭雄・小方 道憲
(102名)

調査員（昭和62年度） 江原 正・大沢 末男・小河原栄八・清水定之助・椿 五郎・長谷川寛美・
宮野 高明・三沢 義信・今井 義一・黒沢二三夫・飯出 哲夫・明田川道雄・黒岩 春夫・
堀口 吉雄・小林 資治・篠原 敏子・鎌原 忠司・篠原 彰仁・高橋 武親・桑原 順澄・
飯田 祐中・小野信太郎・佐藤 民衛・吉田 晃・金子 政治・大久保勝実・千明 良・
増田 清三・武川 健二・真庭 唯芳・小野 勝・宮内 学・関 登志雄・林 三千夫・
真庭 久吉・原沢 宣也・高橋 寿夫・山口 重雄・島田 民夫・鹿田 雄三・矢島 宣弘・
八巻 孝夫・上村 敏彦・池田 誠・三島 正之・池田 光雄・松岡 進・斎藤 慎一・
関口 和也・渡辺 昌樹・中田 正光・藤井 尚夫・木村 淳一・中井 正代・金子 康夫・
寺井 親・木下 恵司・本田 升
(68名)

事務局 梅澤 重昭（管理部参事兼文化財保護課長）
中島 喜三（前・總括課長補佐）
田邊 巍（總括課長補佐）
女屋 等志（係長代理・課付）
近藤 功（前・主幹兼埋蔵文化財第二係長）
神保 侑史（主幹兼埋蔵文化財第二係長）
巾 隆之（前・専門員）
洞口 正史（前・文化財保護主事）
唐澤 至朗（主任・編集担当）

第2章 概 説

1. 上野の中世史と城館

はじめに

城郭史研究では、城と館を含めて城館跡といっている。館は、ほぼ方形に堀と土塁を廻らした恒常的な居住地である。これに対し城は、立地条件によって平城・丘城・山城などと区分され、自然地形を堀（堀切り・堅堀・歓堀・障子堀）や土塁などによって加工し、一定の平坦部分を郭として造成した軍事的防御施設である。発生的には館が先行し、郭などの網張を拡張して城郭化した「館城」となる場合がある。館の中には、その主の没後に持仏堂から寺に転化した「堀内御堂」と史料に出てくる「館寺」があり、これも城郭史研究の対象となる。

これとは別に、南北朝頃から山腹や山頂を削平してそこに軍勢が立て籠もる山城が出現する。この山城自体に発展があり、堀・土塁の変化を加え、郭の網張を拡張してますます防備を固めた城郭となっていく。館を山麓に設け、その上の山腹ないし山頂を城とし、いざという時にはここに立て籠もる「詰めの城」ができ、館と城がセットになる場合も多い。このように館・城は、それぞれの発展と結合を遂げつつ室町・戦国時代にいたり爆発的に量的・質的展開を遂げるのである。

(1) 中世前期の上野史と城館

天仁元年（1108）、浅間山大爆発による火山灰（Bテフラ）の大量降下に直撃された上野中央部は、十二世紀前半にその荒廃からの復興の中で、国衙のある群馬郡を除いて各地に多くの荘園・御厨を成立させていった。利根・佐位・新田の三郡はそれぞれ一括して利根庄・測名（佐位）庄・新田庄となり、その他多くの荘園ができた。このような荘園成立を現地で支えていた在地領主は、治承・寿永内乱期に志田義広や木曾義仲に味方して滅亡した藤原後綱・忠綱父子、那波広澄、西（佐位）広助なども見られるが、多くは鎌倉幕府の地頭・御家人として各地に根を下ろした。それらは新田庄の新田一族、秀郷流藤原氏の大胡・山上・佐貫氏、児玉党の倉賀野・小幡・大類・片山・白倉氏、秩父党の高山・小林氏などが知られる。また、内乱期の没収所領に入部した利根庄の中原親能（それを継承する大友氏）、測名庄の中原季時（親能の子）、那波郡の大江姓那波氏、守護として国府および玉村御厨などを領有した安達氏（霜月の乱で滅亡）などが知られる。これらの諸氏は各地の拠点に二町（約118m）四方を最大規模として勢力に応じた規模の方形館を造ったが、十二世紀に遡る遺物を出土するものは少ない。

治承・寿永内乱期に新田義重の「寺尾館」（高崎市）はそこに軍兵を結集した場合に「寺尾城」とも記され（「吾妻鏡」）、通常の館が緊急時には防備を施して城に転化することを示しているようである。

南北朝内乱期においては、足利尊氏方の上杉氏の上野入部、あるいは観応の擾乱において軍事的機能を果たす城が使用されたと思われる。上杉氏の進攻の際に「新田城」（新田庄のどこか不明）、「中野楯」（楯は館と同じ、邑楽町）で合戦が行われた（落合文書）。その他の史料はない。

(2) 享徳の乱と城館

享徳3年（1454）に開始される享徳の乱は、関東公方足利成氏による関東管領上杉憲忠の誅殺に端を発し、

下総・下野・上総・常陸などの伝統的諸豪族に擁されて下総古河を拠点とした成氏と、西上野・武藏・相模などの主として国人一揆を勢力下に包摶し、幕府に支援されて武藏五十子（本庄市）を本拠地とした上杉氏（房頭・頼定）との抗争という形をとり、ほぼ利根川を勢力の境界として文明10年（1478）の成氏と頼定の和睦、文明14年（1482）幕府と成氏の和睦に至るまで、ほぼ四分の一世纪にわたって行われた。この間、文明9年に山上内杉氏の家務職相続の不満から白井長尾景春の反乱が起き、その襲撃によって五十子陣が崩壊する。東上野新田庄の岩松持国は当初成氏方に属したが、上杉方にあった同族岩松家純の勧説で上杉方に転じ、間もなく家純によって滅ぼされた。文明元年（1469）に岩松氏は家純によって統一され、その後家純は成氏方に転向する。

この乱の過程で、幕府は享徳から康正・長禄・寛正・文正・応仁・文明と次々に元号を替えるなかで、成氏はこの改元を用いて享徳27年（文明10年）頃まで享徳年号を使用し続けたので、享徳の乱と呼ぶのにふさわしい。さらにこの和平実現後間もない長享元年（1487）に、上杉頼定（山内家）と上杉定正（扇谷家）が対立する長享の乱が起り、長尾景春の動向と関連して戦乱が継続的に行われた。

この両乱は関東の城館史の上からも画期的なものである。とりわけ享徳の乱は戦いの境目となった利根川沿岸地域に多くの城郭の成立を見る。もちろん城郭は在地領主間の局地紛争に備えるためのものとしてそれ以前からも存在したが、これを契機にして防備施設の拡張、あるいは防衛上の要地を占定して新たに築城が行われた。利根川北岸の金山城は岩松家純の家臣横瀬国繁が70余日を費やして文明元年2月に完成させたものであり、その東の小泉城は延徳元年（1489）の築城伝説がある。

この乱で攻防の地となった城館は、赤堀館（赤堀町）・那波・富塚在所（伊勢崎市）（以上「正木文書」）、武士（境町）、富塚城・今村城（伊勢崎市）、世良田三蔵の城（尾島町）、東金井城（新田町）（以上「松陰私語」）などである。また、赤井氏の立て籠もある館林城は城沼に突出した半島状の地に築城され、これを攻撃する上杉氏は対岸の突出した猿崎の地で見張り番を立てて舟運による補給路を絶って攻め落とした。また、金山城は少なくとも「実城」・「坂中城」などの郭を持っていることが知られる（以上「松陰私語」）。

また、長尾氏の拠点白井城や元絶社城などもこの頃本格的に築城されたと考えられる。とりわけ後者は上野国庁の城郭化という形で進行した。その他の上杉氏の守護被官や上野一揆の面々、発知・沼田（沼田市）、大類・倉賀野・和田・長野・綿貫（高崎市）、高山・小林（藤岡市）、那波（伊勢崎市）、諏訪（松井田町）、高田（妙義町）、一ノ宮（富岡市）、小幡・白倉（甘楽町）、小串・吉井（吉井町）などがそれぞれの拠点に築城していることは想像に難くない。

（3） 戦国期の三つ巴の争覇と城館

上野における本格的な戦国時代は、長尾景虎（上杉謙信）の永禄三年（1560）8月の関東侵攻によって開始された。これは「庚申年の越山」と上野の人々に長く記憶されることになった。上野の地は北からの上杉氏、南からの後北条氏、そして信濃から西上野に進出した武田氏の三つ巴の争覇の地となった。それ以前から上杉氏守護被官や上野一揆などの諸氏は、足利・惣社・白井の三長尾氏や横瀬（由良）氏や箕輪城の長野氏などに組織化され、～衆と呼ばれる地域的連合を形成していた。この衆は主従関係とゆるやかな服属関係である同心関係を総合したもので、本城を中心にいくつもの支城が配置された城郭連合でもあった。

これらの衆が諸情勢の中でどの勢力を選択するか、また立場を代えていえば上杉・後北条・武田の三大名勢力が彼等をどのように組織化し、あるいは切り崩し、ないし解体させていくかということが三つ巴の争覇の内容をなす。この過程で上野の戦国城郭が完成するのである。上杉氏に服属した諸氏の名簿は永禄4年の

第2章 概 説

「関東幕注文」(上杉家文書)に示され、武田氏に服属したそれは永禄10年の「武田家諸士起請文」(生嶋足嶋神社文書)に示されている。これらは当時の城郭配置をも示すものである。

やがて武田氏が滅亡し、上杉氏も上野から撤退すると、それまで三者の対立関係のバランスの中で自立性を保ってきた上野諸士の多くは後北条氏に服属させられ、後北条氏領国が完成されつつあった天正18年(1590)、中央政権の豊臣秀吉は

後北条氏の名胡桃城攻撃を「總

無事令」違反と決めつけて関東

へ侵攻することになる。その侵攻直前には後北条氏領国の緊張は高まり、大規模な城の整備が松井田・箕輪・厩橋・金山などの諸城を中心に行われる。また、各地の上層農民を年貢の一部を免除して軍役に結び付け、「地衆」という形で組織化し地域の小城・砦に立て籠もらせている。

戦国時代の文書の中に城郭関連史料が多く出現する。その中には外構・城門を意味する「外張」「戸張口」などの用語が出てきて、ここでの合戦がしばしば行われたことが記されている。

以上述べたように、城は戦乱など軍事的緊張との関連が強い。山城は大軍が押し寄せた場合、そこに籠城して敵の退去するのを待つためのものである。とりわけ上野では三つ巴の争覇に耐え抜くために重要な施設であった。これに対して館は在地領主の政治的支配や流通支配などとも関係するものである。両者を含めて村落・都市などの発展とも密接にからんでいるので、単に城の中心部だけではなくその周辺部分をも含めて考察する必要があろう。

関東幕注文永禄4年(上杉家文書)

上野および下野足利衆の内訳

——は上州一揆構成員

衆	統率者	注記	
白井衆	長尾孫四郎 (惠景)		外山民部少輔・大森兵庫助・神保兵庫助・高山山城守・小林出羽守・小林弥四郎・三原田孫七郎・上泉大炊助
惣社衆	長尾能登守殿 (顯景)	被官	安中・小幡三河守・多比良・大類弥六郎・萩原・高庭(馬庭カ)・瀬下・小串・神谷・多胡・匂方(訪)・荒符・菊部・反町・柄瀬 高津
箕輪衆	長野		(長野) 新五郎・南与太郎・小熊源六郎・長野左衛門・浜川左衛門尉・羽田彦太郎・八木原与十郎・須賀賀筑後守・長塙左衛門四郎・下田・大戸中務少輔・津原・内山・高田小三郎・和田八郎・羽尾修羅亮・倉賀野左衛門五郎・依田新八郎
厩橋衆	長野藤九郎		長野彦七郎・大胡・引田伊勢守
沼田衆	親類 家風 同心	沼田	小川・尻高左馬助・発智小四郎・沼田藤三郎・恩田与右兵衛尉・岡谷右馬亮・越前刑部少輔 和田國助・久屋内匪助・金子監持丞・松井大学助・恩田孫五郎 阿佐美小三郎
岩下衆	斎藤越前守		山田(以下欠)
(新田衆)	横瀬雅楽助 (成繁)	新田殿御一家 雅楽助親類(横瀬) (傳家衆) 家風 同心	西谷五郎殿・三原田孫三郎殿・家中大輔殿 常陸守・新右衛門・兵部少輔・斬十郎・金井源・新次郎・ 蘭田新七郎・市場弥十郎・田部井孫四郎・田部井龍岐守 矢内弥十郎・大沢彦四郎・林佐渡守・林藏人 小柴左衛門次郎・小柴伊勢守・小柴宮内少輔・ 又連又次郎・山上九郎・山上平六・朝原式部少輔・黄添太郎・ 善中務少輔・善和泉守・武井助四郎・新開弥三郎(沼田氏)
桐生衆	桐生殿(祐綱) 佐野殿(親綱)	家風	佐野殿・安威式部少輔・蘭田左馬助・大越大膳亮・新居・ 松島大和守・阿久沢対馬守 津布久齋謹守
足利衆	長尾但馬守 (景長)	家風 同心	小幡次郎・小柴大炊助・新居与六・平沢宮内左衛門・潤 名大炊助 平沢左衛門三郎 小野守・県左衛門・岡部弥三郎・安中将監・安保次郎・ 小幡道化・名草・小保・毛呂安芸守・本田左馬助・本庄 左衛門三郎・縣七郎・市場伊勢守・久下新八郎・浅羽弥 太郎・三田七郎・大屋右衛門・大屋上総介

2. 上野における中世城館の特色

(1) 調査の重要性とその対象

『吾妻鏡』、治承4年（1180）9月30日の新田義重寺尾城聚兵の事が、群馬県城郭関係最古の記録である。江戸時代初期から続いている寺尾城所在の論争も、片岡郡に定まって決着したかに見える。しかし必ずしもそうではないのである。寺尾城の一片の遺構も発見できず、一ひらの遺物を手にすることなく、そう結論することを誰が許すであろう。

また、富岡市の雄川崖端に、内匠城と呼ぶ城があり、整然とした造構を殆んど完全な姿で見ることができる。ところが、この城には関連した文書、文献が全く存在せず、伝説もなく、何時、誰が築いたか知る事ができない。構造などを、他の多くの城と比較、検討し、天正18年（1590）頃、後北条氏の築城と推定しているが、演譯の基礎資料が不安定なので、決して確論ではない。

現時の城館跡の研究は、このような難問ばかり抱え牛歩の活動を続いているのである。

さは言え、中世の歴史は、城館の動きを主軸として展開したと考えねばならず、その所在、実体を知らなければ、正しく理解することが不可能なのである。今次の中世城館跡分布調査はそれに対応する。その仕事はもう一つ、文化財保護行政の一翼を担う。この成果は今後、城館跡の破壊防止に大いに役立つ筈である。

調査の対象には、城・館・屋敷のほかに一般環濠造構（帯濠造構）、所属のない遠堀等も含まれている。城・館・屋敷の呼称は、八崎城を八崎館とも呼び、彦部館は彦部屋敷とも呼ばれるように確然とした区別はない。一般環濠（帯濠）造構というのは、城・館・屋敷と類似した造構であるが、武家関係のものでなく、作戦的配慮の少いものと説明できよう。帯濠の社寺もこの中に含めたのである。それらも、砦に利用された例もあり、調査対象から外すことができなかったのである。多くの城・館も広義の帯濠造構といえよう。

(2) 城館跡の編年

城館の活動した年代を示す資料は少なからず存在する。文書（日記、記録、覚書等を含む）、金石文、書画、伝記（戦記など）、伝説等々。しかし城郭に関するかぎり、創築、入城のその日から、絶えず鋭意増改修が重ねられ、現造構は廐城時の姿を示すだけなのである。従って、年代に対応する城郭の構造（全体及部分）を多数の城跡から帰納して編年史をまとめることは至難といえよう。只、少數例に過ぎないが、短時日の活動期間よりもたないものは、目安を提供してくれる。高山村の中山城、下仁田町の仙瀬城、等がそれである。前者は関係文書により、後者は出土墓石の紀年により年代を定めることができた。そういうものが多数集積できれば、仙瀬城のように天正17・18年（1559—1560）頃に築かれた城には、上幅8m、深さ3m程の箱形堀を備えたものもあったという目安ができる。但し、この規模の堀をもつ城は天正末年のものという命題は成立しない。今後、これらの資料の集積、そのコンピューター処理により、この面の成果が得られるであろう。

その場合、城郭の編年には、気候、風土、地形、経済事情、築城者の性格、能力、仮想敵の諸事情等の要素も算入して打ち出さねばならない。

(3) 気候の条件から生じた城郭の特徴

吾妻・利根・沼田の諸地域は、積雪が多いことにより、県南部とは異った条件が築城を左右する。草津の湯本屋敷には、小雨川谷の沼尾に冬屋敷があり、長野原の丸屋城には横壁の冬城が準備されていた。嵩山城南麓に見られる平城部、岩櫃城平沢地区の堀構え等も積雪期の備えであろう。ところが、利根・沼田にはそ

第2章 概 説

それが見られない。この地域の城郭の大部分が崖端城であることで説明がつこう。或は逆に、積雪を考え山上の築城を避けたのかも知れない。

県下の城館は、山城と言わず平城と言わず、館でも屋敷でも一般帶濠遺構でも、郭の北面、西面に土居を築いてあるものが多い。それは、冬の季節風が北西風であるからと容易に説明できるであろう。土居の大部分が崩された遺跡でも北西部だけ残っているものも少くない。鬼石町の塩沢城、吾妻町川戸の城峯城などは例外で、後者は南方近く高所のあるためと考えられるが、前者の本郭が北面だけ土居を欠くのは理由がわからない。或は北面だけ崩されたのであろうか。

(4) 地勢・地形による、城館の選地・形状の特徴

利根・沼田と吾妻は、山地の多い、似通った条件をもつが、前者では崖端城が圧倒的に多いのに、後者はそれが少いことを前項で述べたが、前者では、利根川・片品川沿いに段丘がよく発達し、吾妻川西側にはそれが比較的乏しいことによると思われる。

鍋川の南岸地帯の城館分布を見ると、三段、三列が歴然としているのに気付くと思う。東の平井金山城からはじまり一郷山・八束・天引・国峯城山と山城が一列に並ぶ。この山城列の北に、段丘端を選んで、峯山・河内・多胡・高・長根・仁井屋・浅場の丘城が築かれ、鍋川岸かそれに近い崖端に、藤岡の岡・三ツ木・小串・吉井の岡・池・塩川・本郷・小棚・片山・庭谷・田篠の城館列がある。三つの列の城館は当然それぞれの地形に応じた形態を示し、南の列は、堀切り、腰郭を主要素とする尾根式山城。中の列は堀・帯郭・高土居をもつ丘城、北の列には、平城乃至崖端城形式の城館が並ぶ。これらの配列を規制したのは、この地域が、東西に走る多くの断層によって、数列の細長い山の列が形成され、鍋川に向って段下りなった地形だからである。

赤城山南麓には、放射谷末端部の台地に、嶺・大胡・膳・山上など、南北に長い城が多い。それらにはみな南北を通して設けられた交通壕乃至腰郭と、鍵形堀戸口が存在する。地域の慣行も考えられるが、地形に応じた特徴と見ることもできよう。

県の東南部、館林・邑楽地方の城館の多くは、湖沼、湿地を要害とするか、或はその制約を受けて築かれている。東京湾海面から20mの高さより低い低地帯のこととて当然のことであろう。これは埼玉県、茨城県の古利根川に近い地帯と共通な地理条件による城館の特徴である。

(5) 築城者による特徴

これは、城館跡研究の上で、重要且興味のある課題であって、その成果を活用すれば、幾多の史実が解明され、或は是正されることとなろう。それだけに、軽々な取扱い、判断は許されない。

築城者による特徴を捉えるには、城館跡相互の比較が必要で、比較する対象は相互の活動が同時代のものでなければならない。そこで上野国の中世史を見ると、鎌倉、南北朝、室町、戦国の各期（時代区分は曖昧だが）に、それぞれ特異な史実をのこし、築造者、在住者について伝えるところがあれば、それを捉えて現地に当たり、考察を進めたりしなければならない。

鎌倉期には、寺尾城・新田館をはじめ、「吾妻鏡」中の人物等の県内城館跡を模索する仕事がある。南北朝時代には、「太平記」等に扱われた、新田氏とそれと抗争した人々の城館跡の問題がある。室町時代には、鎌倉府をめぐり、禅秀の乱から次々に起る争乱に関与した人々の城館につき、漸く具体的な資料が提供されるようになる。そのうち、「松陰私語」・「道灌状」中の諸城館については一々検討が必要である。戦国期の上州

は、上杉・武田・北条三氏抗争の舞台となり、三氏関係城砦を比較検討するには絶好の条件を備えている筈である。

ここではまず、上杉・武田・北条三氏の築城或は増改修の城郭について考えることとする。

三氏の築城といつても、それらの各氏が自力で築城したのではなく、直接銀をとったのは、在地武将とその地区の人々であったことが、次の文書により知ることができる。永禄12年5月17日付高山彦兵衛宛武田印判状「武上之境取出之地利占浅利右馬介令譲合築可在城…」。天正12年5月28日付北条印判状「仁田山之内しほ原 あな原 小平 しさわ たかつと 以上 右五箇田取立ニ付而任望遺候…」。

『甲陽軍鑑』巻第11下、品37に「永禄13年…中略…山名鷹巣の間にあたらしく城を取立信濃侍望月甚八郎友野助十郎両人さしをかれ…以下略」と、片岡根小屋城創築の事を記している。『甲陽軍鑑』は完全な史料ではなく、この城の築城に関する文書、記録は他に一つとして見当らないが、遺構は紛れもなくその位置に現存する。山名城は高崎市山名町字前城山にあって、市の史跡に指定されており、鷹の巣城は茶臼山城の別名で、山名城西北2.5kmにある。両城とも烏川右岸の低地にのぞみ、そこからの高さは山名城は約100m、鷹の巣城は約70mである。その間に築いた新城は、両城より規模も大きく、はるかに精巧な遺構を殆んど完全にのこしている。三角点197.7mのある本郭は、東北—西南の長さ90m、最大幅30m、南北両端の窪所は、内舟形と同様に機能し、そこに戸口を開く、南戸口の5m下に郭馬出しがあり、本郭、郭馬出しの外側下方に堀を隔てて東南と西北とには帯曲輪、西には第二郭、東南には東北—西南の長さ170m、最大幅25mの第三郭がある。第三郭の東南外側下には一帯に腰郭が設けられているが、それは五条の堅堀で三つの部分に分れ、更に下方に二段の外郭（捨て郭）もあり、南東端には土居が構えられ、追手戸口が開く、本郭と第三郭との間の堀には水がありその東北端近く井戸跡がのこる。同じ郭の東北端下には郭馬出、西南部には重ね馬出しが設けられる等々至れり尽せりともいいくべき構えであった。これ程の築城には1年以上の歳月を要した事と思われ、着工は永禄11年と推定する。当時、北条氏康は信玄との同盟をすて、上杉輝虎との和睦交渉をしきりに進めている時で、この城は北条に備えて築き、上杉に対しては堅橋城対岸に石倉城を築いて抑えとした。石倉城も武田の築いた城の一例である。碓氷峠東麓の愛宕山の砦（碓氷城）、八幡平陣城、板鼻城も武田の築城と思われるが、板鼻城の螺旋状構造、礎部城はその地元に多い一城別郭構造である等、それら各城には共通点を見出すことができない。性急のそしりを顧み結言すれば、「千差万別、端倪を許さない」のが武田の築城法であろう。孫子虚実篇末尾に曰く「兵無常勢水無常形」。

北条氏が上野国的主要部を制したのは、天文20年（1551）—永禄3年（1560）と、天正10年（1580）一同17年（1589）の2期間である。前期の場合は、平井、堅橋、沼田を連ねる点と線との制圧にあって、城郭の新設はなく、増改修についても知る所がない。近年発掘調査で注目すべき遺構の検出された平井金山城北尾根の場合も、北条氏の構築と確認される手がかりはない。後期には、北条氏は上野国の分国化に本腰を入れ、真田昌幸の圧服をはかっており、その末期には、豊臣政権の強圧を受け、必死に自己存続の途を模索していた時代とて、築城も当然盛んであった筈である。

前の時期に築かれたと推定されるのが、赤城村と昭和村の境にある長井坂城と高山村の中山城である。遺憾乍ら両城とも築城関係の史料がなく、傍証によって推定するほかない。長井坂城は、天正12年（1584）8月17日付の「狩野文書」が初見である。「加沢記」には同10年10月の長井坂ようがい戦を伝えているが、その月27日に沼田勢が敗退し、中山城主中山右衛門尉が討たれているので（同11月12日付氏直感状…「狩野文書」等）、その殿り戦の誤認であろう。翌11年2月、北条氏邦が長井坂より北の森下城を攻略している（「林文書」）から、その後に、北条氏が築き、沼田攻めの拠点を設定したのだと思われる。

第2章 概 説

北条氏は中山右衛門尉の敗死に乘じ、天正10年閏12月24日までに中山城を占領し(「林文書」)、翌11年3月晦日、赤見山城守(沼田顯恭の子で、下野赤見氏の養子)に、この城を守らせている(「赤見文書」)。しかしそれ以後、天正14年8月真田昌幸が奪還する迄この城の消息は絶える。

中山には新古2城の跡が現存する。古城の方は中山宿の東にある山城、新城の方は西側にある丘城で、古城の方が中山氏の城と伝えられ、新城は天正11年から同14年の間に北条氏が築いたものと推定されるのである。

上信越自動車道の路線調査に当り、昭和62・63年の発掘調査で、下仁田町の仙瀬・下鎌田の2城が発見されたが、仙瀬城の水の手に伴う溝の石組み中に、100個に近い墓石が使われていた。それらには紀年の明らかなものも多く、天正16年の墓石まで含まれていた。ということはこの城が、小田原の役まさに築かれたのを示し、この辺の領主国峯小幡氏の構築としても、後北条氏の指令によったにちがいない。

北条氏は、西牧城に、多目・大藤両将を置いて、内山峠附近から関東に進出する上方勢を防ごうとしたのだが、それと国峯城との繋ぎにこの2城を設けたと考えるほかない。

そこで気付かれたのは、国峯城の北にある匠城であった。この城には、天守曲輪、天守台に相当する櫓台まで存在し、明らかに戦国末築城を示す城である。関連文書や伝承は全くなく、ただ城主は倉又大炊助との口碑だけがあった。ところが大炊助の名は、慶長10年の水帳に本百姓と記され、帰農した侍と考えて誤なからう。この城は、囲郭城を4分の1とした形の崖端城だが、長坂井・中山両城と対比する時、同一な様式と規模をさまざまと見ることができよう。仙瀬・下鎌田の二つの城は、西牧城とこの城のつなぎとして築かれたものと推定する。

これらのはか、渡良瀬川谷の五箇田城は北条氏の創築(天正12年5月28日付「阿久沢文書」)。松井田城・大戸城は、北条氏が大増改修を行った山城(天正15年5月3日付「後閑文書」、天正12年2月16日付「小板橋文書」)。箕輪城・新田金山城にも工事のための人夫を集めめた文書が見られる。しかしこれら諸城の遺構中から、北条氏築城の特色を摘出しようとするのは極めて困難である。例えば、松井田城を見ると谷底まで念入りな工事の跡を止めているのが、特徴の一つであるが、新田金山城にもそれが認められ、「永禄日記」中に、由良成繁が視察したとあるように、北条氏の仕事ではなかった。また松井田城には県下只一つの堅堀列(仮称)があるが、それは、越後の城に特に多いことが指摘され、北条氏築城の特色とはいえない。二の丸の西側、北側に構えられている。洗濯板状阻塞(仮称)は、県下他に例がないが、堅堀列を尾根の上面に応用した。この城の築城者の創意かも知れない。これらと同様、丸馬出しを武田氏の手法と称する人々もあるが、それは武田氏とは全くかかわりのなかった新田金山城や、上杉謙信の築いたと推定される赤城村の棚下城にも見事に違っているのである。中世の将士は、すべて築城学者であり、築城家であったとさえ極言できる程、有能な人々は、自己の実戦経験を生かし、各地築城の情報を集め、殊に敵城の探査には必死の努力を払った筈である。築城家といえば直ちに太田道灌・山本勘助・加藤清正らが引きあいに出されるが、それらは単に一例にしかすぎない。北条流・武田流・上杉流など築城学の流派を作ったのは、江戸時代の机上軍学者達だったのである。

上杉謙信の築いた城郭といえば県下にその例が見られず、「赤城神社文書」中、永禄13年(推定)3月25日と26日付のものにある棚下の砦はその可能性がある。推定元亀2年の5月26日付「栗林文書」に、「沼田為加勢其儘有詰浅貝之寄居普請成就…」と謙信の指示した浅貝の砦は三国峠北の越後側にある。

箕輪城は、中央の大堀切りで南北に両断され、只一筋の土橋だけで二つの部分が連絡づけられている。この形式の城郭は、箕輪の姉妹城である鷹留城のほか、吾妻郡の岩櫃・岩下・大戸・碓氷郡の後閑・松井田・

磯部の諸城と甘楽郡の宇多城などで、長野氏にかかわりありとも見られるが、むしろ地域的慣行であろう。また、下仁田町と南牧村の城郭には、山脚の平地に城の主体を置き、背後の山頂には物見・のろし場などの小郭を構えたものが多い。これは、同地区的山が峻しいために生れた、地域的特徴と思われる。

桐生城と、それに近い仁田山城・彦部館・栃木県の小保城・足利城等は、山上の城と山下の居館から成っている。これも地域的慣用手法であるが、築城者は別々であっても、相互の間に親密な関係が存在したのではあるまいか。

(6) 県下城館の場所選定

城館にはそれぞれ構築の目的がある。1、所領支配に適した地点。2、外敵に対し所領防衛に適した地点。3、戦略・戦術上の要点。4、交通の要所。5、経済文化の中心地。6、兵力を集め易い人口密集地、等の条件のどれを第1条件にするかは築城の目的によって定まるが、宗教的観念・慣行が常に作用する。

県下の主な城館跡の所在を通観する時、先づ気つくのは、多くが河川の左岸に位置するということであろう。群馬県の地勢は西北が高く、東南が低い。従って河川の大部分は、北から南へ、西北から東南へと流れれる。と同時に流線は、流路の北或は東に偏ることが多く、そこに断崖が出来て要害を提供するからであろう。しかしづ戸時代の築城学者は、そこに定められた城地を四神相応の地と常に称讃する。「左青竜右白虎前朱雀後玄武これを四神という。左は東、右は西、前は南、後は北。東に小川田沢あり、西に道あり、南に流水あり、北に山林があり、かくの如くなるを四神相應の勝地と称えたり」と説明している。

城兵は、神仏の擁護による城の安泰、戦の必勝を願い、東北を鬼門として、その角を落し或是欠き、その方位に神社を建てて鬼門除けとする。新田金山城では本丸の東北角を欠き、箕輪城では東北城外に、石上寺・石上神社がある。長野氏が石上部だからという。

また、彦部館の西北部には八幡宮が記られ、白井城ではそこに金比羅山、和田下之城など小城館には西北角に稻荷祠などを置くものが多く、現代でもその位置が屋敷神の定位置となっている。

このほか、里見館・沖野屋敷・桐生城など、西城外に菩提所等、城主とかかわり合いの深い寺のあるものも見られる。これらは城館の位置を定める条件ではないが、城主以下の精神生活に深く作用していた。

◎寺尾城の場所について

『吾妻鏡』に伝える、治承4年新田義重が兵を集めた寺尾については、その所在が新田であったか、片岡であったかの論争が長く続いている。片岡論者の掲げる理由は次のとおりである。1、上野国には片岡以外に寺尾という所はないこと。2、片岡近く義重の子山名義範・里見義俊の名所となった山名・里見があること。3、寺尾には倉賀野の河津があって、利根水系の水運を利して南関東への連絡が可能であること。4、足利俊綱の脅威で足利に近い新田には兵を集め得なかったこと。

◎新田館の所在について

『吾妻鏡』建久4年(1193)4月28日の条に、「將軍家自上野国還御此間於式部大夫入道上西新田館御遊覽自其所直還御云々」と、新田館のことが記されているが、寺尾城と同様、これも所在が明記されていない。從来、世良田総持寺附近というのが定説だったが、近年大館、別所の2説が生まれた。

尾島町の大館は、農地改良で消滅してしまったが、以前は、南北175m、東西150mの南北に戸口のある遺構が明らかだった。太田市の別所館は、南北250m、東西200mの長方形で、堀はすべて道路となり、南寄にある水路で南北に分けられている。世良田のものも同様に認められ、今、鎌阿寺になっている足利館もそうなっていると思われる。これら200m四方の大形館は、条理制の四区画を単位としていると考えられるので、内部

構造は、回字形ではなかったらしい。別所館の西南部が「角落し」になっているのは、茶臼山古墳の溝を避けたためと思われ、その元福寺に新田氏の墓所もあるので、ここを新田館とする理由は確かにある。しかし、世良田のような、企画された構成の集落は随伴しない。

世良田集落は、西と南に早川が流れ、北と東を2重堀で囲んだ1.2km四方の環濠集落である。中央やや南寄りに長楽寺と東照宮・世良田館を合せた方400mの区画があり、集落の要部はその北から東を囲んで鍵形に展開する。北部西端の伝新田館を極とし700mのびた町並みは、そこから南に向って折れる。その道筋は中瀬の渡河点と、平塚の河津に指向する。世良田は、利根川唯一の渡河点と河津に依存して生まれ、育ったのである。頼朝は1か月間の狩を終り、諸資材を舟送し、それを終った人馬を率い、直ちに鎌倉に戻ったのである。義重は建仁2年(1202)ここで死去したが、4世の孫政義が寛元2年(1244)失脚してここを去り義重の子義季の二男頼氏が、この時世良田の地頭に任じ世良田氏を称している。今次発掘調査された長楽寺西側の館はその居所と伝えられる。政義は別所の館に移ったのである。同福寺は政義を開基としている。

『太平記』に「新田庄世良田ニハ有徳ノ者多シトテ出雲介親連、黒沼彦四郎入道ヲ使ニテ六万貫ヲ五日中ニ可沙汰ト堅ク下知」し狼藉を働いたので、新田良貞はそれを斬って鎌倉攻めの兵をあげたとある。世良田に富裕なもの多かったのは、利根舟運の利益からであろう。しかし義貞の館は別所館と推定する。

『松陰私語』目録第三(本文なし)に、「世良田新要害中雜説之事」と、世良田に築城の企図があり、紛譲の結果沙汰止みになったことが記されている。築城を阻止したのは、長楽寺を中心とした宗教の力ではあるまい。

大陸では、このような環濠集落が城郭都市に育ったのだ。世良田は我が國の中世社会を知るため極めて貴重な資料で、国単位の調査研究が切望される。世良田の発展がとまたのは、戦国争乱による舟運衰退によると思われる。

このように重要な、利根舟運の資料が何故に乏しいのであろうか。

◎中世の製鉄及び、砥石・金・塩・銅等の産出と城館

新田金山城・富士見金山城・平井金山城と、金山に築かれた城が3か所県内にある。それらが産鉄・鍛冶に関係のあることは言う迄もない。白井城周辺には金井・たら沢・吹屋の地名があり名工妙珍はそこから生まれ、今も鑄もじの伝統は伝わり、鉄工業が現存する。城は産鉄、鍛鉄の真只中にある。丹生城もそうであり、たら沢に突出した鶴小城、製鉄遺構に接して検出された八寸城などは、鉄そのものに依存した城とも言えよう。ところが何としたことか。明らかに中世のものと銘うたった産鉄遺跡は一か所もない。他領、他地方からの鉄材搬入は殆んど不可能とも考えられる上州の戦国期に、あれ程多量に使われた鉄は、どこで産出したのであろう。多数発見されている「たら」は、すべて古代のものと考えられているのだが、必ず中世産鉄遺構はそれに数倍して存在する筈であろう。鉄原礦の採集地も同様で、分析によってそれも解明し得る筈である。諸々に散見する金井の地名も手がかりとなろう。近年、佐波郡東村で発掘調査した小保方屋敷跡の中央に露出したたらの1部は、残念ながら未調査に終ってしまったが、中世のものと推定している。同屋敷跡の出土品はすべて中世のものだからである。新田金山城の長手谷、桐生城の岡平にも、中世産鉄跡の発見が予想できる。

八寸城側で発見された「たら」は10世紀のものとなっているが、その近くの井戸跡から出土した「皿」の絵は一つの問題を提示した。その皿は明らかに中世の「かわらけ」で、紅と墨とで巧妙に人物が描かれている。髪は紅、その他は黒線で上衣と袴は袖口と裾が括ってある、鉢巻様のものを着けその布の端は長くひるがえっている。衣裳はすべて白らしい。右手を前にのべ、その下にある器には紅で描かれたものが盛られ

ている。絵の人物は、祭祀か、工作かの動作を見せていて、鍛冶の作業をしているとの想像もできる。

この種の絵皿は、防災の「まじない」に水中に投じる例が多いという。ここでも、製鉄、鍛鉄に伴う病気に対し行う祈禱に、この絵皿が井戸に投ぜられたのではあるまいか。

職業病には、砥石採掘に伴う硅肺病がある。南牧村砥沢の砥石産出は古来有名であった。砥沢城は、砥山の防護と産出品の管理を目的とした城とも考えられる。砥沢からは少量ではあるが金も産出されている。

八寸城・鶴小城も、同様な目的をもって築かれた特殊な城だったのであろう。

神流川流域の字塩・八塙・吉井の塩・塩川・碓氷谷の礫部・枇杷窪等・鉱泉による塩の産出は、山国の中州では貴重な産業で、淨法寺城・神保（植松城）・礫部城・名山城はその確保に当っていたに違いない。

「彦部文書」中に、將軍義輝の寵妾小侍従が、「にたやまつむぎ」10ひきなどを注文したものがいる。仁田山地域城は、産経地として経済的に優位に立っていたことであろう。天正2年10月19日、上杉謙信が太田三楽斎に送った書状に「向仁田山横瀬地理お取堅固ニ相拘候間從十三取詰十五即時ニ攻覃彼城ニ籠者共一騎一人不残男女共ニ悉なてきりニ成之候」とあり、古河公方義氏は由良成繁に「谷山落居之由一段無心无候併櫛籠人数無志之由簡要に候」と、この城の失陥を憂い乍らも、人員の無事を賀している。日付は10月18日である。また佐竹義重は11月7日付書状で「蟹橋在城の北條安芸守高広、同丹後守景広宛に、「猿窪之地被攻落之由」とこれを賀し、同日謙信へも、「就中猿窪地御近陣則被賣落男女共不残被討捕終之由不始御刷不及是非候」と、賞讃を送った。猿窪は皿窪で、谷山と共に仁田山城の別称である。この山間の僻城の陥落が何故これ程敵味方を震撼させたのであろう。ここでの紡織工業が、由良（横瀬）氏の財源であって、男女一人残らず討取ったと強調しているのは、その技術の覆滅を意味しよう。それは、作毛を蓮ぎ、苗代を蹂躪することにより一層深刻な打撃を敵に与えることとなろう。産鉄等の史料が乏しいのは、その情報が秘匿されていたためではあるまいか。舟運についても同様である。

◎水と城館

内陸水運と城館については既に述べたが、水を無視した人の生活はあり得ない。「水の手」の検索・考察は城郭研究重要課題の1つである。山城に於ては水の手の確保が死命を制し、山城攻略作戦の第1段階は水の手奪取におかれることが多く、「高白齋記」、武田信玄志賀城戦の記録にも、「廿四日卯刻ヨリ午刻迄志賀ノ城へ被取詰候廿五日未刻水ノ手被為…中略…八月大己酉細雨敵城ノ雲布ノコトクナリ六日甲寅卯刻板駿其外動闘東衆數多被討捕申刻一戰、十日午刻外曲輪燒子丑刻二ノ曲輪焼十一日己未午刻志賀父子高田父子被討捕」と、当時の攻城戦の姿をさまざまと描出している。

城館を含む帯濠・環濠遺構の水堀の働きには、積極・消極の2面があった。敵と洪水に対する防衛と、貯水・灌漑の両面である。前者については説明する迄もないが後者の例には、大胡町櫛越の稻垣屋敷東堀、柏川村の女瀬城、中村城の東堀がある。それらが赤城山支麓に集中しているのは勿論地形の特徴によるのだが、発掘調査で発見された高崎市上大類の天田屋敷等の例もある。

環濠遺構には、一般環濠遺構、その集った環濠遺構群、環濠集落がある。それらが、地勢・河川・湧水に支配されて分布するのは言うまでもない。

前橋市の南部から伊勢崎市の西部南部、玉村町一帯にわたる利根川の変流地帯と高崎市東南部、伊勢崎市北部の湿地帯には、最も稠密に認められる。

環濠集落には、高崎市中尾や、尾島町世良田・太田市堀中子のように、環濠遺構群を囲んで惣堀をめぐらしたものと、前橋市の山王・上佐鳥・藤川のように、網状に掘られた堀の間に住居の配されたものがある。前者には、中核の存在しないのが特徴で、中核のあるものは、鳥羽（金屋）城、力丸城のような城郭となる。

第2章 概 説

世良田は、新田館か長楽寺が中核といえるが、城郭とはならなかった。

環濠造構群の多くは、湿地帯間の細長い微台地にある。各造構の堀は、一重・二重が普通で、一般環濠造構と同様であるが、時には共通の堀をもつものも見られる。

一般環濠造構及び造構群は、太田市・新田郡やその周辺にもかなり多数認められるが、それらの中には、時代的にかなり遡ると思われるものも多く、館（たて、たち）と呼ぶ方が相応しい場合もある。笠懸野の扇状地涌水地帯に伴う水田地帯には、古い住居や集落も発生し、そこを縫って「あずま道」が下野国府に向って設けられていた。それら住居・集落の中には既に堀をめぐらしていたものがあったであろうことが、荒子遺跡の発掘調査で確かめられている。勿論「あずま道」附近だけではなく、赤城南麓一帯、同様であったのであろう。この地域では、条理制に先行し、「あずま道」に先行して環濠造構が存在し、中世に及んだと考えなければならない。

新田氏は、朝廷の権威を背に莊園の下司職となり、支配力を掌握して新田に来住、地名新田をもって氏としたのである。そこを開拓した秀郷流藤氏の人々は、その膝下に置かれ、その実力となった。山上氏・深津氏・大胡氏・赤堀氏・渕名氏・圓田氏・佐貫氏らがそれである。この人達の居館跡に囲まれた新田郡・太田市に、新田・徳川・大館・岩松・西谷・大島・鳥山・ら新田の分族の居所が介在する。しかし、そこは新田氏の開拓地とするのは誤解であろう。そこだけ、先住の人々が手をつけなかつたとは考え難いからである。

この地域の居館跡中には、中世より以前から存在したものもあると考えられよう。それに対し、利根川流域のものは、条理制の影響を受けたと思われるものが多く、年代も下げて考える必要がある。

環濠造構に類するものは、以上の地域だけではなく、少数とはなるが、周辺の傾斜地にも分布し、発掘調査によって発見される例も認められ、傾斜の大きくなるに従い堀は空堀に変る。かなり手をかけて、それに水を導入した例もある。条理施行地帯から遠く離れた場所の造構も、1辺100mという規格を意識したらしい例が多く、新田地方のものにもその傾向の見られるのは、新旧両時期のものが混在することを示す。

本調査では、濠を伴わない中世屋敷（例えば嬉恋村の下屋屋敷）も、便宜上この中に加えてある。

近世・近代において、環濠屋敷は、「構之堀のあるうち」として、富裕や、伝統を示す一種の象徴となり、外敵防護だけのものではなくなってくる。

(7) 城館造構の部分的考察

◎堀

堀は、築城の重要要素で、現地作業は堀の経始で始まり、最初の鉄立は堀の掘削から開始される。堀には水堀あり空堀あり、山城・丘城には堀切り・豊堀もある。閉堀あり、遠堀あり、捨堀あり、副堀等任務により呼称の別もある。平面的には、二重堀・三日月堀・内堀・外堀等の名があり、立体的観察には、箱型堀・薬研堀・片薬研堀・二段堀・三段堀・障子堀・畝堀などがあつて、近年の発掘調査で、この面の成果が大いに挙げている。

既に古代の堀については触れたが、古墳時代に堀が防衛・水利に用いられたことは容易に想像され、安中市注連引原の弥生時代集落には、長さ300mの直線堀が発掘され、中央部の掘り残し土橋だけで集落外との出入を規制していた。只、掘り土を堀の外側に盛ってあったが、中世造構の場合も急斜面の堀にはその例が少なくなく、弥生時代の特殊な手法ではない。しかし、築城の最も盛んであった中世に堀の掘られた灘度が最も高かったと言えよう。規模も構造も、中世末期に向かって増大・発達するが、近世城郭の堀に比すれば、格段に小さい。ここでは県下の城濠の特殊なものを記す。

遠堀には2種類ある。第1は国峯城・桐生城・仁田山城・新田金山城・奥平城・横沢城のもので、横沢の場合は塔の堀と呼び、南北に長い城の西側面に並走するが、他は城域の谷口を横断して外敵を遮る。第2種は、特定の主城が確認し難く、自然の雨裂等を利用し、内側に土居を築き、或は二重堀とし、或は「折」を設け、時には皆を構えて防塞とする。白井城の遠堀は横沢の類形で、合戦の伝説も残っている。

島名城東外堀・川場館北堀等、発掘調査によって、内側土居下犬走りに副之堀（溝）が発見された。八崎城では同様な堀の内縁と、ここでは外縁にも溝が添っており、しかもそれらは、石組をし粘土で固めた暗渠になっていた。構築目的は不明である。これらと異り、土居の内側下端に該当する位置に溝や、時には堀とも呼べるもののが掘られている例はかなり多い。角瀬城・新里村の善昌寺城・矢中環濠遺構の一部等にそれが見られたが、郭内排水の目的のほかに、大型のものには別な意義があろう。時には守兵活動の障壁になりはすまいかと思われるものさえある。

二重堀とは2筋の堀の間隔が、そこにあったと推定される土居敷幅だけのものをいう。間隔のより広い場合は、そこに1郭が設けられていたこととなり、複郭として取扱うこととなろう。二重堀の例は比較的多く、明徳寺城・太田市の道原城・高崎市の大下屋敷・同柴崎屋敷・松井田町の大王寺城・安中市の櫻下城等に見られる。勝山遠堀の一部も二重になっている。

三日月堀は通常丸馬出しに伴うものであるが、白井城本丸北堀の一部は形状からそう呼ばれる固有名である。

発掘調査で注意を惹くのは二段堀である。側面の中途に段のあるもので、薬研堀にも箱形堀にも丸底堀にもよく見られる。近世城郭だが高崎城二の丸堀には三段の部分もあった。規模が大きいからであろう。しかし掘り上げる作業の工程でだけのものならば、完成時に除けばよいので、その効用が不明である。大類城本丸北堀では片薬研の、外側斜面だけに幅広い段が設けられていた。長楽寺南方の堀では、殊に段が顕著に見られた。一般環濠遺構では二段堀が多いようである。段面が公孫樹葉状になった薬研堀も少くない。

箱根中山城に発見されてから障子堀が研究者の注意を集め、各地から報告されている。県下でそれが最初に発見されたのは上測名馬場屋敷のものである。上幅6~7m、深さ2m内外の空堀の底を横ぎる高さ30cm程度の仕切りが、5乃至7mを間隔して5か所確認された。屋敷の大きさは明らかでないが、1辺60~70mの方形であろう。この小屋敷の堀に、この障子堀はいかにも相応わしくないと感じる。他の例は、高崎市新保町の猿田屋敷と同市上中居城の北堀で、両者共水堀底の高低として出現した。縦横組み合せの障子をもつ堀は未発見である。

敵堀は、膳城北部の南北方向の二重堀の外側のもので検出された。二重堀のうち内堀は箱型で浅く、交通壕と推定され、2つの堀の間隔は4m内外で、そこに築かれていた土居は、武者走り無しでも高さ2mには達しないであろう。外堀は内側寄りの最深所で地山を1.1m掘り下げて居り、表土の厚さ1mを加えて、外堀の深さは2m程、上幅5mに計算される。堀の底幅3mのところに、堀の長さに添って三条の敵がつづいていた。敵の高さは30cm内外であった。敵堀のもう一つは板鼻城本丸北堀のもので、上幅約8m、深さ2.5m程の空堀の底に高さ底幅共に50cm程のなまこ状の敵が、堀の長さみなみに続いている。この敵は只1筋であるが、粘土を固め上げたもので、雨天などには滑って、歩行など思いも及ばなかつたであろう。既に確認されたのはこの2例に過ぎないが、江戸時代以来混同されていた障子堀、敵堀を明確に区別できた成果は大きい。

堅堀には、阻障専用のものと、交通壕を兼ねたものとがある。岩櫃城・後閑城・碓氷愛宕山城等の比較的緩斜面に掘られたものの中に後者が見られる。阻障としての堅堀には、上端が堀切に続いているものと、郭の側面から発し（時には腰部を分断する）ているものとがあり、別に、多数列をなしているものなどもあり、

第2章 概 説

二重堀切り端から下るものは二重堅堀がある。岩櫃城・国峯城の放射状堅堀群の遠望はまことに見事と言えよう。

堅堀列（仮称）は、県下では、松井田城行庵尾根の本丸北150m地点で尾根両側を下るもの只一つである。

堀切りとは、長さや、「折」などの有無にかかわらず、両端の切り放されたものを言う。山城・丘城では一般的なものだが、箕輪城を代表とする一城別郭の城群の、城を両断する「大堀切」は、規模と言い、性格といい、顯著な遺構である。

◎土 居

土居は土塁とも書き、土墨と同意である。堀の掘り取った土や、郭面を削った土などで築くのだが、石垣やせき板、しがらみで崩れるのを防いだものもある。石材を積み合せた石墨を用いた例は県下には稀れで、中世の構築と思われるは、高山城の百間築地只一つである。その傾向は、本県だけでなく、中部以東以北に強い。チヤシもその範囲に入れられよう。

土居は、高土居と低土居とに分けられ、高土居には、上面に武者走りのあるものとないものがある。どの場合も、敵の通視と、風を防ぐのが役目で、その上に上って敵を見、味方と連絡し矢玉を放つ必要があるものは上面に武者走りを設ける。平城では土居が必要だが、山城ではない方よい場合がしばしばである。

土居の工法に2つある。小泉城・桃井西城の土居の断面は、外部の最下部を芯とした貝殻状の層序を示し、柏原城・和田城では、ほぼ水平層の重墨であった。積層の内容から、先づ、堀の形を繩張りし、その間の表土を掘り取って、内側の繩の線、即ち郭縁に盛り、逐次掘り土をその上に盛り上げて内方に崩して行き、堀が所望の深さに掘り終った時、土居の形も出来上るのである。土居を必要な高さとし、武者走りを整えるため、堀の幅を広げて土を探って使う場合もあろう。こうして貝殻状断面の土居が出来上る。水平層の土居は、堀幅と深さを概定し、それによって得られる土量を見積り、土居敷の幅、武者走りの幅、高さ、犬走り等の規模を定め、最も適した位置に、堀の形、犬走りと土居敷の内側を経始し、掘り土を土居敷全面に均らし、順次に積み上げて行ったのである。勿論両方が混用されたものもある。

土居は崩されることが多く、発掘調査で直接捉える機会が少いが、内側の排水溝、柱穴群その他の遺構が存在しない事等から、土居敷が推定される場合もある。その際、土居構築に先行する遺構もあるので、それらを認定するとき、築城期との前後を誤らぬ注意が必要である。このようにして土居の存在がわかり、土居敷の幅からその高さも推定され、郭の内外を知ることができた。そうした例は県下でも少くない。また、傾斜地の城館で郭内の高所を削って地均しをしたものでは、高崎の矢島の砦・板鼻の徳昌屋敷のように、削り残された土居の下部が検出された例もある。土居の中には削り残し土居もあってよからう。

◎櫓台と烽火台

平井金山城北尾根の発掘調査で、石垣をめぐらした正方形の櫓台跡が発見された。また昭和63年発掘調査の下鎌田城では、掘り残し土橋を中心で設けた堀切りの両端に、両袖の櫓ともいえる二つの櫓台が見事に出現した。「相横矢」と呼ばれて近世築城学者に嫌われたものが、堀の歪みと台の向き方で難なく処理され、土橋前面を巧妙に側防している。今は無惨にも失われてしまったが、太田市下田島の岩松城の2つの隅櫓も、如何にも巧みに「相横矢」になるのを避けてあった。この単郭城の西北隅櫓は北と西とに堀の幅だけ突出し、有力な矢玉を北土居面とその前に送るように構えられ、西堀方面に対しても同様であった。ところがそこから80m南にあげられた西南隅櫓台は、南にだけ突出し、追手戸口前と南土居面その前に側射、斜射の射線指向しているが、西に向っては突出せず、西北隅櫓の横矢を防げないようになっていた。

岩松城の西北隅櫓台と同様なものが、高崎市浜川の矢島の砦にもあったが、これは現代の用水路で中央を

断っていた。岩松城のこの櫓台は、古墳を利用したものだということが以前から解っていたが、今次の発掘で円墳と確認できた。吉井町神保城の内郭北部に発掘された古墳の下部も、櫓台に利用されていたと推定できるが、それは東側に構えた戸口の袖櫓だったらしい。

大泉町の小泉城本丸の東北隅櫓台も、岩松城西北隅櫓台と同類型であるが、特別な土盛りをせず土居の角を張り出したもので、彦部館東北角にもそれが見られる。岩松城本丸北側の、「いだて」と呼ぶ広い台は東南角が突出している。そこには、全域を指揮する重要な櫓が建てられていて、後の天守閣の役目的一部分を果していたことであろう。富岡市の内匠城には、本丸の西南部に一段高く、天守郭に類似した別郭があり、更にその西部に櫓台が盛られている。そこには、天守閣の任務の一部を担っていたと考えられる。

烏川の崖上にあって、和田城櫓台跡として高崎市指定史跡となっている高台がある。これは、根小屋城と板鼻城鷹の巣烽火台をつなぐ烽火場となっていたのではあるまいか。のろしは夜間には火光信号に代えるので相互の見通しが必要なのである。火光を用いたことは、板倉町の道明山（灯明山）烽火台の名が端的に示している。これに似た形の烽火台は、山上城南郭の台・富岡市の十王山・西中之条の旗塚等に見られる。子持村の戸隠山の頂上には方20mの土居をめぐらした烽火場があり、石塊が散乱している。のろし窓の石材であろう。板鼻城の巣の琴平宮西方にある石組みも、のろし場であろうか。「城山」と呼ばれている峯のうち、津久田の城山・熊倉の城山のように烽火場だけのものもある。武田氏・・・・・等はこれら烽火場を連ねた通信連絡網を編成していた。雨天・濃霧の時には、鐘・太鼓・木鼓が用いられた。高平の鐘撞堂山も烽火場である。『永禄日記』3月3日の項に、「夜中金山ニカネナル由申間無心元分ニテ瑞ヲ遣也」とあるのは、警報と連絡であろう。

のろしには伝騎を併用し誤報を訊し、詳報した。これらの業務は、専任の人々がたずきわった。板鼻城の巣の北裏には「騰烽師谷戸」の地名があるといふ。烽火場には名胡桃城の天狗山（戸隠浅間山）・鎌原城の金比羅山・白井城の金比羅山等、修験関係を思わせる名が多い。修験者がそれを担当したのである。修験の人々は牒報・謀略の仕事にも当った。全国を自由に歩くことができ、山野を跋渉するため身心を鍛え、武技にも達していなければならぬからである。源平時代の物語にも、源頼光・義経・行家らに山伏のかかわりがあり、碓氷の貞光や、伊勢の義盛らの伝説も上州には見られる。南北朝期に至っては、新田義貞の挙兵に活躍した安養寺の触れ山伏があり、護良親王を頭にいたる、大和・熊野をはじめ全国の修験が南朝を支えて勦強な抵抗を持続している。戦国期には、北条氏の利用した風間一統の活躍があり、それを透破（すっぱ）と言い、関西の乱破（らっぱ）者と対抗した。上州で目覚しいのは真田氏の手足となって働いた吾妻修験の人々である。武田信玄が諏訪城・松井田城を略取させようとした下宰相があり、浦野義見斎や唐沢お猿の一類など、『加沢記』中には、それらの人々の働きが随所に散見する。小身の真田氏が、上杉・武田・北条・徳川の強豪の間に介在して異様とも言ふべき手腕を發揮し、遂に存続を全うしたのは、修験の牒報網を全開し駆使し得たからであろう。しかし、譲者達の身分は低く、浦野義見斎も5貫文を扶持されたに過ぎなかった。反問といって譲者は敵から逆用される危険もあったので、味方の機密を知れせぬため城内に入れず、別な拠点に置いたものである。岩櫃城の天狗の丸はそれで、背面の堀はその通路で、岩櫃神社を中心として別に構えられている。

孫子曰く、「知彼知己者百戦不殆、不知彼而知己一勝一負、不知彼己每戦必殆。」

◎戸 口

城館の出入口を「戸口」という。江戸時代の築城学者はこれを「虎口」と書いた者が多く、今の人々もそれにならっている。『武家名目抄』の居所24に「按城郭陣営の尤要会なる處を猛虎の歯牙にたとへて虎口とい

第2章 概 説

うなり」とあり、「書言字考節用集一の乾坤」には、「本朝俗陣營要会之處謂之虎口今按支那軍行以車為門日虎門拠此義乎」と、起源を中国に求めようとしている。しかし、中世の古文書や記録に城館の出入口を虎口と呼んだ例は全く存在しない。只、北条氏照の文書に2か所だけ虎口の文字があるが、それは城館の出入口に用いたのではなく、野戦の戦術的要点を指しているのである。前記「武家名目抄」、「書言字考」の文言も、城館の出入口を虎口と言ったのではなく、漠然と「要所」を指しているのがわかるであろう。城の出入口を虎威をかりて虎口と呼んでも支障はないが、館の出入口には相応しくなく、まして一般環濠遺構には用い難いであろう。

永禄8年10月27日と日付のある、河村誓真的「築城記」には「城の戸口内の見えぬように右構えにひつめて外より内の見えざるように掩えるなり。」とあるのに従がい、本稿では「戸口」を用いることとする。これにより、平易に入口の意味もとれ、戦術的要点との混同もなく、城館・一般環濠遺構の何れにも抵抗を感じず使用できるからである。

戸口を形成する堀・堀切りには、右左が喰い違っている例が少くない。鎌原城・里見城の追手、力丸城本丸各戸口は、堀幅だけ喰い違っているが、箱田城追手・北爪の皆二の丸戸口等の場合は堀幅の半分に過ぎない。これらの場合、門・木戸の建て方については尚、明らかになっていない。喰い違いの幅がそれより大きくなれば、門・木戸は側面を向く事になるが、それに該当するものは殆どない。昭和60年発掘調査の高崎市矢中下村環濠遺構では、堀幅だけの喰い違いの所に土橋がなく、そこから若干離れて、門跡と架橋脚の柱穴があった。或は、堀幅がそれ以下の喰い違いの場合は、喰い違い戸口ではないかも知れない。かと言って、横矢にも不充分であるので、発掘調査による多数の実例が集積されるのを待つばかり。

比較的急な傾斜をもつ尾根筋には、山城特有の喰い違い戸口がある。大戸城や平井金山城には數か所にそれが認められ、平井金山城ではその2つが発掘調査された。登って来た道は前面を石垣で遮られ右折した所に側面を向く戸口がある。登路からは戸口の存在はわからない。一つの戸口には一対の柱穴が見られて木戸跡と確かめられ、もう一つの方は6個の石を据えた土台据えの門が推定された。土台据えになったのは、そこが岩盤だからである。この城では、東の別尾根にも三か所の喰い違い戸口があるが、何れも右折して入る「順の喰い違い」である。これらと反対に左に折れて入るもの「逆の喰い違い」という。

堀戸口と呼ぶ、堀の1端か中途が戸口となっているものがある。山上城西南戸口・多比良城追手戸口・諸松城追手戸口等がそれで、敵の阻止には適しているが、城兵の出撃等には窮屈である。鍵形に折れた堀の場合も同様であるが、この形式のものが、嶺・膝窪・田島・膳等、赤城山南麓城郭に集中し、地域慣用になっている。

枡形は、出撃のための施設であるが、近世城郭のものとされている。その祖型と思われる構造をもつ戸口が中世城郭にも見られる。片岡根小屋城本丸の東西戸口・平井金山城の本丸北戸口・松井田城安中曲輪西北戸口のように、門或は木戸の前に窪所があり、窪所の外口にも木戸を設けた形で、先づ門或は木戸を開けて一団の兵を窪所に出して、門或は木戸を閉め、外木戸を開いて出撃させ、同様にして次の一団を窪地に出し、外木戸をあけて出撃させる。この方法を繰り返して所望の兵力を突出させるのである。とかく退廃的になりがちな籠城兵に、出撃の意図を常時示して、士気を鼓舞する精神的效果もねらったものだという。

横矢は、現代兵語で言う側防機能である。戸口の片側の土居・堀を前方に張り出し、戸口の前面に、斜射・側射を指向できるようにしたものである。これにより、戸口前に寄せる敵を萎靡混乱させ、出撃に当っては、妨害する敵を射撃によって制圧するのである。

松井田城の諸戸口・寺尾中城の戸口・平井金山城の各戸口等には背後に武者屯が設けられている。城の中

心部から離れているが、特に重要な戸口であって、そこは一つの砦と見なしてもよい。

馬出しは、中世城郭の施設中、最も重視されるものである。「鈴録」という書に、「一、謙信流に蟄亀利繩七箇条と云事あり馬出しの習なり 馬出草の丸馬出草の角馬出升形向で小口砦の土居馬出無しの小口左袖の様子是也、左袖とは両袖にする事法なるを一方略するを云なり、馬出は人數の出る処を敵に見せぬ為ばかりなり」とあり、「海国兵談」には、「馬出に丸馬出角馬出 珠馬出…等種々の口訣あれともさのみ秘決の沙汰にも及問敷他…餘り念入て普請するにも不及也」と、むしろ軽視している。

群馬県下に現存する馬出し跡をあげれば、名胡桃城・棚下の砦・箕輪城玉木山下の丸馬出し・碓氷安宿山の砦の角馬出し・箕輪城本丸戸口前の曲尺馬出し・同じく二の丸戸口前の郭馬出し・同大手戸口前丸戸張郭馬出し・明徳寺城東戸口の郭馬出し・新田金山城御前曲輪東下の丸馬出しの九か所だけであった。それらのうち4か所は箕輪城に集中しているのだが、広島浅野家に伝えられた「諸国古城図」中の箕輪城図には搦手戸口の真の角馬出し・虎輪門前の郭馬出しが記されている。また、群馬町天田氏所蔵の上野国城図中倉賀野城図には異形の馬出しが描かれている。

それに加えて、近年の発掘調査で、馬出しと考えなければならぬ二つの遺構が検出された。一つは富岡市内匠城の追手戸口前のもの、他は平井金山城北第2堡塁(仮称)のものである。前者は戸口前の長さ100m、外側からの高さ2.5m内外の土居である。それは外堀に並行せず西に向って開いていた。この土居にかくれて戸口を出て集結、西に突き出すれば有利に出撃し得る。金山のものは、木戸前にひろがる30×20m程の馬屯である。その外方の傾斜は大きく、土居なしでも外から、馬屯郭面を見ることはできない。木戸から出てここに集結すれば自由に出撃できるのである。中世の人々は歴戦の体験により、地形と諸条件に最適の施設を案出したのである。

「海国兵談」には、無難作に、「餘り念入て普請するにも不及」と軽視しているが、遺構でも古圖でも極めて念を入れていることを見られよう。この言う所は、江戸時代の机上築城学者達が定めた、草、行、真の型式に、拘泥する必要はないと言ったのである。馬出しばかりではなく、用語や定義などについても、素朴に中世の人々の思想や態度に戻って、中世城館跡に目を放たねばならない。

(8) 古文書・古文献と城館跡

伝説や諸戦記は、城館や、それにまつわり興亡した人々の生活や心情をさまざまと描き、それをより深く知ろうとする意欲をそそり、城館の構造や城史の研究の動機をゆり起した。しかし一面、多くの誤解も人々の脳裏に深く生みつけた。物語は人の心を豊かにするので、それなりの価値をもつであろうが、真実を追求しなければ止まないのも人の真情である。

古文書・記録は、遺跡と相俟って、城館の歴史や構造を知る資料である事申す迄もない。記録中古城図は極めて少く、それも多くは江戸時代に描かれたものであって、最も尊重される浅野家に所蔵されていた「諸国古城図」中の、箕輪・安中・沼田・館林の4城は江戸時代初期の状態を描いたもので、平井金山城だけが城跡を標式的に表わしているのみである。群馬町金古の天田氏方にある「上野国城図」には、箕輪・倉賀野・平井詰城・板鼻・後閑・乗附村之山古城と武州の騎西城等の10図が集められているが、聞き取り書き程度のものを、櫓や塗籠塀まで加えて、近世城郭様に描いたものである。只一つ「乗附村之山古城」の図には「此城訪観太郎ト云人出張構へ候所ト云、三分一間ノ割、享和元年辛酉年八月十日図ス」と註した簡単な見取図だが、現寺尾上城跡と符合し興味深い。また高崎図書館所蔵の「御家事向大概附録」に、高崎市所在の、島名・大類・上中居・下之城・茶臼山城・寺尾中城・浜川の砦・石原屋敷と前橋市の石倉城の図が収められて

第2章 概 説

いる。各城館跡とも遺跡の見取図であるが、忠実に描写していて、価値が高い。渋川の長尾輝景氏方にある平井城の図は、小形の毛筆線書きの疎図である。また前橋市元絃町の長尾一央氏所蔵蒼海城図には、染谷川・牛池沢を堰止めた一番俵・二番俵・一番橋・二番橋等の位置が示されていて重要資料だが、これも城跡の見取り図である。

『松陰私語』は、長楽寺の松陰西堂の覚え書きで、永享一文明のころの史実をまざまざと伝えていて、極めて貴重な史料である。その中に、新田金山城をはじめ27の城館名が記され或は関連してくる。覚え書きであるため、足利の八門城の描写など、同市櫛崎城との混同ではないかと思われる、等の疑問点もあるが、「文明元年己丑二月廿五日金山城事始…上古之城郭保護記為證之」と肩を聳やかして記し、「水路西面之陸地築崎より云地云々」と、古館林城が築崎を西にする現大袋城跡である事を教えるなど、研究者への恩恵は、枚挙に遙がない。高谷城が新里村の武井城であること、文明9年足利成氏が7か月間滞留した滝の御所が現天田屋敷であることが、この覚え書きから導かれ、角瀬の騒擾から、利根水運の示唆を与えた事など、満巣すべて史料である。同じ長楽寺の義哲が書いた『永禄日記』も、金山城の普請や、箕輪落城直前の西毛・東毛の動きを知るには欠くことができない。史料とは言い難いが『加沢記』は北毛諸城館のあらましを知るには、よい手がかりとなる。

『吾妻鏡』も完全な史料ではないが、寺尾城・新田館等の実在を証し、その中に記載された人々の名から間接に城館につき教えられることが多い。

古文書は、集ってそのままに歴史となるともいえようが、意外に、城郭そのものにつき説明してくれるものは少い。県下のものでは、いくつかの城控と次の1通だけかも知れない。

(「彦根、後閑文書」)

九十五人御着到

十武人 北表中之矢倉

十武人 同所川端之矢倉

四十一人 東之角より川端迄塀六十七間

十人 同所之次より川表塀三十二間

十人 馬出二階御門 但笠原衆ニ可加

十人 同所矢倉 但笠原衆ニ可加

五人 上下大手改番

已上

十月十二日 奉 行 衆

後 閑 殿

天正14年から16年までの間の發給で(15年であろう)、北条氏が後閑重政に厩橋城の守備分担を指示したものだが、これにより当時の厩橋城構造の一部を窺うことができる。天正16年正月4日と同23日付の北条氏印判状によればここは本堂曲輪と呼んだ郭で、城外に通じた路を、16年23日に切り落している。郭の東角から利根べり塀は67間(122m)あり、川端と北表之の矢倉という二つの櫓があった。二階のある櫓門もあり、門の前に馬出しが構えられ、そこにも櫓があつたらしい。大手には五人ずつ番人を配してあった。上下とは上番下番の意であろう。当時の厩橋城は近世城郭とあまり変りがなかったように思われる。浅野家所蔵の箕輪城の図は、これより12年程後のものであるから、廃城時の箕輪城は、厩橋のこの姿よりかなり進歩していた

2. 上野における中世城館の特色

ことであろう。その箕輪城跡にも、一片の瓦も見当らず、一個の礎石もない。発掘調査によらなければ実体の把握はできない。

昭和63年、高崎城跡東北隅の発掘調査で、かなり大きい書院造りと思われる建物の跡が検出された。それは19世紀半ばのものと推定されたが、掘立てで、柱穴の底には、長さ30cm、径15cm程の捕った杉材が、柱受けに入れられていた。19世紀できえ、掘立ての建物は用いられていたのである。

中世館跡の状態を伝える史料は極めて少いが、玉村町上茂木の田口氏方の近世成立文書中、正徳3年(1712)に書かれた「家伝」に、「其家広館深堀塗塚高門揚櫓」と記され、「雑話」の一冊には、「茂木の屋敷明暦万治寛文の初の比家か、への民家廿戸に近く、内門を出て右方に庄右衛門と云者居れり…其次西の方に九右衛門…内門の外左方に弥助…庄右衛門か前外門の内左方市兵衛…久左衛門が前外門の内右方金左衛門…外構堀の外右の方…以下略」と、二重堀構え(複郭)の「木本館」内の、内外堀の間には家人達が住んでいたことを伝えている。17世紀半ばのことであるが、50年前とさほど変わっていないと思われる。

このように、近世成立の文書中にも、中世を知る内容をもつもののあるのを忘れてはならない。

(9) 城館跡の発掘調査

群馬県下で、城館関係発掘調査は、偶然発見のものも加えて、97か所である。殆んどが部分調査で、推定範囲の30%以上に及んだのは16か所に過ぎない。それにもかかわらず成果は見事にあげられている。

平井金山城北尾根では、角柱を用いた二つの門・三か所の木戸・橹台・堀基礎の石組み・堀切・豊堀・腰郭多量の石垣等。それにより、天文年間における築城技術の程度が提示されたのである。

名胡桃城では、有柄銅鏡形の丸馬出しが検出され、二個の青銅製のものを含む多くの鉛弾の発見により、伝説と異り、この城は攻め落されたことが判明した。

大胡城は10年以上の間に6次にわたる発掘が行なわれ、北城の戸口・堀・土橋・分郭・南郭の戸口跡・三の丸の馬出し堀・その他の複雑な遺構・二の丸の枡形門・水の手門の全容が解明された。それに伴い、城の構成の時代的変化が、古文書の抜けによって、かなり明らかになったのである。現在二の丸・三の丸間を深く抉って流れる用水は、江戸時代に、三の丸の西側から、こここの堀切りを通して東側を流れるように変えられたと推定されるに至った。

吉井町の神保城では、丘城の全貌をほぼ知ることができ、袖瀬城では、出土の多数の墓石から、天正末年(戦国終末)の城であることを確認し、下鎌田の両袖櫓と堀状武者屯を囲らした城相に、北条氏築城の手法と重る、地方築城の慣習を見た。

全县発掘調査の30%を占める高崎市の城館跡発掘調査では、調査の度毎に意想外の遺構の出現に遭った。矢島の砦では、郭内北部のコ字形の堀で区切られた内郭・北新波の砦では鍵形内堀で、さなきだに狭い郭内が2分されていること。矢中下村の大沢屋敷では、西北部に堀で仕切られた分郭と、戸口堀外の木戸柱穴・島名城本丸内の内郭・上中居城の行き止り堀と井戸との関係及び障子堀・大類城の馬出し状小郭・猿田屋敷の三重半円弧堀と堀障子・熊野堂館の窟状遺構等々である。

昭和63年、太田市下田島岩松城跡では更に意外な結果に遭遇した。ここは、岩松氏の裔である新田氏が住んでいた。その頃、屋敷は空堀をめぐらし、西北角、西南角には既に◎土居の条で説明したとおり、模式的に2基の橹台が配されていた。当に一点の疑いもない単郭平城の遺構であった。ところがその見事な北堀は、近代(おそらく明治初年)掘られたものとわかり、中世の堀はその南側に掘り出され、二つの堀は西北橹台の下で一つになっていたのである。

第2章 概 説

ここで結論することは、発掘調査を行うことなしに、城館跡遺構の解明はなし得ないということである。城館跡の発掘調査には、出土品は比較的少いものである。しかしこの例は記載しなければならない。大胡城越中屋敷（北城）では轡・羽口・灯明皿が出土したが、灯明皿の一つは底の中央に穴があり、他の一つは側方下部に二つの穴があけられていた。そこに燈心を通して皿の内側で火を燃せば、油のしたたるのが防げるのである。世良田の井戸跡からは、内耳の鉄鍋が得られ、他の井戸からは、片口の付いた大石鉢が発見された。石の擂臼は、殆んどすべての場合見つかるのであるが、太田市今井屋敷の160個（破片共）は異例で、製造跡の説も出ている。かわらけや陶器も多く、天目茶碗もしばしば発見される。それらの示唆するところは、盛んな粉食、蒸すことよりも煮ることの多かったこと。茶の湯と茶器の鑑賞は文化の一端を窺かせる。国峯城御殿平からは香爐の出土もあったという。板碑や五輪塔・宝篋印塔もかなり多く、殊に杣瀬城出土の墓石100あまりの内に天正16年記年のあったことは、この墓石が造立間もなく持ち去られたことを示し、当時の人々の宗教心を窺わせるものがある。しかし一方、同城中央部の土坑から出土した20枚程の皿には、中心に梵字⑥を記した輪宝が描かれ、魔除けの盛行などもあったようである。

城館跡からは、青銅の古鏡が多数まとめて出たことも那波城等に知られている。秩父高松城出土の青銅塊に熔け残りの古鏡が見えたことは、それらが通貨としてではなく、鉢物の素材などにも用いられたらしく、名胡桃出土の青銅製続丸は、その用途の一つを示唆する。鉛の入手は困難でも青銅貨は収集し易いからである。

第3章 主要中世城館跡解説

1. 北群馬の中世城館跡

(1) 白井城

北群馬郡子持村白井にある丘城。利根川と吾妻川の合流点、吾妻川に面した断崖上に築かれている。城の中央部に本丸（東西約130m、南北95m）があり、本丸は、高さ3～4mの土居で囲まれていて、北側の中央に枡形門の跡が残っている。本丸から北へ、二の丸・三の丸・北郭があり、その間に堀切りが残っている。北部の東隅に、物見台があり、北郭の北・吾妻川寄りに金比羅郭・總郭があった。本丸の南側に、南郭・新郭がある。吾妻川の合流点である舌状の台地を利用した城であり、全体の構造が三角形をしており、三角形の最長の一辺は吾妻川の断崖で、北側と直角をなす東側の一辺に平行に白井宿がある。

築城年代は不明であるが、白井が越後と上野を結ぶ交通上の要地であり、両国の守護である山内上杉氏の被官として長尾氏が入部する。上野国の戦国時代の始まりとも云うべき享徳の乱（1454）は、公方足利成氏と管領上杉氏と戦いであり、上杉家執事である白井長尾景仲はこの戦乱の中枢にあって活躍した。長尾氏本拠の白井に城郭の必要性もあり、白井城の築城はこの乱の前後（15世紀中ごろ）で、景仲によって築城されたものであろう。景仲の孫景春は、父景信の死（文明5年）によって上杉家の家宰職が叔父總社長尾忠景に代ったことから、対立していた古河公方足利成氏に属し、上杉氏に叛いた。白井城は、戦乱の渦中にあり、城を出て戦った景春は、永正2年（1505）白井城に復帰する。この間、文明18年（1486）発生が白井戸部亭に泊り（「北国紀行」）、長享2年（1488）禪僧万里集九が白井城中を訪れている（「梅花無尽巻」）。景春は、永正11年（1514）72才で没し、子景英続いて孫景誠が家督を嗣いだが、大永7年（1527）家臣の為に害せられた。この後、總社長尾忠景の嫡男忠景が白井城主となった。永禄3年（1560）9月、上杉謙信の関東出陣に参陣した。同8年（1565）2月、上野攻略のため諏訪上宮・新海・明神へ武田信玄が願文を捧げているが、箕輪城攻略を第一に、神威に余力あれば、白井・總社・嵩山・尻高の諸城を攻略せんことを折っている。白井城が、西上野攻略の目標として掲げられている。信玄は、永禄9年（1566）9月箕輪城を落し、翌年總社城を落した。白井城については、少しおくれて吾妻地方を占領した真田幸隆・信綱が攻略を進め、元亀3年（1572）3月白井城を占領し、信玄より「白井落居、本望満足同意たるべく候」（真田文書・県史一中世3-2702）という書状をもらっている。白井城を奪れた長尾忠景は、八崎城にて機会をみており、白井城に戻った。天正6年（1578）上杉謙信の死によって御館の乱が起り、上野国の武士たちは景虎を支持し敗北した。白井長尾忠景は、武田勝頼に所属した。天正10年（1582）武田氏が滅亡したあと厩橋城の北条高広と共に北条氏に属した。天正11年4月、忠景が病死すると、小田原に人質として預けられていた政景が帰されて城主となつた。天正18年、北条氏の没落と共に白井城も開城した。

徳川家康の関東入部によって本多康重が白井城主（2万石）となり、元和2年（1616）西尾忠永、元和4年本多紀貞が城主となり、元和9年（1623）紀貞の病没により廃藩となり白井城も廃城となつた。



第1図 白井城 (596)・仁居谷城 (597) 略側図

(2) 長井坂城

勢多郡赤城村棚下と利根郡昭和村川額にわたって築城された戦国時代の城。西側に流れる利根川に面して高さ約100mの断崖があり、赤城山西麓を利根川に流入する長井沢が形成する大きな河谷を北側の堰として、南北約80m、東西40mの本丸が築かれ、本丸を、北・東・南の三方から囲むような形で二の丸を設置した。堀切りと土居で防禦をつくり、二の丸の東に、二の丸を包みこむような形で三の丸がつくられて、要害堅固な城郭をなしている。

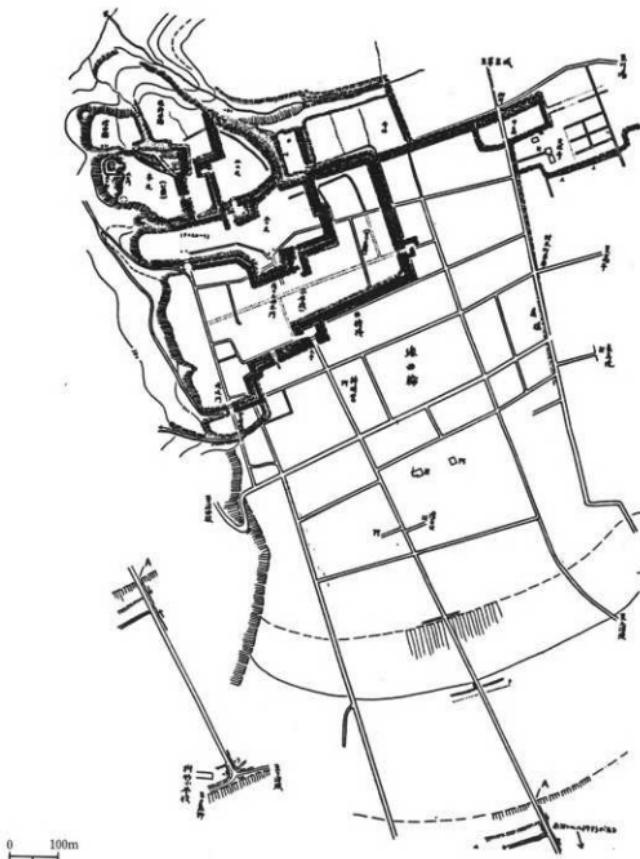
築城者、築城年代は不詳であるが、永禄3年（1560）9月、上杉謙信の関東出陣のとき、長井坂に陣を置いて沼田城を攻めたとある（『加沢記』）。天正8年（1580）5月、沼田城は武田勝頼の家臣真田昌幸によって攻略された。真田昌幸は、武田勝頼と上杉景勝と間に結ばれた越甲同盟（天正6年）の条項の一つである東上州攻略のため、南下しようとして、北条方に味方する白井長尾憲景の家臣牧和泉守・須田加賀守の守る長井坂城を攻めている。長井坂城は、白井長尾氏の北方防禦の城として築かれた。昌幸の攻撃により、真田方の支配下となつたが、天正10年、武田氏の滅亡により織田氏家臣滝川一益が上野に入り、沼田城と共に長井坂城もその支配下となつた。同年6月2日、本能寺の変により滝川氏が上野から退去すると、真田昌幸が再び沼田城を占拠した。上野一国支配を進める北条氏政は、長井坂城を沼田攻略の前線基地としている。この時期が、長井坂城が城郭としての機能を十二分に発揮した時期であった。城構えなど、この時期の遺構がよく残されている。また、このときの戦いの様子は、戦記物（『加沢記』『上毛伝説雜記』など）にも記述がある。天正18年北条氏の滅亡により、北条方に属して戦った白井長尾氏が没落し、長井坂城も廃城となつた。



第2図 長井坂城（855） 略側図

(3) 沼田城（倉内城・霞城）

沼田市倉内にある戦国時代から江戸時代にかけての平山城。利根川と薄根川の合流点の東北、河岸段丘の台地上にある。両川に面して比高約70mの断崖となっており、地形を利用して築城された。築城については明らかではないが、戦記物等（「沼田記」・「加沢記」）によると、桓武平氏の子孫で沼田地方の領主であった



第3図 沼田代（314） 略側図

沼田景泰が築造したという。又は、沼田頼泰（頼泰の頃は、上杉頸定より一字押領したという）が、享禄3年（1530）から天文元年（1532）までの3年間を費して築城したという。

永禄3年（1560）上杉謙信の関東出陣のとき、沼田城の北条孫次郎以下北条方の武士たちが討死し（正木時茂書状、県史一中世3-2104）、沼田頼泰はじめ沼田衆は上杉氏に従った（関東幕注文、県史-2122）。以後、沼田城は、上杉氏の関東経営の拠点となり、越後より河田重親・松本景繁・上野家成等を在城させ、厩橋城の北条高広と共に、上野における上杉氏支配の中心となった。永禄9年（1566）武田信玄の箕輪城攻略による西上野支配に対し、同12年越相同盟が成立した。この同盟の成立条件である北条氏秀を謙信の養子とする件で、沼田城で初対面をしている。天正6年（1578）謙信の後継をめぐっての御館の乱がおこり、上野の上杉氏の家臣は、景虎（北条氏秀）を支持したが敗北し、天正8年（1580）藤田能登守信吉は、武田方に降り、同年5月真田昌幸が入城した。天正10年（1582）武田氏が滅亡し、織田信長の家臣滝川一益が上野に入部し、沼田城は真田氏より滝川氏に移ったが、同年6月本能寺の変によって滝川氏が去ると、再び真田氏が支配した。

関八州の支配を主張する北条氏政と、北毛二郡を支配している真田昌幸の対立は、天下平定を目指す秀吉の仲裁となり、天正17年（1589）利根川を境に、沼田城は北条氏と決定され、北条氏の家臣猪俣邦憲が城主となった。猪俣は、約束を破り真田領の名胡桃城を占領したことから秀吉の怒りをかい、翌天正18年北条氏は滅亡しま。

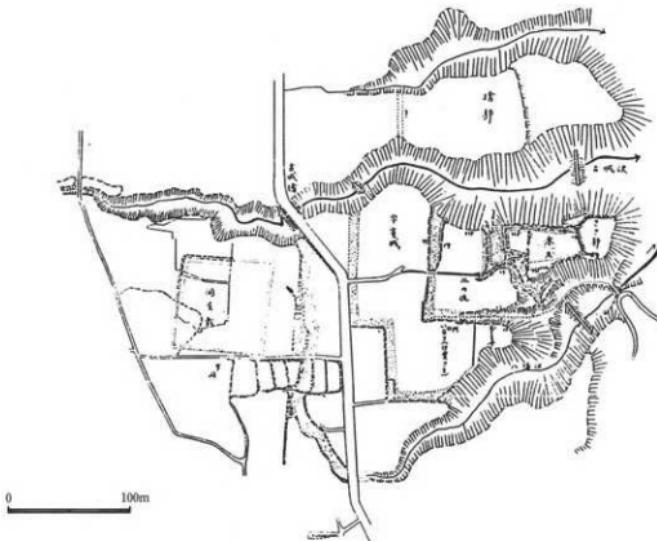
天正18年（1590）徳川家康の関東入部に際し、秀吉の申し入れがあり沼田城は真田昌幸に還された。昌幸の嫡子信幸が沼田城主となった。慶長5年（1600）関ヶ原合戦に、真田昌幸は西軍に、信幸は東軍に分かれた。父昌幸が没落した後、真田氏領は信之（幸）が繼承し、沼田城は長子信吉が城主となり、以後、熊之助（信吉長子）・信政（信吉弟）・信利（信吉二男）と続き、天和元年（1681）信利の代に改易となった。この時に、城は破却された。以後、本多・黒田・土岐氏等が城主となって明治にいたる。

（4）小川城

利根郡月夜野町橋下にある戦国時代の城である。利根川の右岸の河岸段丘上にあり、断崖を利用した崖端城である。城は、東方に利根川を見渡す台地が、西の方から利根川に流入する北側の古城沢と、南側の八幡沢によってつくられた自然の大堀切によって囲まれている。東側の断崖に面してささ曲輪があり、一段高くなつたところに本丸がある。本丸は、東西60m、南北20mで土塁のあとも残っている。本丸と西側に接する二の丸の間に、折りの入った堀切りがある。二の丸の西に三の丸があるが、西部の長さ200m、巾60mで、二の丸の西から南をかこむ形の鍵形の大きな郭となっている。

小川城は、明応7年（1498）沼田景久の子、景秋によって築造されたという。小川景秋の子秀泰（秀康）は小川岡林斉と称し、文武に秀れた武士であったが、嫡子彦四郎を火事にて失ない後嗣がなかった。永禄3年（1560）9月、長尾景虎（上杉謙信）の関東出陣に、その陣に参加した武士たちの陣幕の紋を記した「関東幕注文」には、沼田衆の中に、沼田頼泰の次に「小川 同紋 親類同」とあり沼田一族であることを示す。小川秀康は、後嗣として、家臣となっていた赤松孫五郎を養子とした。小川城を嗣い赤松は、小川可遊斎と名乗っている。可遊斎は、永禄10年（1567）3月7日、謙信より「越後国より毎月15疋（馬の）づつの荷物の受用」を命じられている（米沢市立図書館文書）。小川城の位置が、上越国境に近く、三国峠・清水峠の両道の合流する要の場所であった為であり、謙信は、可遊斎の力量を高く評価していたことがわかる。天正6年（1578）上杉謙信が病死し、東上野は武田領となつた。天正7年10月、武田勝頼の家臣真田昌幸は、名胡桃・小川両城を占領し、翌年5月沼田城に入城している。小川城主であった可遊斎は、勝頼に所属し「今度

可齋忠信に就き一同忠勤神妙に思召され候」（県史一中世3—3031）と所領等安堵された。天正10年（1582）武田氏滅亡により真田昌幸が利根・吾妻二郡のを支配すると、可齋は上野国より退去して越後国へ赴いた。小川城は、天正17年利根川を境界に秀吉の裁決によって北条・真田領間の線引が行なわれると、名胡桃城と共に境目の城として重要性が増した。翌天正18年（1590）小田原城が落城し、北条氏が没落し、利根・沼田、吾妻地方が真田氏領となると、小川城は存在の意義がなくなり、廃城となつた。



第4図 小川城（838） 略側図

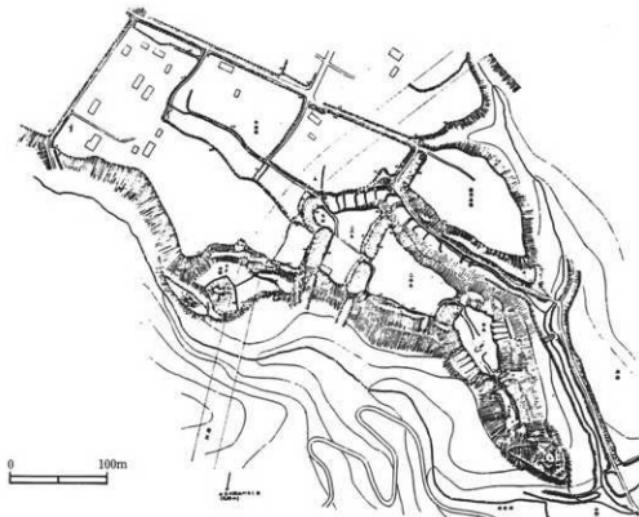
(5) 名胡桃城

利根郡月夜野町下津にある戦国時代の城、利根川の右岸にある河岸段丘上の急峻な崖を利用した崖端城である。城の南側には、湯舟沢があつて、深い河谷をなしており、北側の般若郭との境界の深い谷と、東側の利根川に面した段丘と三面を断崖でめぐらしている。利根川に面して本丸（東西70m、南北25m）があり、本丸の東に一段下って「さき郭」がある。本丸の西に二の丸、三の丸があり、三の丸には角馬出しがある。本丸の北には深い濠をめぐらした般若郭があり、南側の湯舟沢に面して水の手郭が築造されている。本丸、二の丸、三の丸の間は、土橋で結んでおり、喰い違いと土居がある防禦体制が堅固になっている。

築城年代は不詳。伝説では、沼田景久の三男名桃胡三郎景冬の築城と伝えられる。小川城と共に、沼田城の北の防衛線上の支城の一つである。永禄3年（1560）上杉謙信の関東出陣により沼田城をはじめ沼田地方はその支配下に属した。名胡桃城も上杉氏の支配下にあったが、天正6年（1578）謙信の死による御館の乱で、武田勝頼と上杉景勝の間に結ばれた越甲同盟によって東上野が「勝頼手柄次第」という条件付きで武田

1. 北群馬の中世城館跡

領となつた。勝頼の命を受けた真田昌幸は、天正7年(1579)名胡桃城に入城し、沼田城攻略の基地とした。翌年(天正8年)5月、真田昌幸は沼田城を攻略した。同年7月朔日の武田家定書(県史7—中世3030)に、小川可遊斎が望んでいた名胡桃300貫の所領は、先約があつて渡せないので代りの場所を与えるとある。『加沢記』によると、天正10年(1582)武田氏滅亡の後、真田氏が利根吾妻二郡を支配し、名胡桃城には昌幸の家臣鈴木主水を置いた。関東支配を目指す北条氏政は、北毛2郡の所属を主張して真田昌幸と争っていたが、天正17年豊臣秀吉の裁決によって利根川を境とした。北条領の沼田城代となった猪俣邦憲は、秀吉の裁決に背き、名胡桃城を攻略したことが直接の原因となり秀吉の小田原攻めの口実となつた。名胡桃城は、利根川に面した小さな城郭ではあるが、その遺構をよく残していること、秀吉の天下統一完成の最後の戦いである小田原攻の原因となった城ということで存在の意義は大きい。



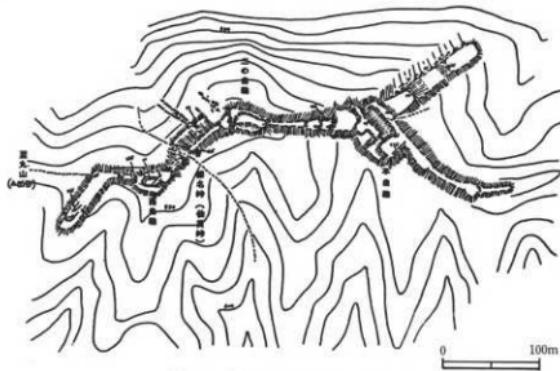
第5図 名胡桃城(839) 略側図

(6) 棚名峠城

吾妻郡高山村から利根郡月夜野町下津へ越える道筋の、高山村中山字櫛現の北の尾根に、棚名峠と呼ばれる峠がある。峠には、石祠があり、正面には「棚名神社」・右側面には「明治22年2月吉日 中山村中」とあり棚名社を祀っていることから棚名峠と呼ばれていたことがわかる。この尾根より東へ約200m、南へ折れて約100mの付近に、堀切りのあとが残っている。

棚名峠城については、後北新氏の上野攻略に、北条氏邦の武将として活躍した猪俣能登守邦憲の城塹（猪俣邦憲棚名峠城法度、林太郎氏所蔵文書・県史中世3-3502）が残されている。塙書によると、「亥（天正15年）極月廿七日」の日付があり、本文の内容から①敵の城に近く、足軽の出入等が確認できる程の距離であり緊張感が伝ってくる内容となっている。②曲輪向丸山に物見を置いたとあり丸山に当る山があること。③棚名峠という地名があること。④棚名峠城法度は、林治部左衛門あてとなっており、番頭の林氏は、中山衆の中に林氏がいるし、峠の下にある三鷗櫛現社の宮司と代々林氏がつとめている。⑤天正15年当時、吾妻・利根を支配していた真田氏に対して、後北条氏の関八州支配の成立のため猪俣邦憲が沼田城、名胡桃城に対する攻撃を強めていたこと。⑥上野国内における北条氏治下の城塹の一例である。

この城は、沼田城を中心利根地方と吾妻地方を支配している真田氏と最前線で対戦している北条氏の城である。切迫した状況での城番の様子が記されているが、天正15年の史料のみでその前後のことがわからぬ。天正18年の北条氏の没落と共に廃城になったものと思われる。



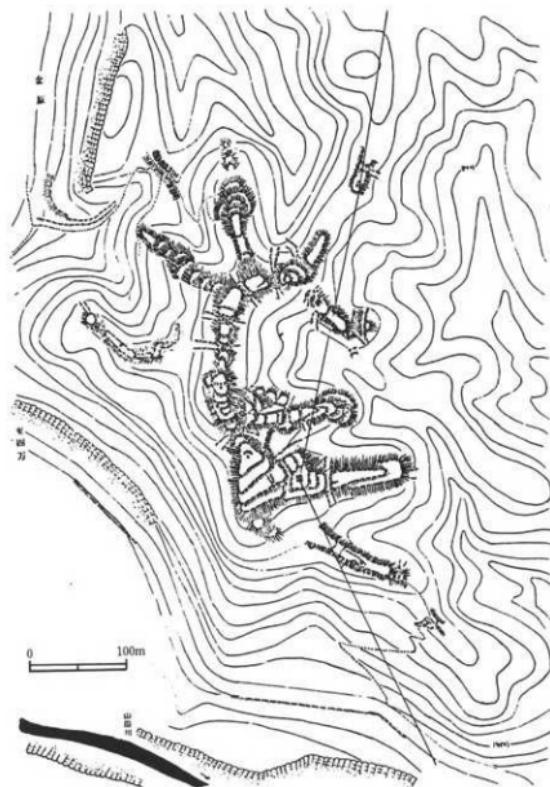
第6図 棚名峠城 (819) 略側図

(7) 仙藏城 (内山城)

吾妻郡中之条町折田字内山にある山城。四万川（山田川）の左岸にある崖を利用して築造されている。四万川に沿って南北に連なる尾根の中央部に堀切りがあり、北側に本丸、南に二の丸がある。急峻な岩山であり、北・西・南の三方面からの攻撃に対して守りが固い。嵩山城とは、成田原を間にして、連絡のとれる見とおしのよい位置にあり、この城の城主を成田長門守と郡内の記録（『再編吾妻記』）等にあるが、明らかでない。城の構造からみて、永禄6年（1563）10月13日の岩櫃城落城のあと、斎藤越前守憲広の末子城虎丸が

1. 北群馬の中世城館跡

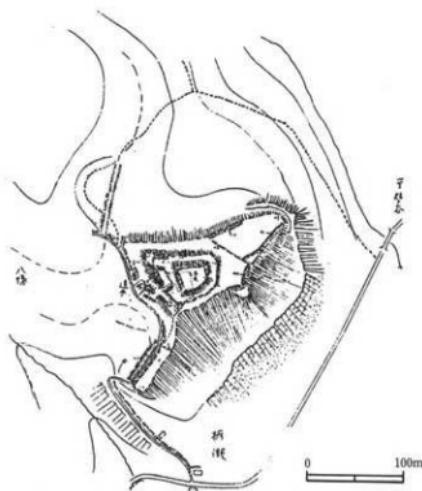
嵩山城に籠り、上杉謙信の支援によって、岩櫃城の真田幸隆、武田信玄の勢力と対立していた永禄8年11月までの約2年間が、城としての機能をもっとも發揮している期間であった。四万川を天然の堀として、嵩山の出城としての役割を果した。『加沢記』によると永禄8年11月の、真田幸隆の嵩山城攻めの様子を記している。嵩山城の斎藤城虎丸が頼りにしていた重臣の池田重安父子が真田幸隆の誘によって城を出たので、白井城の長尾氏・沼田城の河田氏等の加勢を要請した。真田幸隆は、加勢の到着する前に城を落そうと自ら先頭に立って「その原のこなたなる仙藏の要害に懸け上り、軍の下知をし給ける」とあって、仙藏の城を真先に落して、嵩山城に追っている。永禄8年以降、武田信玄の家臣として折田氏が配置され、仙藏城の東にある折田神社宝物の「諏訪大明神」神号を記した軍旗を信玄より拝領したと伝えている。嵩山城落城によって、吾妻郡はほぼ全域が武田領となり仙藏城の存在意義もうすれてしまい廃城となった。



第7図 仙藏城（753） 略側図

(8) 横尾八幡城

吾妻郡中之条町横尾字折瀬にある戦国時代の山城。赤坂川と名久田川の合流点にあり、北と東側は赤坂・名久田両川に面した深い崖になっている。八幡山と呼ばれる段丘上の小山の山頂部に約40mの方形の平地があり、四方を約4mの土居で囲んでいる。南側に、腰曲輪が残っており、井戸等も残っている。群内の記録（「吾妻記」）には、尻高三河守が、大永年間（1521-28）に築城したとある。三河守の家臣塩原源太左衛門が城代として配置されたが、真田氏の吾妻郡進出に伴ない、天正8年（1580）富沢豊前守が配置された。同年5月、真田昌幸が沼田城を占領した。上杉謙信死後の越後の大乱（御館の乱）で、越甲同盟が結ばれ、北条氏より養子となつた上杉景虎が敗北し、東上野は武田勝頼の領と定められた。真田昌幸の沼田攻略は、北条氏政を激怒させ、沼田城をはじめ、吾妻郡への攻撃を強めその機会を窺っていた。北条氏の吾妻侵入を防ぐための最前線が八幡山城である。天正10年（1582）3月武田氏が滅亡し、同年6月本能寺の変によって織田氏が没落すると、上野国は北条氏の支配となつた。しかし、利根・吾妻郡は真田氏の領であり、北条との間に紛争が続いた。北毛二郡は、父昌幸にかわつて真田信幸が支配していた。信幸は、北条氏の攻略に備えて天正16年（1588）4月26日「八幡山番帳」（田村文書・県史7、中世3-3511）を定めた。番帳には、63名の番衆（吾妻地方の武士）を二組にわけ、交替で番につけているが番衆の弓・鉄砲・鎧などの武具を氏名と共に書き上げている。番頭格の、富沢豊前守・狩野志摩守・同右馬之助・折田軍兵衛の4名宛の朱印状となっている。天正17年12月、北条氏邦が白井城より八幡山城攻めに寄せてきたが、富沢豊前守以下の将兵が固く守りこれを退けている（「加沢記」）。



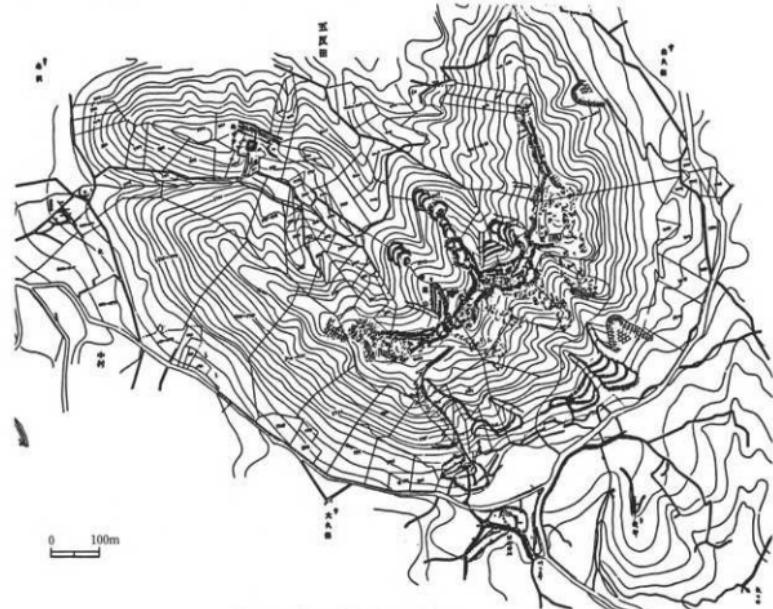
第8図 横尾八幡城 (761) 略側図

(9) 嵩山城・(嶽山城・武山城)

吾妻郡中之条町五反田にある山城である。標高789mの岩山を利用して築造している。山の南麓の親都神社（ちかとじんじゃ）から山頂まで約230mの高低差があり、東側の大岩を大天狗・西の尾根に露出する大岩を小天狗と呼び、古くより山岳信仰の山として、山伏の道場であった。

永禄6年（1563）10月、岩櫃城が落城したとき、城主齊藤越前守恵広は、越後の長尾景虎（上杉景虎）をたより四万山の奥を越えて越後国へ退去した。その折、供をした山田与惣兵衛に、形見の刀を渡しながら嵩山城に残し置いた末子城虎丸の行末を頼んで落ちて行った（『加沢記』）とある。嵩山の城に、齊藤恵広が末子城虎丸を配置したのは、岩櫃城が落城すると、四万川（山田川）を境として、岩櫃と嵩山の対立であり、その背後にいる武田信玄と上杉謙信の戦いとなる。翌永禄7年から永禄8年11月の嵩山落城までの間に、四万川の東側にある嵩山城の属城仙藏（中之条町上折田）・城峯（同西中之条）・八幡（同横尾）の三つ砦を整備して真田方の攻撃を防禦する体製をとっている。嵩山真城の本城、嵩山の山頂部大天狗と小天狗と呼ばれる岩山の間にある鞍部を「無情平」と呼ばれている。本丸と実城と呼ぶが「実城平」（みじょうだいら）が本丸となっている。堅堀が残っており帯曲輪が、西側に四段、北側から東にかけて、三段にとりまいている。

永禄8年（1565）2月、上州出陣にあたり武田信玄は、諏訪上社と佐久新海明神に齋文を奉納している。箕輪城と共に、嵩山城も攻撃目標に掲げられている。真田幸隆は、池田佐渡守父子を味方にかけて城より退出させ、同年11月総攻撃をした。冬季となり越後勢の救援軍が来ない時節であり、攻防戦のあと籠城中の齊藤城虎丸は自害し、城と運命を共にした。以降、廃城となっている。



第9図 嵩山城（760） 略側図

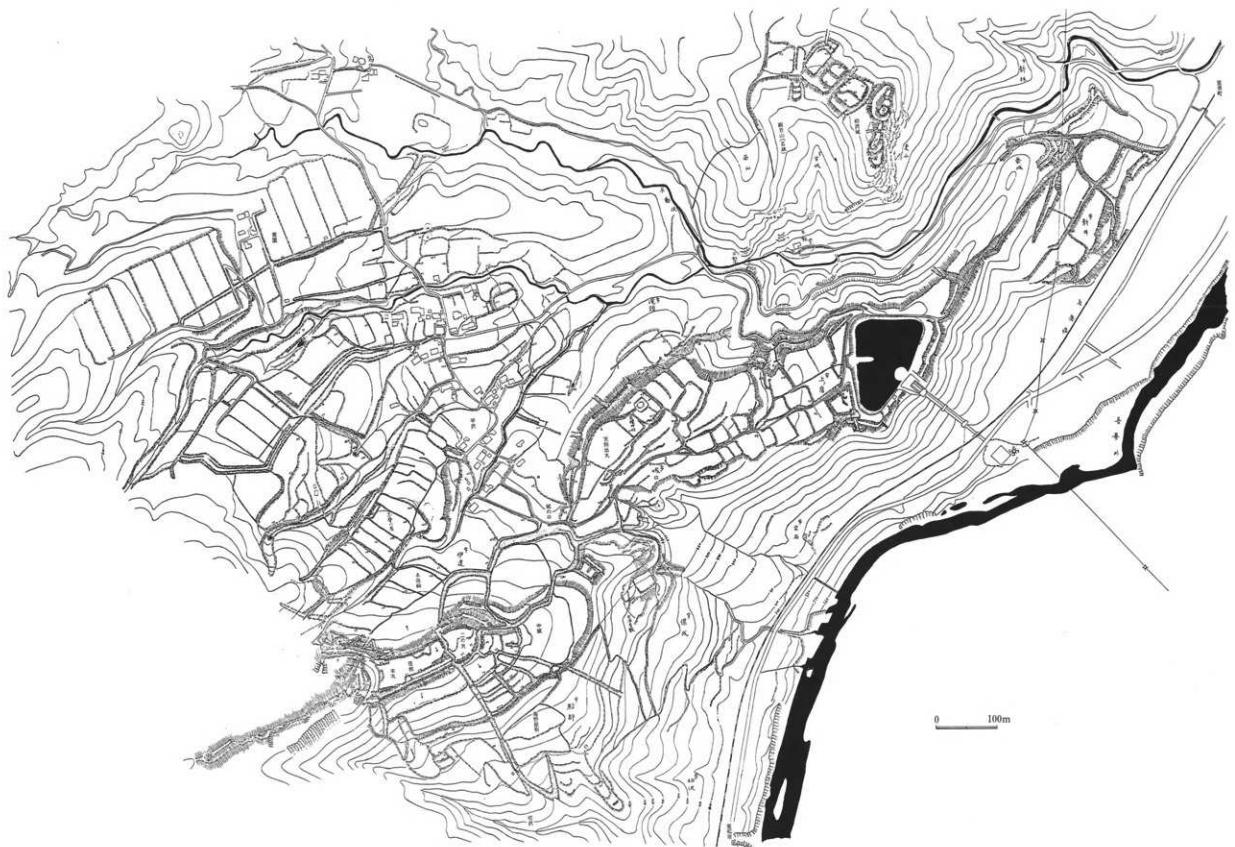
00 岩櫃城

吾妻郡吾妻町原町平沢にある岩櫃山東側の中腹に築かれている。岩櫃山は、吾妻川の左岸にある標高795mの安山岩質集岩の岩山であり、吾妻川の河岸段丘上に、切立てたような岩肌を見せており、これを天然の要害として東方の尾根に続く丘陵を利用して構築した山城である。西側の山腹によせて「居館（いだて）」と呼ばれる本丸・二の丸・中城があり、南側の吾妻川方面の急斜面に堅壁があつて北方の岩山と共に南方吾妻川対岸よりの攻略を拒んでいる。本丸の北側にある平沢の城郭、本丸の東方にあつて天狗の丸の三つの部分を総称して岩櫃城といふ。城の東北方にある観音山の北にある柳沢城は、岩櫃城の鬼門に当る城であり、別城一郭として岩櫃城の出城となつてゐる。

岩櫃城の築城年代については、明らかではない。郡内の戦記物（『吾妻記』・『加沢記』など）によると、応永12年、齊藤憲行（吾妻太郎）が築城したという説があり、関東管領上杉憲忠が鎌倉公方足利成氏に殺された享徳の乱（1454）には、長尾昌賢が上杉頼定を奉じて岩櫃城に入城し、成氏方の15万人の大軍と戦ったとする。岩櫃城主を吾妻太郎と呼ぶが、吾妻太郎と岩櫃城が結びつくのは吾妻太郎行盛である。吾妻太郎行盛は、南北朝時代に里見氏（新田一族）に攻められて、吾妻川の立石河原で腹を切り自らの首をかき切って投げたところ対岸の首宮（かみのみや、川戸神社）までとんで行き、ここに首を葬り、体は長福寺（吾妻町岩井）に葬り、没年月日「貞和5年（1349）5月25」管を刻んだ五輪塔が建てられた。以上は、有名な吾妻太郎の伝説である。行盛の子千王丸は、母の実家である碓氷秋間氏にかくまはれて成人し、上野守護である上杉憲頼の援助によって岩櫃城をとりもどし、戦国時代に真田幸隆（武田信玄家臣）によって落城するまでの六代の間、行盛の子孫が吾妻太郎を名乗つてゐる。

吾妻氏が、岩櫃城主として史料の上で確認されるのは、吾妻太郎六代目の子孫で戦国時代に活躍する齊藤越前守憲広（基國ともいう）の代である。永禄3年（1560）8月、北条氏康のために上野国平井城を退去した関東管領上杉憲政を擁して、三国峠を越えて上野国へ長尾景虎（後の上杉謙信）が出陣した。景虎は、沼田城を攻略し、城将北条孫次郎以下数百人を討捕えた。「明間・岩下・沼田之城を攻め落」（正木時茂書状・県史資料7・中世2104）したとある。岩下の城が吾妻の岩櫃城を指している。齊藤越前守憲広は、旧主である上杉憲政に抵抗なく所属しており、翌永禄4年2月ごろに成立したと推定される上杉方の陣に加った上野・下野・武藏等の武士たちの陣幕の紋を書きあげた「関東幕注文」（上杉家文書・県史資料7・中世3-2122）に、「岩下衆 齊藤越前守 六葉柏、山田 同六葉かしわ」と記されている。岩櫃山の西方に、岩下の地名が残っていて行沢馬頭観音（鎌倉時代・木彫・県重文）、馬頭神社（『神道集』の子持山縁起の中に出てくる）の存在は、戦国期の吾妻氏が岩下と深く関係したことを示す。岩下衆の名前が、齊藤越前守と山田の二名のみで終っているのは、抜紙があったためと推定される。上杉・武田の対立は、景虎（上杉謙信）の関東出陣を機に、信州川中島から上野国に移った。信玄の命を受けた真田幸隆は、西吾妻の鎌原・羽尾の対立に入りし、永禄6年（1563）6月鎌原を支援して鎌原城を占領した。同年8月、真田幸隆・昌幸父子は、横谷（吾妻町松谷）と大戸（同大戸）の二方面から岩櫃城を攻めた。幸隆は天陥を利用した守りに固い岩櫃城を力攻めにすることを避けて、雲林寺（長野原町）の住持を使にたてて和議を結んだ。和睦した後、幸隆は鎌原宮内少輔に命じて城主の甥齊藤弥三郎・羽尾道雲の弟海野能登守・長門守兄弟などに働きかけて味方に誘った。永禄8年（1565）10月13日夜半に、城主の館に火をつけ、それを合団に城の大手門を開けて真田幸隆の軍兵が城内に乱入した。齐藤越前守は、吾妻山の峰づたいに逃れて越後国へ落ちて行った。

武田信玄は、岩櫃落城後直ちに、三枝土佐守を城代とし、真田幸隆を吾妻守護とした（『加沢記』）。城内の内応者齊藤弥三郎・海野兄弟など武田方に所属した武士たちの人質を甲府へ送るよう命じ（県史資料7・中



第10図 岩櫃城(781~786)略測図

世3—2217)、翌7年2月14～15日にかけて折田将監・八須賀縫殿助・湯本小次郎ら吾妻の武士たちの本領安堵と恩賞として領地を充行っている。旧城主齊藤恵広の末子城虎丸は、四万川(山田川)を隔てた対岸の嵩山城に籠り、岩櫃城と対立していた。永禄6年10月から嵩山落城の同8年11月までの2年間、岩櫃城(武田)と嵩山城(上杉)は、それぞれの属城を配置して兵力を結集しており、四万川を境界としてその特色が残されている。永禄8年11月嵩山城が落城して吾妻郡は武田領となつた。岩櫃城は、吾妻の中心的な城として重要性を増していく。

天正元年(1573) 武田信玄が急死し、翌2年真田幸隆が死去した。天正3年(長篠の合戦で、真田家の家督を嗣いだ信綱が戦死したため昌幸が家督を嗣いだ)。吾妻の城と呼ばれている岩櫃城の城代は海野幸光であった。幸光は、城の東南麓に屋敷があり、「とのやしき」という地名が残っている。天正6年上杉謙信が急死しその跡目をめぐって御館の乱が起る。これがきっかけとなり武田勝頼は上杉景勝との間に同盟を結び、上野国東半分を得た。真田昌幸は、勝頼の命により天正8年5月沼田城を攻略した。沼田地方を支配して、岩櫃城の重要性が高まる。城代海野幸光と、昌幸との間に領内の武士たちの支配について対立が生まれた。天正9年、海野長門守・能登守兄弟を誅殺して、真田氏の直接支配が確立された。天正10年、織田・徳川連合軍に攻略されている武田勝頼を、岩櫃城に迎え入れて再起をはかることを提案し、許された昌幸は、急き岩櫃城へ戻り、四万・沢渡・山田・榛名山へ榎人を入れ、3日の中に岩櫃城の西側に御殿を建てた。勝頼は、間もなく天目山で自害し武田家は滅亡した。武田滅亡後も、吾妻は真田氏領として昌幸の叔父矢沢頼綱が城代として配置された。慶長5年(1600) 関ヶ原の合戦で昌幸・信幸父子は東西にわかれた。慶長19年(1614) 大阪冬の陣のあった年、岩櫃城の城下町平沢に市が立ち人が集ったことを家康が不審としたと聞き、信幸は岩櫃城を破却した。

(II) 大戸城

吾妻郡吾妻町大戸の城山にある城をいう。手子丸城ともいう。温川右岸にある標高約700mの岩山の尾根を利用して築造されている。温川に面して急峻な崖となっており、本丸は、西端の最高所にあり、東西40m、南北25mの広さがあり、尾根上に郭を配置している。

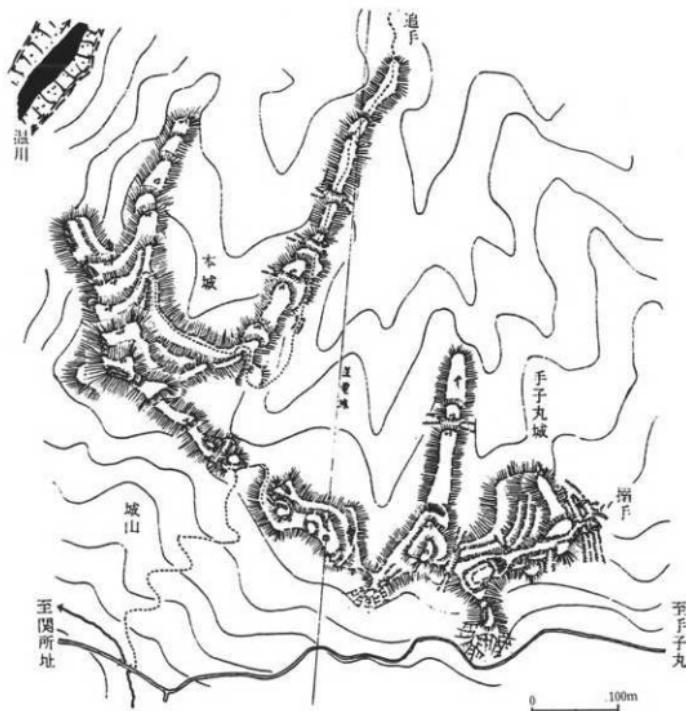
大戸は、榛名山西麓の交通上の要所であり、境目の城として争奪の対象となり、城主も変遷があった。室町時代の領主について、連歌師柴屋軒宗長の『東路のつと』(群書類從所収)の中で「大戸といふ所、海野三河守宿所に一宿して、九月十二日(永正6年)草津へつきぬ」とある。永正10年(1513)4月吉日、長野恵業は榛名山巣殿寺に「大戸要害落居せしめ、惣業の本意に属し候者、百疋之下地を榛名溝行権現へ、末代寄進し奉るべく候」という願文を奉じている(榛名神社文書、県史資料7・中世3—1921)。海野三河守の大戸在城と、長野氏の大戸城攻略の願望が記されている。この時代の海野三河守の宿所が、手古丸城の本丸とは考えられない。現在の大戸宿の南西丘陵上にある館跡(大戸平城)あたりに三河守の館があり、戦になると大戸城に籠ったものと推察される。

永禄3年(1560)9月長尾景虎(上杉謙信)の関東出陣に参陣した武士たちの陳幕の紋を記した「関東幕注文」(上杉家文書・県史資料7・中世3—2122)の箕輪衆19名の中に、「大戸中務少輪」が、「羽尾修理亮」と共に「六れんてん」と紋を記している。大戸氏の紋が羽尾と同じ「六れんてん」であり、これは、真田氏と同紋である。真田・羽尾氏は滋野姓海野氏を称しており、永正6年の大戸氏は海野三河守とあり、永正10年に箕輪城の長野氏と対立があつたが、永禄3年には、長野恵業を旗頭とする箕輪衆に属していたことがわかる。

第3章 県内主要中世城館跡解説

永禄4年（1561）武田信玄の先方衆として、真田幸隆が西吾妻に進出すると、大戸氏は武田方に属した。永禄6年（1563）10月、岩櫃城攻めには、真田氏と共に戦った。

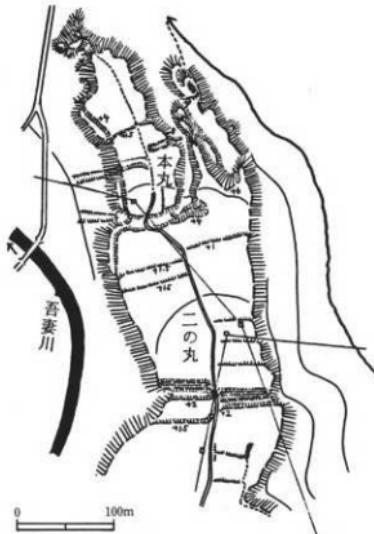
大戸は、株名山南麓より西吾妻を経て、信濃・越後への通路であり、吾妻を支配した真田氏の境目の城として重要となった。永禄10年（1567）4月16日浦野宮内左衛門尉と同能化丸あて武田信玄充行状（「浦野文書」）によると三島（吾妻町三島）以下6か所の領地を越国本意の上戦功の上支給するとしている。天正7年（1579）3月18日の武田勝頼定書写（新編会津風土記所収「浦野文書」）によると、浦野宮内左衛門尉が大戸真楽斎であり、大戸城主であった。天正10年（1583）武田氏滅亡のあと、後北条氏が進出して大戸城を占領、齐藤折津守定盛を配置して吾妻方面攻略の前進基地としている（「齐藤定盛書状」・「内山文書」・「茂手木文書」他、県史7—中世3—3109～12）。天正18年（1590）後北条氏の滅亡と共に、大戸城は廃城となった。



第11図 大戸城（775） 略側図

(12) 鎌原城

吾妻郡嬬恋村鎌原にある戦国時代の城。吾妻川右岸の河岸段丘によって形成された急峻な崖を利用して築造している。南北400m、巾150mの城郭を三つの堀切りで四つの部分にしている。南方より二の丸・本丸・東曲輪・笠曲輪の四つの部分に分かれている。築城の時期は明らかでないが、城主鎌原氏は、滋野姓海野氏の子孫下屋将監幸房の孫幸兼が鎌原郷に土着して鎌原氏を称し、その子孫という。貞治元年（1362）10月18日、「ししだ夫且那職譲状」（『下屋文書』・県史6・中世2-1008）に「かまはらのや六・や七」が見える。この地方は、鎌倉時代には三原庄があり、海野幸氏が地頭であった。鎌原氏も海野氏の子孫であるとしており、戦国時代には、西吾妻地方の吾妻川より南（右岸）を支配し、北部に勢力を持つ羽尾氏と対立する勢力を持つようになった。永禄3年（1560）春、鎌原幸重は、一族の真田幸隆の紹介を求めて武田信玄の家臣となった。同年9月、上杉謙信の関東出陣の際に成立した「関東幕注文」によると、鎌原氏と対立している羽尾修理亮や大戸の大戸中務少輔は「箕輪衆」として、岩櫃城の齊藤越前守は「岩下衆」として上杉氏の陣に加っている。郡内で武田方として旗色を明らかにした鎌原氏に対して、齊藤越前守・羽尾修理亮など圧力をかけたので鎌原幸重父子は城を出て信州へ逃れた。永禄5年8月（1562）信玄は真田幸隆に鎌原を支援させ、羽尾幸全入道が鎌原退去後に居城としていた鎌原城を攻略させ、奪回した。『加沢記』によると、羽尾入道が万座温泉に入湯に行き、城を空けた留守にとり返したとある。その後鎌原幸重は、嫡子中務少輔と共に岩櫃城攻略の先鋒として活躍し、真田氏の家臣となり近世まで続く。沼田藩真田氏の代には、家老としてこの地方の領主となった。鎌原城は、沼田真田氏改易の天和元年までは、鎌原氏の本拠として使用されたと思われる。



第12図 鎌原城（805） 略側図

2. 東群馬の中世城館跡

(1) 駿橋城（前橋城）

前橋市大手町一丁目とその周辺と推定されるが、現状は慶応3年（1867）再築の跡で、中世の駿橋城はほとんど利根川によって流出し残っていない。考えられることは、利根川変流により、新旧両川の間に挟まれた要害の地に築城され、上野国の中央に位置していたので、中世中毛地方の要の城として重視された。

本城は利根川分流による三角形の天然の要害地形を利用した崖端城である。「石川忠房留書」によると、武田信玄が駿橋城攻撃の場面に「彼ノ城ノ岸ノ高サ八九尋ノ所へ打カケ」と竹梯子をつないで掛けさせて攻撃したことがあり、当時西側の利根川左岸は数10mの断崖をなしていた。同書に「本城ノ内ニ天神山ト云高所ニ、謙信ノ祈願所御座敷御サ候、此座敷數金ノ手オマイノ鑓天井ナリ」とある。本丸には一段高い所があったようである。おそらく、この本城と呼ばれる本丸を中心に利根に添って郭が並べられていたのだろう。山崎一氏は県庁北の高浜曲輪から南へ本丸・二の丸・鼠曲輪（仮称）、二の丸東に三の丸などあった列郭式構造と推定している（『群馬県古城墨址の研究』上巻）。また、現在児童公園となっている幅広く深い空堀は、利根川が変流以前に分流していた名残りで、そこを空堀として外郭の守りとしたともいう。酒井氏がこの城を大改修して前橋城をつくるが、このとき、利根川渓にあった大蓮寺を東方に移し、東の金井宿によった橋林寺を広瀬川の北に移している。大蓮寺はもとお虎が測の近くにあったので、虎渕山の山号がある。また、南には長昌寺があるので、これら寺院を出丸のように城の各方面に配置していたようである。橋林寺の旧位置金井宿は、現在の前橋市消防署の西あたりというから、旧東山道もこの付近を通っていたと推定され、北方には大渡の地名もあり、新旧利根川を渡る交通上からも重要な位置を占めていた。しかし、遺構はほとんどなく不明な点が多い。

駿橋城の築城年月は不明である。総社の蒼海城にあった長尾氏は、利根川変流により要害の地となった石倉に城を築いたが、度々の洪水により城の大部分は流失し、利根川分流により三角形の台地は増え要害の地となった。このころ、総社長尾氏は衰退期となり、箕輪城の長野氏が台頭してきた。長野氏は東上州進出の拠点としてこの要害の地に駿橋城を築いた。「前橋風土記」は「不知何将以何時築焉、下之城長昌寺主僧日、有固山宗賢者築前橋城（駿橋城）、至于今設歴代城主之木主（位牌）矣、見所記乎其木主、第一延徳元年（1489）固山宗賢、其二道安、其三道賢、其四賢忠、其五前芸州大守芳林、其六宗祝、其七平嵐院也、自是以下酒井累代之木主也、各訂其姓名則固山宗賢者長野左衛門尉也、道安者道賢之父長野道安也、道賢者長野弾正入道々賢也、賢忠者長尾入道賢忠也、芳林者北条安芸守也、宗祝者北条丹後守也、平嵐院者平岩七之助也」とある。この他諸書に固山宗賢を駿橋城初代とするので、15世紀末に長野氏により築城されたとみるのが妥当であろう。大永7年（1527）12月16日付の、総社の長尾景顯から越後の長尾為景への書状（上杉文書）によると、長野左衛門大夫（箕輪城主）が「色々廻計義顯景一類以可為滅亡分」とし、駿橋宮内大輔が日夜攻撃しかけてきているので援軍を依頼している。駿橋宮内は長野道安か道賢であろう。天文20年（1557）以後、上杉憲政を追って上野へ進出してきた小田原北条氏康は、一時駿橋城を攻略して福島氏、ついで朝倉能登守政成、節岡山城守を入れて守らせたが、永禄3年（1560）長尾景虎（上杉謙信）は駿橋城を攻略しこの地で越年している。永禄4年編の「関東幕注文」には、駿橋衆として長野藤九郎、同彦七郎の名が記されている。景虎は長野賢忠に駿橋城を守らせたが、同5年3月、松山城（埼玉県吉見町）救援の出陣に城主長野氏が参加しなかったことから賢忠を誅し、3たじよう北条（毛利）高広父子を城代として当城を守らせた。同9年箕輪落城後は武田氏の西上州進攻、東から北条氏康の進出があり、翌10年高広は上杉方から離反して北条方となる。しかし、

2. 東群馬の中世城館跡

同12年越相同盟が成立したが、この同盟成立には高広の活躍があり、高広は上杉氏へ帰参が許された。天正6年（1578）の御館の乱で、高広と子景広は景虎（北条氏康の子で上杉謙信の養子）に味方して敗れ、翌7年2月景広は討死し、高広は当城に帰った。この年7月武田勝頼の上野進出により高広は勝頼に降り、厩橋城は武田方の上野制覇の拠点となる。同10年3月武田氏滅亡により滝川一益が箕輪城から厩橋城に入り上野諸将の位置をするが、同年6月の本能寺の変により、滝川は厩橋を去り西上し、当城は再び、後北条氏の上野支配の拠点となる。北条高広は、上杉景勝を頼って、後北条氏と対したが、北条氏政は同11年正月から厩橋城攻めをし、同12年高広は北条氏に降伏し、当城は氏政の弟氏邦の属城となる。天正18年の小田原の段には、北条氏邦の敗退により当城は豊臣方に降り、同年8月平岩親吉が3万3000石で入封した。慶長6年（1601）平岩氏に替り酒井重忠が川越から入封し、2代忠世の代に近世城郭として大いに整備され、以後寛延2年（1749）酒井氏に替り松平氏が入封した。しかし、利根川による城地の崩壊がひどく、明和4年（1767）松平氏の川越移城により廃城となる。慶応3年（1867）前橋城は再築されたが、明治4年（1871）廃藩となり、前橋城は廃城となる。厩橋城から前橋城への名称の変化は、既に天正時代には両者混用されてきたが、酒忠清の慶安年間より正式に厩橋を前橋に改めた（『一谷山記録』）。

参考文献

『群馬県史』資料編7、「前橋市史」1・2・3・6巻、山崎一著『群馬県古城墨跡の研究』上



第13図 厢橋城（10） 略側図

(2) 大胡城

勢多郡大胡町大字河原浜に所在する大胡城は、赤城山南麓にのびる丘陵上に位置している。この丘陵は南北に長い筋鱗形で、東西310m、南北に城跡北限の大胡神社(近戸神社)北の堀切りから南へ約670mほどあり、東は荒砥川で限り、西は旧風呂川とその西の台地の武家屋敷を含み、南の低地に城下町が形成されていた。標高は北端の高い部分が183m、南端170mほどの丘陵で、そこに7曲輪が設けられた並郭式の平丘城である。なお、赤城南面城団の中心の城であることから、この城団の外保は古利根川左岸が西から南を、東は柏川辺までを含む広域を防禦地帯とし、同族や同心衆の城砦が分布している。

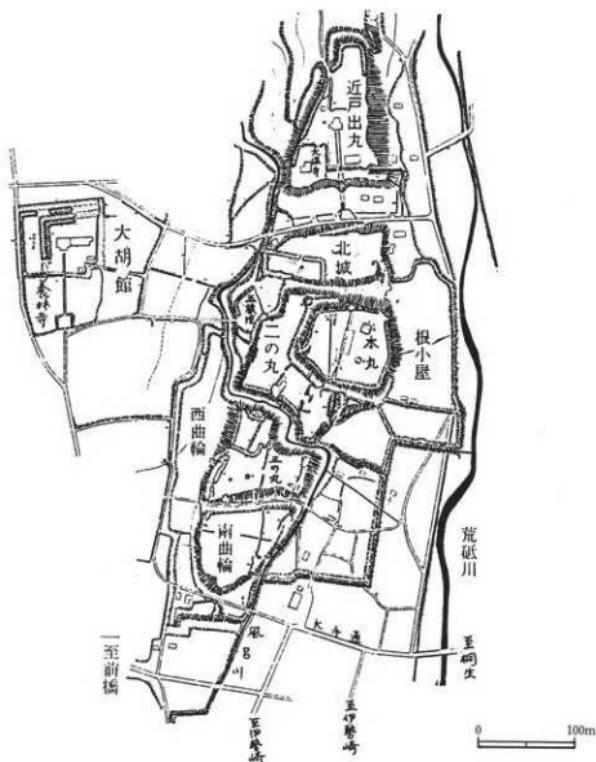
現状は近世初期の牧野氏時代から酒井氏時代の遺構で、丘の中心に本丸、その北に越中屋敷(北曲)と近戸曲輪、西に二の丸、玉蔵院曲輪、風呂川を越えた南に三の曲輪・四の曲輪があり、西方一帯は武家屋敷、東の荒砥川との間の低地は根古屋、南の低地は城下町となっている。各曲輪の間は空堀と自然の川が利用され、風呂川は15mほどの断崖で二の丸西南を囲い、東の崖とともに城の中心部を天然の要害で包み、本丸北の空堀は広く堀切られて越中屋敷と接している。風呂川以南の曲輪は捨曲輪である。

本丸は堀の内側に土居を廻し、一辺80mほどの正方形に近い郭で、北東隅と南縁中央に虎口があり、南虎口東側から北へのびる土居で本丸内が二区に区切られている。この仕切りは下段石積上段土居の腰巻土居で、南北両端が広がり櫓台の存在が推察される。本丸虎口の城門は、北方噴違い、南方樹形と思われる城图もあるが現状では破壊されその跡は見受けられない。南虎口からは空堀内を通路として二の丸と越中屋敷へ通じている。二の丸は、東の虎口から空堀へ下り根古屋に通じ、虎口西の広場と二の丸の中心部は土居で仕切られ、その虎口は樹形門虎口で、現状も石積みがよく遺存している。二の丸南縁西寄りに土居の内側が凹字状樹形があるが、ここから風呂川へ下りる水の手虎口がある。樹形石積みとともに水の手虎口はこの城の特色をよく遺している。北曲輪の越中屋敷は、牧野氏時代に城主忠成の弟越中守儀成の屋敷とされた曲輪で、東南隅に食違い虎口があり、北の近戸曲輪への虎口がないから、近戸曲輪も捨曲輪であったろう。山崎一氏は、北に堀切、南に腰曲輪があり、独立した単郭構造であることから、初期大胡城は近戸曲輪を中心とした部分と推定している(『群馬県古城墨跡の研究』上巻)。西方には長善寺・養林寺など6か寺があり、長善寺には大胡氏墓、養林寺には牧野氏の墓があり、ともに侍屋敷を包み出丸の役割をもっていたと考えられる。

大胡氏は、「吾妻鏡」の建久元年(1190)1月7日の条に源賴朝入洛の供奉人中大胡太郎の名が見え、「平家物語」にも足利忠綱に従った武士に「続く人々、大胡、大室、深須、山上、那波の太郎」と見え、藤原秀郷流大胡氏が平安末期にはこの地に土着していた。「法念上人行状絵図」には、建久6年に大胡隆義・実秀父子の法念に帰依し、法然から長文の手紙をうけていることなどあり、鎌倉御家人として大胡氏がこの地にあった。以後大胡氏は「念仏往生伝」「長楽寺文書」「楠木合戦注文」などにもみえ、永徳2年(1382)には大胡上総入道跡、關所地として上野守護上杉氏に安堵(上杉家文書)されたが、大胡氏はこの地にあり、戦国時代實輪長野氏に味方した剣聖上泉伊勢守信綱は大胡城の支城上泉城を本拠とし、大胡武藏守とも称している。天正10年(1582)9月、同13年7月、同年8月の大胡高繁の三夜沢赤城神社奈良原氏宛の判物は、大胡高繁が当城にあり、上杉・武田・北条の上野進攻とともに苦腦した大胡氏があった。天正13年には城内近戸神社を赤城神社から奈良原氏親子のいづれか大胡に引籠り近戸神社を祭ることを依頼している(赤城神社文書)。天正18年小田原落城後、家康はこの赤城南麓中心の城に牧野康成を封じ、関ヶ原没後一時番城となるが、元和2年(1616)酒井忠世に与えられ、前橋藩大胡領として寛延2年(1749)の酒井氏姫路転封となるまで統き、以後廃城となる。

参考文献

『群馬県史資料編』7、「大胡城跡保存管理計画書」、山崎一著「群馬県右城墨跡の研究」、「大胡町誌」



第14図 大胡城（490）略側図

(3) 謧 城

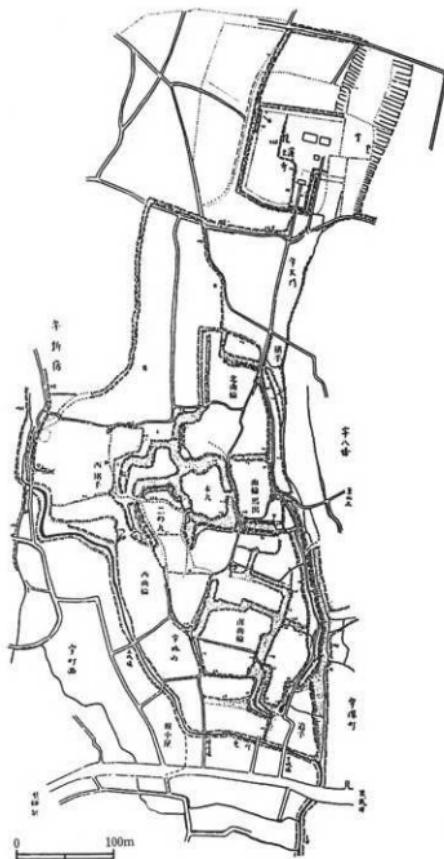
勢多郡柏川村大字謙字城内・大門地内にあり、赤城山南面緩傾斜地に位置し、謙の地名が示すように謙棚状丘陵部につくられ、西から南は兎川、東は兎川の支流の崖に挟まれた三角形の地形である。城地は南北約500m、東西250m、北を外濠で区切り、東の崖と兎川で南・西を境し、全体に紡錘形をなしている。

本丸は城地の北西に偏した位置に設けられ、本丸を囲むように西から南にかけて二の丸、南に三の丸、東に東曲輪、北に北曲輪を配し、三の丸に接して南曲輪、その東に釣状の帯曲輪などがあり、本丸南の大堀切は東曲輪の南と二の丸北に続き城地を二分している。二の丸北側の土居や東端の腰曲輪が大堀切で終ってい

第3章 県内主要中世城館跡解説

ることなどから、別城一郭の構造をもつ城である。膳家所蔵の「膳城の図」では、三の丸の北西隅の高地を物見とし、二の丸の西を大手と記しているが、山崎一氏は『柏川村誌』のなかで、大手の位置は疑問とし、三の丸としている地内も含めて二の丸とし、帯曲輪と二の丸に挟まれた郭を三の丸としている。以下山崎氏の説により各部分の概要を記す。

本丸は、一辺45mの正方形に近い形で、北東部は僅かに突出し、南西部に折れがあり、周囲は土居と深さ7



第15図 膳城（508） 略側図

mほど深い壕で囲まれ、塹は北西と西に支塹が設けられ、北西の塹は50mほどで外塹に連る。また、本丸東西には虎口があり、東は土橋で東郭に、西は塹底を通って二の丸に通じている。

二の丸は、東西150m、南北120mほどの三角形の郭で、本丸塹からこの郭に登る塹内道があり、西に虎口がある。塹内道の東口は櫓台、櫓台を基点に東へ20mの土居があり、土居中ほどの切れ目に郭馬出しの土橋部分がある。この二の丸の西南には4.5mほど下って兎川に添った長さ260m、幅40mの西曲輪があり、その北西隅に桟形様の虎口がある。

三の丸は、二の丸東の長方形部分で、東西70m、南北110m、東の帶曲輪と二の丸に挟まれた部分である。中央の東西の塹で部が二分されている。

帶曲輪は、三の丸の東の部分で、北端は西に折れて、南北200m、最大幅50m、折れの部分は幅30m、長さ50mの郭である。この帶曲輪の南には5mほど低くなつて郭馬出しがある。

東曲輪は、南は帶曲輪の大堀切で区切られた台形状の郭で、東は兎川支流の崖に接している。北曲輪は、西から北の外塹と東の兎川支流に囲まれた部分で、塹から約10m隔てて曹洞宗龍源寺がある。

築城は三善康信の子孫膳氏（応仁武鑑）と伝え、15世紀中ころと推定される。長享元年（1487）と推定される年不詳12月18日付の赤堀上野介宛上杉頼定書状（赤堀文書）に「去十四日長尾藏人并佐野周防守同心ニ善・山上取立候地へ差額終日相候」とあり。このころ既に膳城も築かれていた。永保10年（1567）の由良成繁奉書案（安川繁氏所蔵文書）では「善・山上之事根本者管領馬廻衆ニ候」とあり、太田金山城の由良氏に属していたが、天正2年（1574）と推定される年不詳3月13日付上杉謙信書状（西沢文書）に「膳・山上・女渕落居候」とあり、後北条方の膳城は上杉方に攻略された。その結果上杉方の厩橋城の北条高広に属したが、高広は謙信歿後養子景虎を支持して上杉景勝に敗れ、後景勝支持の武田勝頼を厩橋城に迎え、天正7年9月勝頼は膳・山上・伊勢崎などの諸城を攻略した。このとき勝頼は膳城を素肌攻めしたのが軍記類に膳城素肌攻めとして勝頼の無謀が伝えられている。初期城主の膳氏は天正2年の上杉方攻撃により亡び、以後由良氏の家臣大胡民部左衛門、渋川主膳など目まぐるしく変わり、「桐生地方史」には天正末年由良氏は大沢下總守政光に与えたとある。戦国末期には北条・上杉・武田の三氏の勢力関係で転々と城主が変わり廃城となる。

参考文献

『群馬県史資料編』6・7、『柏川村誌』、山崎一著『群馬県古城墨跡の研究』上巻

(4) 山上城

山上城は、勢多郡新里村大字山上字宿にある。赤城山南面の細長くのびた丘陵の先端部を利用して構築された城で、南北650m、東西220mの細長い城である。近くには、膳城・堂城・武井砦をはじめ赤城南面の城砦が多くあり、これら小さな城砦群の西に大胡城があり、赤城南面城砦のなかで最も遺構がよく保存されている丘城である。

南北にのびる丘陵を東西の塹で五つの部に区切った並郭式の城で、丘陵東側は蘇沢川を外塹とし、西と北は大きな塹で区切られ、南は高さ5mの物見台を中心に二つの郭が北の三つの郭と大堀切りで分かれているので、別郭一城の構造である。北の本丸を中心とした三つの郭には、東西両側に細長い帶曲輪があり、東側は2段、西側は帶曲輪に添った深い塹内には大手虎口から城の北端まで塹内道がある。このような塹内道をもつのは膳城・漆窯城など赤城南面の小規模な城に多くみられる。

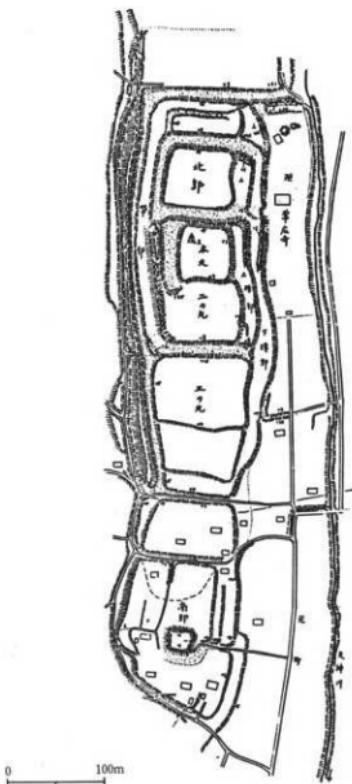
本丸は、最高点三角点標高221.2mとあり、南北150m、東西100m、その北東は3mほど高い50m平方ほどの

郭となり、北と南の郭の間は30mほどの広塙で区切られている。この南側の塙底は、本丸両側の腰曲輪と同じ高さで連結されている。二の丸は本丸の北で、本丸より約3m低く北側に位置し、約70m四方で内塙の外に本丸からのでてきた帶曲輪が西から北へ回っている。三の丸は、本丸の南にある南北二段の郭で、南北150m、東西100mで、本丸東側下段の帶曲輪がのびてきて東から南を囲っている。南部は中央に物見台があり、郭面から5mほど高い20m四方の平地があり、その縁には高さ1mほどの低土居がめぐらされている。この五つの郭と蕨沢川との間の常高寺は平時の居住区で、この南には元町・鍛冶町など城下町の町名ものこっている。

お、三の丸とその北の笠郭と呼ばれる地内は一部墓地に利用され、室町末から戦国期の五輪塔も数基あり、寺の本堂裏には小円墳がある。

中世この地方は山上の保と呼ばれた地域で、治承の争乱期には山上氏が基盤とした地方である。山上氏は藤原秀郷流で、『平家物語』には足利忠綱に従ってみえ、『吾妻鏡』にも源頼朝供奉人中に山上太郎高光、山上孫四郎秀盛の名が見える。治承5年（1181）野木宮合戦に破れた足利忠綱は、一時この山上の竜奥に潜伏したが、これら藤姓山上氏とこの山上城の築かれた室町後期のころからの山上氏との関係は不明である。享徳4年

（1455）山上で合戦のあったことが「正木文書」に見え、長享元年（1487）上杉顯定は善・山上を攻略している（赤堀文書）。文明9年（1477）の長尾景春の反乱後は、上野国内も戦乱期に入るので、15世紀中ころには山上城もほぼ現在のこのような城の構築ができていたと考えられる。また、管領上杉時代には山上氏は「東上州四家の一なり、永禄の頃、山上藤七郎氏秀、小田原の為に追落されて浪客とな



第16図 山上城（510） 略側図

り、長尾顕長に仕へて滝川一益に従へり。入道して道及と称す。山上の里は、小田原より番兵を入置きしを、天文廿四年(1553)謙信番兵を追払い、大胡民部左衛門を居らしむ。其後木戸大炊頭という者是に居す。蓋し上杉氏の家人ならん（一説に山上治郎少輔という者、山上の城主たり。道及が父兄なるべし）」（『上州故城墨記』）ともあり、北条、上杉の戦国大名の上野進出で山上も幾度か城主が交替したようである。しかし、山上氏秀が山上氏としては最後の城主であり、氏秀は北条氏康に城を奪われて以後浪人し武田信玄に仕え、ついで滝川一益に従い、小田原の役には豊臣方に加わり、豊臣勢の関東の諸城攻略に功があった（山崎一著『群馬県古城墨址の研究』）という。天正18年（1590）までは、番城として存続したが、役後全く廃城となった。

参考文献

『群馬県史』資料編7、『上州故城墨記』、山崎一著『群馬県故城墨址の研究』上、『新里村誌』

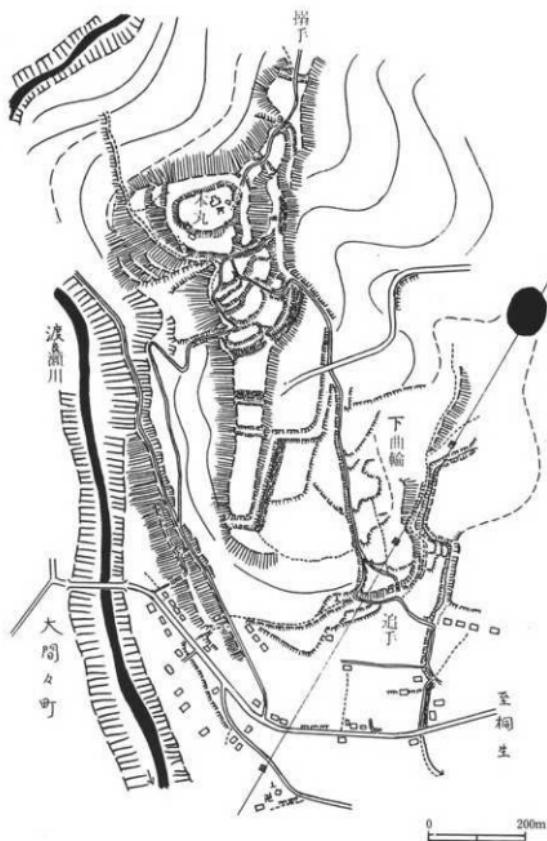
(5) 高津戸城

高津戸城は、山田郡大間々町高津戸の要害山にある。要害山は、渡良瀬川左岸に位置し、大間々扇状地の扇頂部へのびてきた足尾山地の先端丘陵にあり、平地から山頂までは約80mの高低差をもち、西側は渡良瀬川の断崖高津戸峡谷で、堀風岩、伊勢が渕の名が示すように示すように要害の地である。また、この地は桐生方面の背後にあり、一時は桐生城の出城の性格をもち、黒川谷の奥地を押える要地でもある。

山頂は削平されて本丸が設けられ、それを囲むように幅広い曲輪（詰の曲輪）があり、南へのびる丘陵の尾根に二の丸、三の丸、その東に東曲輪、山裾の登り口に下曲輪がある。城域全体は南北520m、東西250mで、屋根を利用した梯郭式の山城である。本丸は径80mほどの楕円の広場で東西に土塁があった（山田郡誌）。4mほど下って詰の曲輪が本丸を囲むように幅広くあり、その北西に2段、北東に3段の腰曲輪がついている。北東部は搦手曲輪で、本丸と搦手口と結ぶ虎口が各々についていて、尾根を堀切り、所によって内側に土居を設けている。二の丸は6段の腰曲輪の小郭からなり、大堀切が南から東へまわり三の丸や東曲輪と区切れられ、本丸とともに堅固につくられている。二の丸最下段の曲輪には、北東に大手への虎口、南に三の丸への虎口がみられ、最上段の曲輪と本丸とは土橋で結ばれていたようである。三の丸は南へのびる尾根に2本の堀切があったようであるが、現在は埋められている。三の丸の広さは北端の東西幅が約70m、南端は50m、南北200mほどあり、東西両側面とも切削って崖をつくり、東側からの攻撃に備えて南から北に壕を回らしている。東曲輪は二の丸から6mほど下って平夷された広場で簡単な防禦施設だけであり、侍屋敷があったと考えられ下曲輪は山裾を削って段をつくり、東と南が急傾斜になっていて、北面は開放されている。なお、城内の井戸は、本丸下の帯曲輪や南曲輪にもあり、帯曲輪には東側に土居が設けられ、水の郭の井戸を守る構造もみうけられる。下曲輪の南西渡良瀬川近くに里見氏関係の南北朝初期からの五輪塔群がある。

高津戸城は、「堀河院の御宇、山田七郎平吉之、寛治2年(1088)築城し、築後守則之が代に至り、観応2年(1351)観応2年(1351)桐生国綱に滅ぼされる」（天保2年渡良瀬川「毛武遊記」と伝えるが、その根拠は「関東庭軍記」などによるもので明らかでない。恐らく14世紀中ごろは本丸と二の丸を含む部分の山城であり、戦国時代に入り現在のような規模に拡張されたと考えられる。元来この地は桐生氏の西方進出の拠点で、渡良瀬川上流地方の抑えとして重要な位置を占めており、桐生氏が早くからこの地方に進出してきていたのであろう。『関八州古戦録』には、里見平四郎兄弟上杉輝虎の後援により高津戸城に拠り、天正6年(1578)5月父の仇石原石見守の用明略に夜討ちをかけたが、石原は既に砦を引払い由良国繁を頼る。その結果、由良氏の大軍に攻められた里見勝広・広勝兄弟は壮烈な最期をとげたとある。その後廃城となった伝承もあるが、天正7年5月6日の北条氏政書写（集古文書、群馬県史資料編7）には、氏政から金山城の由良国繁

に宛てたものに「一、高津戸地、右、此度無意趣打明由候、子細者雖不知候、明地之事、是又前々自其地被拘置間、仕候候」とあり、同様に深沢、五箇田、善、赤堀をあげ、「右、先年丙寅（永禄9年）被属味方候、已來逐日無別候間、至于只今、右之条々悉落着畢、此上者、当方之興衰ニ不取達、無ニ弥可有馳走条、可為肝要候」と仕置されている。この文書は、上杉謙信の死後、天正6年3月御館の乱で北条氏政の弟で謙信の養子となっていた景虎が景勝に破れ、上野の上杉氏方諸将は景虎方に味方したので、その位置が小田原北条氏によりなされたものであり、高津戸城は由良氏に任せられた。また、天正12年5月28日の北条家朱印状（京



第17図 高津戸城（965） 略側図

都大学所蔵阿久沢文書)によると、阿久沢彦二郎宛に「仁田山之内、しほ原、あな原(あさ原)、小平、しほ沢、たかつと、以上、右、五箇田取立ニ付而、任望遣候、弥可走廻儀肝要候」とあり、高津戸城は五箇田の阿久沢氏に任せられ、沼田方面から黒川谷への進出に備えさせている。これらのことから、天正18年ころまでは阿久沢氏に属し、以後全く廢城となつたと考えられる。

参考資料

『群馬県史』資料編7、「山田群誌」、山崎一著『群馬県古城墨跡の研究』上巻、『新田老談記』

(6) 桐生城(桧岡山城)

桐生城は、桐生市梅田町1丁目(旧上久方村)字城山、足尾山地の南先端通称桧岡山と呼ばれる山頂を中心に、桐生谷一帯を含む地域城である。桐生谷は、足尾山塊の南端が谷を包むように南に開け、山頂から約1500m南に新川堀があり、そこには外保の梅原館がある。更に西には小倉・用命の両砦と茶臼山、高津戸城までを外保とし、東は菱の細川氏、小侯の渋川氏や遠く佐野氏とも外戚関係を結び、広域の防禦線をもつ所堅固の城である。

地形を巧に利用した所堅固の城で、新堀川を遠備えとし、更にその南の丸山、浅間山、物見山を前進陣地とし、構えの内には出丸の梅原館、その北には桐生寺菩提寺西方寺や岡平の館があり、城山東南500mには梅松山謂雲寺の館がある。本郭の桧岡山には、名の如く桧岡状の屋根の南に本丸、ついで二の丸、三の丸が北に続く。本丸は横円形で東西125m、南北75m、周囲に2段或は4段の腰曲輪をめぐらし、螺旋状に数メートル登って詰の郭に出、西には迂回を防ぐ堅壁が長く掘られている。二の丸は幅10m、長さ50mの本丸との連結があり、その二の丸との境は大きく堀切られていて、郭の広さは幅30m、長さ130mと細長く屋根を削平してつくられ、西縁には土居、2段の腰曲輪を隔て堀切の北西に三の丸、北東に北曲輪がある。この堀切も堅壁が大きく南北に掘られている。三の丸は4段の腰曲輪状の郭で、東西75m、幅25mで、北西の堀切から西搦手に通い、その虎口の内側に武者屯がある。北曲輪は、堀切と堅壁により南北二つの郭に分れ、東搦手口の虎口がある。この北曲輪と二の丸の間は5段の帯状の曲輪で結ばれ、本丸への侵入を防げている。また、本丸の東100mほどの地に雷電曲輪、東南200mほどに坂中曲輪があり、坂中曲輪から尾根を下ると追手、梅松山謂雲寺館へと通じている。梅松山の館は籠の居館として設けられたものである。

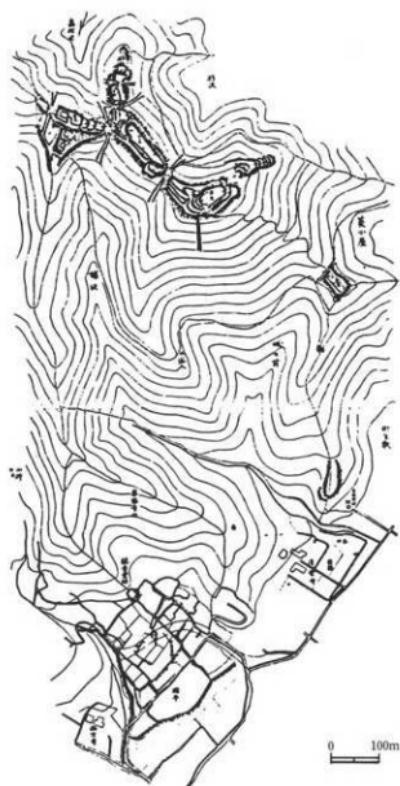
桐生氏は、『平家物語』に足利忠綱の軍勢に「切字の六郎」とあるのが初見で、『吾妻鏡』には桐生六郎が足利俊綱を殺害したとある。鎌倉時代の桐生氏は藤姓桐生氏であり、その後佐野一族と考えられる桐生国綱が觀応元年(1350)に桧岡山に城を築いた(桐生老談記)のが知られている。国綱の築城は、当時平地の梅原館の不安から山城の必要を感じ、館と菩提寺両方寺を結ぶ線上の桧岡山に築城したと考えられる。館・寺・城が一直線上に並ぶのは南北朝時代築城の一形式であり、国綱は山頂に本丸を主とした山城を築き、後桐生大炊介助綱の代に大改修され現在のこる姿に拡張されたのであろう。助綱は信綱とも称し、西方寺の記録には「西方寺殿一山天心居士、永禄六年三月十二日、信綱」とある。この助綱の時代が桐生氏の全盛時代で、古河公方に属していた。永禄3年(1563)上杉謙信は関東入りに際し、近衛前久を奉じ上野に入り、桐生城に前久を入れ、由良氏、足利氏、小侯氏などにこれを守らせ、翌年前久は謙信とともに越後に還っている。しかし、謙信帰國後、助綱は由良氏や足利氏とともに古河公方足利氏に属した。助綱は子なく、佐野昌綱の子親綱(重綱)を養子としたが、助綱の死後赤萩の里見上總入道を討つなど家庭の離反をまねき、由良氏に内応する者もあり、天正元年(1573)藤生紀伊守を先頭とする由良勢に桐生城は攻め落され、桐生氏は亡びた。由良成繁は横瀬勘九郎を桐生城代とし、藤生氏らを添え、勘九郎の父横瀬長繁が城代に代り、二の丸に

第3章 県内主要中世城館跡解説

は藤生紀伊守、三の丸には金谷因幡守を入れ、桐生地方の仕置きをしている。天正2年、由良成繁は隠居して桐生に移り、天正14年小田原北条氏に金山城を追われた由良国繁は桐生城を本拠とした。この由良成繁・国繁の時代に桐生城は大きく改修されている。天正18年国繁は小田原へ籠城し、国繁の母妙印尼は孫貞繁とともに豊臣方に参じ、没後由良氏は常陸牛久に移され桐生城は廃城となる。

参考文献

『桐生市史』、『群馬県史』資料編7、山崎一著『群馬県古城墓址の研究』上巻



第18図 桐生城 (207) 略側図

(7) 金 山 城

金山城は、太田市金山にある。金山は標高200m前後の八王寺丘陵の南にある最高234.9mの丘陵であり、山頂は平地から約180mほど高く、そこからヒトデ状に六本の尾根がひびて平野部に突出し、南の大光院方面を八王寺尾根と見附への尾根が包むようにあり、この金山を要塞化した連立式山城である。山頂からは、周囲の眺望が広く開け、山頂近くや山腹の各所に湧水もあり、山城でも容易に水を得ることができ、地形的には、北面と東が特に急傾斜となっている。

六つの尾根の先端部には、八王寺砦、見付出丸、東南の金井口出丸をはじめ出丸が設けられ、その尾根から山頂部へ向かって隨所に尾根を断ち切る塹や階段状の崖がつくられている。八王寺からは西と北にびる堅壁が設けられ、敵の迂回を防ぐようにつくられ、南の中央への侵入困難にしている。通路は南の太田口を大手とし、熊野口、南金井口、金井口、今泉口、諏訪口、市場口、井戸沢口、大島口、長手口、新田口などがあり『永禄日記』によると、長楽寺からの使僧が長手口から登城して大手南の市で、買物していることがしばしば見える。

主な郭は、山頂の本丸、二の丸、三の丸、御台所曲輪を中心に金井曲輪、東櫓曲輪、鍛治曲輪、西櫓曲輪などがあり、これらの郭が塹や崖で外からの侵入を防ぐ備えがなされ、更にその外側に幾筋もの崖をつくり帯曲輪状の出張りがつくられている。水場は御台所曲輪の日の池と三の丸に接した月の池が山頂の給水にあてられ「つばきの井戸」・「桜の井戸」など9ヶ所もあり、月の池の傍には自然濾化を兼ねた井戸跡もみられ、山城には白米城伝説など水に苦しめられた伝説が多いが、金山城は湧水に恵まれた山城である。日の池は広くマイマイ井戸の形式をのこしている。

本丸は麓から約180mの頂上を削平して西南角外斜面を野づら積みで支え、東北角を鬼門除けに一部を欠き、東西60m、南北30m。二の丸は東西50m、南北30mの傾斜地の御台所曲輪は南北120m、東西70mで南に2段の腰曲輪があり、中心部で最も広く各曲輪へ通じている。山崎一氏はこの構造から本丸と二の丸の二郭は一城別郭形式で「古い時代は山頂部の小規模な城であったことが推察でき、岩松氏築城以前にも既に山城があったのではないか」（『群馬県古城墨跡の研究』上巻）と推定している。文明以後次第に拡張され、所堅固の中心の城として整備されたのである。南には城下町（太田市の東西通りの中心地）も形成されていた。

南北朝時代にも既に小規模の郭が山頂にあったと考えられるが、「松陰私語」第四に「文明元己丑二月廿五日、金山城事始、源慶院殿御代官、愚僧立護始、地鎮之第、上古之城郭保護記為證之、地鎮之儀式、供天神地祇、七十餘日普請無斷絕走廻」とあり、岩松（新田）家純が重臣横瀬国繁に命じ、長楽寺の松陰軒西堂が地鎮祭をしている。この年8月国繁は主君家純を迎えて盛大に落成式を挙行したことを見ている。その後横瀬国繁は下剋により岩松昌純をうち、横瀬を由良に改姓金山城主となる。成繁時代は金山城の全盛期で、新田郡地方はもとより、桐生から伊勢崎までその支配下におき同心衆の旗頭となる。永禄3年（1560）上杉謙信の関東出陣に際し、その際の「関東幕注文」には新田衆（金山衆）は横瀬雅楽助以下30名が名を連ね、西は赤堀、武井、山上の各在地武士、北は縣、朝原（浅原）、蘭田の各氏がいる。翌承禄4年には那波氏を追い伊勢崎（赤石郷）を手に入れ、このころ由良に改姓している。この成繁の代に現状の金山城は完成されたといえよう。「永禄日記」には城下に市の立っていたことや実城（本丸）には成繁、本丸北の郭には嫡子国繁、実城周辺には重臣のいたことが記されている。成繁は越相同盟成立につとめるなど保身に努力したが、甲相一和で越相間断絶し、天正元年（1573）由良成繁の西の最前線赤石城は上杉氏に攻略された。この年成繁は桐生城を落し、桐生方面を全面的に支配下におき、成繁は桐生城に隠居して金山城は子国繁が城主となる。しかし、天正12年北条氏の東上州領有化が本格化して金山城は総攻撃をうけ屈伏して国繁は桐生城に移され、

金山城は北条氏重臣の番城となる。天正18年豊臣秀吉の小田原攻めには、一族は二分し、国繁の母は豊臣方となり金山城にあり、国繁は小田原に参陣した。その結果、役後金山城は没収され、由良氏は牛久に5000石を与えられ家名存続は許された。以後金山城は廃城となる。

参考文献

『群馬県史』資料編5・7、「太田市史」、「関八州古戦跡」、山崎一著『群馬県古城墨跡の研究』上巻、「上毛古城墨記」

(8) 館林城（尾曳城）

利根川と渡良瀬川に挟まれた細長い台地上に位置し、台地周辺には大小の沼地が分布し、その沼地の一つ城沼の北に張り出した要害の地に並郭式に築城されたのが初期館林城で、現在の遺構の大部分は近世拡大整備されたものである。低湿地域の沼地利用の城郭として特色をもっている。

中世の館林城は、城沼のツヅジヶ洲の東南の要害に城沼の水を入れた堀割りをつくり、その内に牙郭部を並郭式に配置した。近世館林城の三の丸、二の丸、本丸、八幡曲輪、南曲輪と呼ばれ部分とその北の外曲輪を含む部分と思われる。『館林記』には「天正十九年（1591）までは館林城普請も、さのみ丈夫には無之處、柳原小平太押領の後段々普請も出来」とあり、「邑楽郡町村誌材料」には「天正十九年二月柳原康政徳川氏に請い、溝渠を外加法師より下外張まで穿ち、之を本城外郭となす」とある。柳原康政入封以後大拡張されたのである。

中世城郭部分の各郭は、本丸は東西135m、南北45m、周囲403m。二の丸は東西198m、南北86m。三の丸は二の丸に接する東に虎口、西にも虎口千貫門がある。本丸を囲むように東に八幡曲輪、南に南曲輪があり、八幡曲輪には八幡社が勧請されて東に水門があった。南曲輪には後に二重の櫓が設けられた。北の稻荷曲輪は本丸との間に入江の堀があり、そこにはこの城の縄張りを狐が教えた伝説の尾曳稻荷が祭られている。やがて戦乱期に次第に拡大され、これらの郭の外側に侍屋敷などが広げられた所謂總曲輪がつくりあげられ、天正18年柳原康政が入封すると、10万石の城にふさわしく更に拡張され、現在の市街地を含む遠構えまできあがったようである。その工事について、『御城地根記』は「文禄二巳年正月より曲輪惣堀、三月八日迄に荒増出来、奉行石川左次衛門、荒瀬彦兵衛、一日に人夫二千人宛」と記している。

館林城が築かれたのは、享禄・天文の16世紀前半といわれているが、舞木氏の寄騎であった赤井氏が、15世纪中葉に舞木氏や邑楽郡地方の佐貫一族を倒して館林に築城したのが始めであろう。文明3年（1471）5月上杉顕定が豊島新次郎に宛えた感状（内閣文庫豊島宮城文書）には、「去廿三日上州佐貫庄立林要害中城攻落時」とあり、赤井氏の立林の要害は上杉勢に攻略されている。その後赤井氏は古河公方の援けをうけこれを回復し、赤井照光が再築したのが16世紀前半である。この新城は天文14年照光から子照忠・照康へと引継がれ、承禄3年（1560）上杉輝虎の関東入りにより、赤井氏は館林城を攻撃され、同5年2月9日照康は上杉軍に降伏した。上杉氏は須田栄定を城代とし、館林の備え堅固を命じ足利の長尾景長に預けた。景長は赤井氏の支配していたほぼ邑楽郡全城の半分を手中に収め（半分は小泉城の富岡氏支配）、永禄12年養子顕長に引き継がれた。顕長は金山城主由良成繁の第二子で、館林城は金山城とともに北関東での一大勢力の拠点となつた。由良成繁が永禄11年頃から小田原北条氏に接近すると、館林長尾顕長も同調し、同13年3月上杉輝虎は館林城を攻略武藏羽生城主広田直繁に与えた。しかし、顕長は間もなくこれを奪還した。天正13（1585）年顕長は小田原北条氏の佐竹攻めに参陣しないことから北条氏の軍門に下り、館林城へは北条氏の被官が在番していた。



第19図 金山城（272～276）・今泉館（285） 略側図

2. 東群馬の中世城館跡



第20図 館林城（324） 略側図

天正18年3月、豊臣秀吉の小田原攻めがはじまると、長尾顕長は小田原へ、館林は城代南条因幡守が護った。石田三成の率いる豊臣勢は5月館林城を攻撃し、5千の館林城に2万の石田軍が包囲した。しかし、城は顕長の代に大きく堅固に拡張されたため、大沼の要害を背にした館林城は攻略されず、三成は和平によって開城させた。

小田原役後、徳川家康は天正18年江戸入り後間もなく8月15日館林には柳原康政に10万石与えて北関東の守りを固めた。以後館林藩は柳原氏三代、松平氏2代、徳川綱吉父子2代、松平、太田、井上、秋元氏へと続き、秋元礼朝を最後に版籍奉還を迎えて廃城となる。

参考文献

『館林市誌』、『群馬県史資料編7』、『図説館林・邑楽の歴史』(川島維知、川島正一)、『群馬県古城墨跡の研究』(山崎一)

(9) 神梅城

勢多郡黒保根村宿廻字城に所在。この地は江戸時代まで深沢と呼ばれたため、「深沢城」とも言う。渡良瀬川の右岸、黒川谷の入口に位置する。初め黒川谷の土豪(地侍)の寄居として築かれ、天正年間に城郭として整備されたものと考えられる。全体が团郭構造となっていて、本丸は40m×55mの方形で、北・東・南に空堀を廻し、西に腰郭が付いている。西北角の櫓台には現在八幡祠がある。虎口は北東角にあって、土橋で二の丸に連なる。二の丸は本丸より2m程高く、200m×180mで、東・北に堀跡が見られる。追手は西北面中央、搦手は西南虎口であり、その南にはまた郭がある。これは東西100m余の尾根を三筋の堀切で四郭に分けたものであるが、この部分が城の始まりと考えられる。

築城者、築城期とも正確には不明であるが、阿久沢氏などの寄居であったと推定される。阿久沢氏は黒川谷の土豪は奥州出身だと言われる(『腰塙家系図』)。阿久沢氏は室町期には桐生氏に従っていたであろうが、桐生氏が滅亡した後は、上杉・後北条の両勢力の進出するところとなった。天正2年(1574)3月には上杉勢が攻め込んだ。上杉謙信は「当地深沢江押寄、打懸取詰候処、阿久沢兄弟ニ候者、押出令忠信、乍去模様

無心元子細候間、当手之者為押入要害、是も越衆ニ申付候」と言っており(天正2年3月13日上杉謙信書状、西沢徳太郎氏所蔵文書)、阿久沢兄弟を屈服させ、越後衆をこの城に置いた。天正6年謙信死後は、天正7年5月由良国繁(金山城主)と北条氏政(小田原城主)の協定が成り、深沢城は五箇田城とともに由良方の配下に入った。深沢(神梅)城に拠る阿久沢氏は、天正12年由良氏と後北条氏が敵対すると、後北条の側に立ち、由良氏の深沢城攻めを防いだ。北条氏直は「去廿三、新田・桐生自両地向其地相動候処、人衆を出、為宗之者共百余人討捕候、誠心地好仕

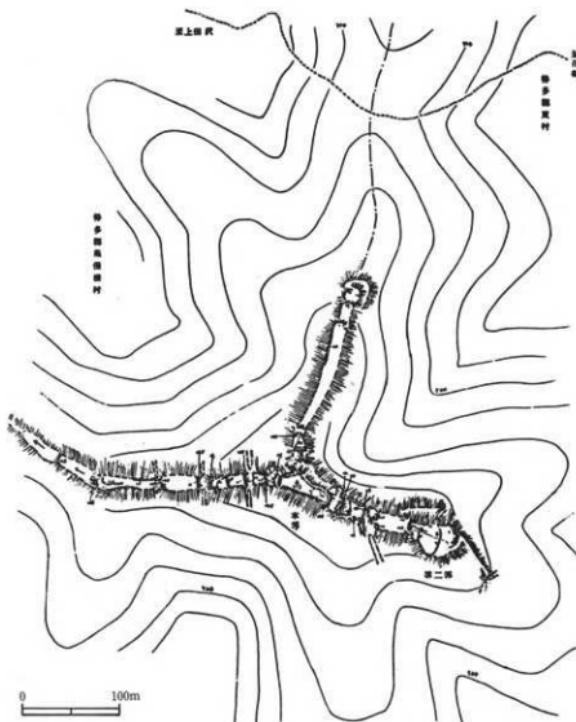


第21図 神梅城 (522) 略側図

合懐悦候」と阿久沢能登守に宛てて感状を出している（阿久沢文書、天正12年9月3日北条氏直致状）。阿久沢氏はこの後、後北条氏に従い、天正18年小田原に敗戦して、神梅城も廃城となった。

⑩ 五覧田城

勢多郡東村荻原字関守に所在。渡良瀬川と支流田沢川に囲まれた山地の南端の要害山山頂に立地する。本丸は60m×20m、低い土居を巡らしている。この本丸を中心にして、東・西・北の尾根筋にそって、合計14の郭が並ぶ。また南麓の田沢川北岸には崖上に、方110mの単郭があったと伝えられる。この地は田沢川の支流小黒川に沿って北上すると、根利・沼田方面と結ばれる。この沼田方面からの進入を防ぐ目的で、この地に関所が設けられ、その防備の山城が築かれたものと考えられる。従って、この地は後北条氏、上杉氏の争奪の場となった。天正2年（1574）3月、上杉謙信が「同ごらん田之地、彼飛脚如見聞、今日押落、無所経地ニ候間、払捨候」と言うように（西沢徳太郎氏所蔵文書）、五覧田城は上杉謙信に攻略された。しかし、同9



第22図 五覧田城（523） 略側図

月8日には後北条方の由良国繁（金山城主）が「於五箇田根小屋、沼田衆三形余人討捕」と言うように（集古文書）、五箇田城を沼田衆（越後勢に与同していた）から奪い返した。天正7年5月には北条氏政と由良国繁は協定を結び、五箇田城は深沢城（神梅城）とともに由良に渡された（北条氏政条書写、集古文書）。天正12年由良氏が後北条氏と敵対すると、後北条氏は阿久沢氏・前原氏・目黒氏などに五箇田城を攻め落させた。阿久沢氏などは、「去三日五箇田之地乗取候、忠信之至誠感悦候」との北条氏直からの書状を与えられている（天正12年7月13日北条氏直書状、目黒文書）。この後、阿久沢氏らは後北条氏に従い、天正18年の小田原合戦で敗れた。

(II) 安養寺館

新田郡尾島町字安養寺に所在。明王院・不動堂などの敷地として残っているが、土塁・堀割は現状では見られない。近世の絵図や昭和の地積図には堀割が確認され、昭和63年上武国道安養寺森西遺跡発掘調査にともなって、その堀の一部が調査され、堀の形・遺物から、14世紀のものであると考えられている。近世の絵図（尾島町尾島、橋本きよ氏所蔵）によれば、堀の長さは、南北が113間半（約204.3m）、東西が81間（約



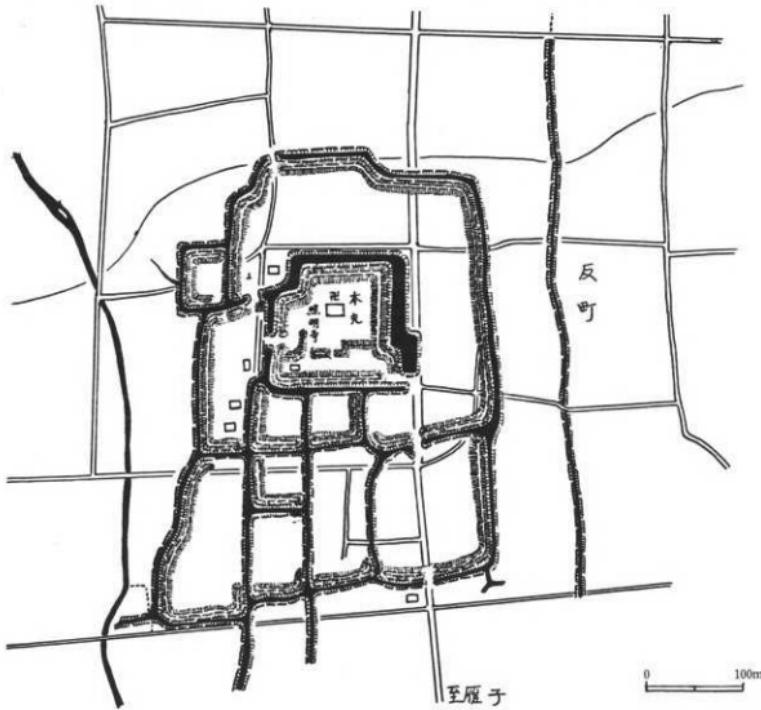
第23図 安養寺館 (919) 略側図

2. 東群馬の中世城館跡

145.8m)である。中世の館としては大きい方である。新田義貞は「安養寺殿」と呼ばれており(貞治4年7月5日長楽寺領注文、年月日未詳長楽寺領目録案、長楽寺文書)、義貞は鎌倉末期に安養寺を創建したものと考えられる。おそらく義貞は自分の館の中に、安養寺をつくったのであろう。この敷地内には新田義貞に関する伝承等が残る。明王院に隣接する不動堂には二体の不動尊が厨子に安置されているが、そのうちの一体は「触不動尊」と言われ、元弘3年(1333)新田義貞の鎌倉攻めに際して、天狗山伏と化して上野国中から越後の一族に挙兵を觸れ回った、と伝えられる(毛呂權蔵「上野国志」)。また不動堂脇からは新田義貞弟義助が供養する板碑が発見されたが、「康永元年六月五日」の紀年があり、「前刑部卿源義助 生年四十二逝去」と銘文にある。北条高時の使者2人が世良田に入り6万貫を徴収せんと譲責したのに対し、義貞は「我館ノ辺ヲ雜人ノ馬蹄ニ懸サセツル事コソ返々モ無念ナレ」として、使者2人を討ち取ったというが(「太平記」卷10)、「我館」(義貞館)を安養寺と考えれば、世良田と近接していて、納得いく。

(2) 反町城(反町館)

新田郡新田町反町の所在。村田・市野井集落の南、田島の北に位置しており、低台地上に立地する。本来



第24図 反町城(941) 略側図

第3章 県内主要中世城館跡解説

の館（本丸）は土壘と水濠を残すが、外堀と拡張部分は地積図には確認できるが、遺構は消滅している。現在内郭跡には照明寺（反町薬師）が入りこんでいる。本丸（本来の館）は方約120mで、新田一族の館であったと考えられる。「上野国志」（毛呂権蔵著）は「土人の説に、元徳年中義貞の築く所なり」と記すが、分らない。反町館は、市野井、村田の湧水が集まるところに位置しており、湧水体系が整備される南北朝期～室町期に、この館も造られたものと思われる。応永11年（1404）には村田郷は田76町余・畠25町余の大規模村落に発展しているが（同年9月村田郷地検目録、正木文書）、これは湧水体系の整備を背景にしており、反町館の存在を前提にして可能となるものである。従って村田氏（岩松氏庶子）の館の可能性が高い。戦国期には金山城（由良氏）の支城の一つとなり、野内（矢内）修理亮時英を据えたと言う（「上野国志」）。本丸は西北角を削除し、東南部が突出している。虎口は東南と西に跡がある。二の丸は本丸を囲んでいて、方300m程であり、西北には別郭がある。三の丸は二の丸の南に付き、東西約340m、南北約150mで、五郭に分けられている。



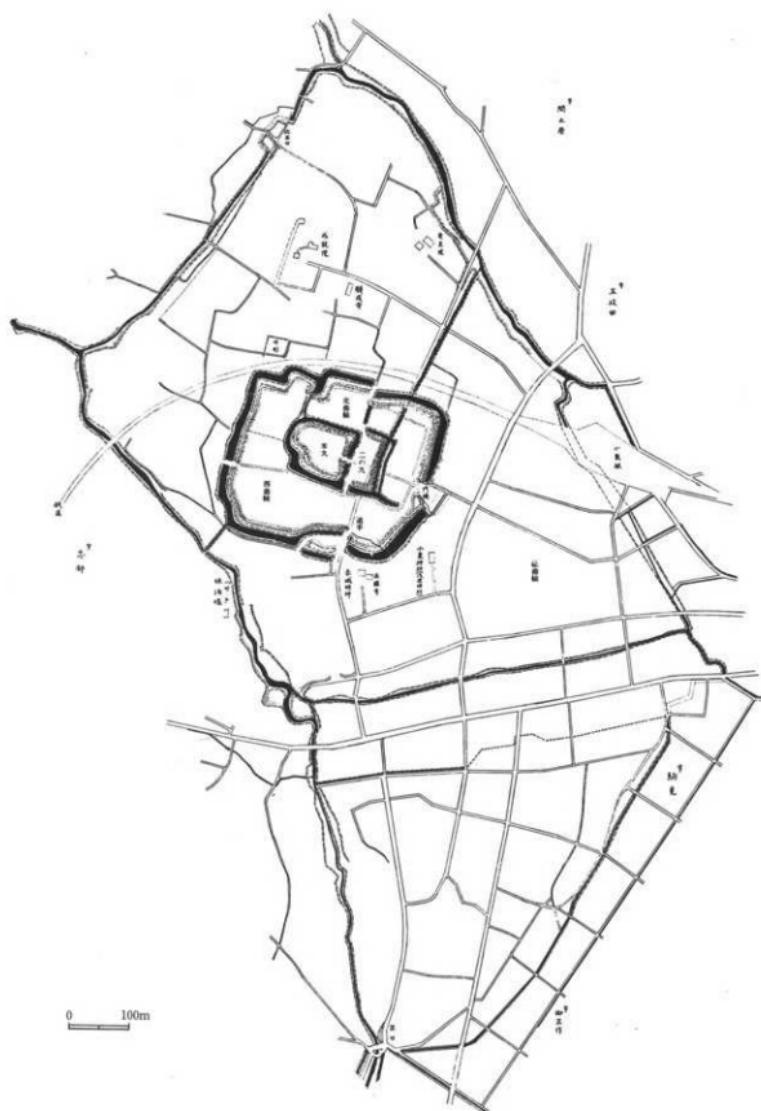
第25図 江田城（928） 略側図

03 江田城（江田館）

新田郡新田町上江田字堀の内に所在。木崎台地の西崖端に位置し、西に石田川流域の沖積低地を望む。県指定史跡。現存する遺構は本来の館を戦国期に城郭として改修したものである。本来の館は80m×100mで、約方一町であり、鎌倉期の館と考えられる。新田氏一族では、世良田氏庶子の満氏・義氏一行氏が江田氏を称しており（「尊卑分脉」）、新田義貞の鎌倉攻めに加わった江田三郎光義（行義）（「太平記」卷10）は「尊卑分脉」では世良田頼氏の孫とされている。江田氏は世良田氏庶子家であったことが分るが、この江田氏の館がこの江田館であったと考えてよい。本来の館（本丸）は高さ2.5mの土塁をめぐらしているが、これは鎌倉期からのものであろう。戦国期には金山城（由良氏）の属城となり、改修された。本丸には東西両側に「折」が加えられ、虎口は南一方だけで土橋がある。二の丸は本丸の西から南を囲んでいて、所々に堀や土塁を残している。「新田伝記」によれば金山城の重臣矢内四郎左衛門が在城したと言う。天正12年（1584）後北条氏勢力は金山城を攻撃するのに、この城を占領し拠点とした。また、本丸の東北には黒沢屋敷、毛呂屋敷、柿沼屋敷の環濠屋敷が並んでいて、郭を構成している。毛呂屋敷には「延元三年十月十五日、兵部大輔江田三郎源幸義」と刻んだ碑がある。

04 小泉城

邑楽郡大泉町上小泉城之内に所在。邑楽台地の北西部に位置し、金山城（太田市）、足利、館林、熊谷を結ぶ交通の要地にある。城の構造は、本丸・二の丸を回字状に廻らし、その外側に総曲輪をおく。本丸は方100mの方形であるが、南西隅を欠く（折）。土塁と堀をめぐらしているが、ほぼ完全に残っている。土居は1～3mであり、虎口は東辺中央にある。西北隅の折のところは、最も内側に入った部分の土居が最も低く、その両側にはみ出した部分は最も高く、櫓台跡と見られる。二の丸は1辺約300mの方形であり、北郭・西郭を配し、全体を土居と堀で囲んでいる（北西部の土居と堀が残る）。隅の部分は「折」をもっており、土居も高く、堅固な構えとなっている。二の丸虎口は各辺中央にあったが、南辺虎口は曲輪馬出が備えられ、特に堅固であった。この外側には総曲輪が広がり、町屋を包摵していたと思われる。「上野国志」（毛呂權藏）は「結城氏朝并長子七郎持朝父子結城戦場に戰死す、持朝が子小太郎持光逃れて上州甘楽郡富岡に隠れ、富岡主税介と号す、延徳元年己酉始て小泉に城を築いて移住す」と記すが、このまま事実から分らないが、結城氏系の人物が入って築城したのであろう。時朝は舞木氏が没落した永享の乱の後であろう。城主富岡氏では、延徳五年閏4月17日に古河公方足利政氏から感状が主税助宛に与えられ、また永正元年10月晦日には同じく足利政氏から玄蕃允（秀光）に宛てて感状が出されている（富岡家文書）。その後永禄5年から同10年にかけては上杉氏に従っている。しかし後北条氏の勢力が上野に及んでくると再び後北条氏についた。永禄12年8月には富岡清四郎秀親は北条氏政から「上郷」支配を任せられている（同前）。更に天正12年6月14日には富岡氏は北条氏直から、館林領・新田領内の所領21ヶ所を宛行なわれている（原文書）。この時期は上野国における後北条氏の支配体制がほぼ確立した頃であり、富岡氏の小泉城を中心とする支配体制もこの後北条体制に入ることによって成立した。堅固に修築した城構はこの頃に造られたものと見られ、後北条氏系の技術によって整備された様子が認められる。



第26図 小泉城（984） 略側図

3. 西群馬の中世城館跡

(1) 寺尾城

「新田大炊助源義重入道法名上西臨東國未一揆之時以故陸奥守嫡孫挿自立志之間武衛雖遣御書不能返報引籠上野国寺尾城聚軍兵又足利太郎俊綱為平家方人燒払同國府中民居是属源家輩令居住故也。」これは吾妻鏡治承4年9月30日の抄で、群馬県城郭関係史料中最古のものである。ところがこのように、寺尾城の所在が「上野國」のどこにあったかが示されていないため、新田郡・片岡郡（高崎市）の両説に分れ、江戸時代初期から論争が続いている。しかし上記抄の後段の足利俊綱の猛威は、足利に近接する新田郡に、義重が拠点を置き得なかつたことを説明しているのである。吾妻鏡の筆者が、それを意識しつつ記したのかも知れない。

片岡寺尾には、利根舟運末端の倉賀野河津が附随し、関東全域を掌握するため絶好の条件がある。また寺尾の地名に県下こよりほかないのである。義重の企図が成功しなかった原因は、北関東最大の勢力を誇る足利俊綱を味方に取り入れることができなかつたからであろう。

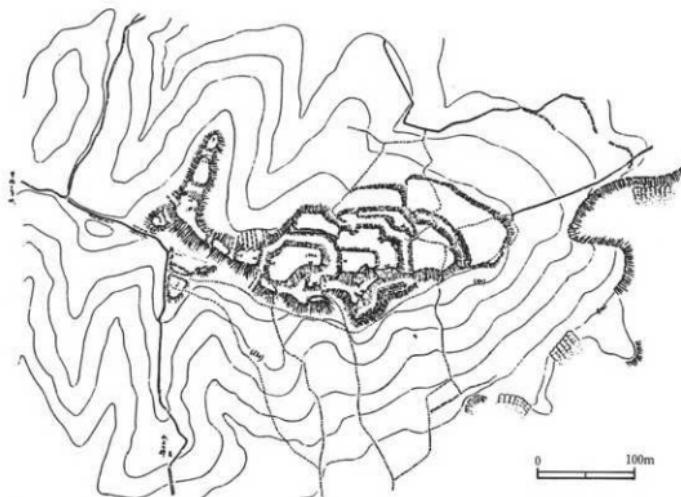
寺尾城は、鎌倉、福原等と同じく、防衛に適した地形を選び、要所要所を掘切り、或は柵木戸を設けた地域城で、今はその遺構を検出していない。

寺尾城にはもう一つの問題がある。同じ「吾妻鏡」の治承4年（1180）から14年を経た建久4年（1193）4月28日の項に、「將軍家自上野國還御此間於式部大夫入道上西新田館御遊覧自其所直還御云々」とある新田館と、寺尾城を同一とする説である。しかし、寺尾城聚兵に失敗した義重は、その年12月22日鎌倉に赴いて頼朝に弁疎し赦されて消然本居に戻つたのである。再び寺尾城に入ることはできないではないか。また新田館の所在を、世良田總持寺附近とする説、大館とするもの、別所とするものの3説があるが、頼朝の立寄つた義重新田館は世良田であると断定して憚らない。それに先立つ3月21日頼朝は那須、三原の狩倉に進発（吾妻鏡）1月余りの狩を終えて帰途についたのである。その間に諸用具や獲物など莫大な量にのぼった事であろう。それを処理するには世良田が絶好だったのである。世良田の南側には利根川唯一の渡渉点中津があり、河津平塚もある。陣営具、雑物はそこから船積して送ることができ、そこに休息できる義重館がある。頼朝はそれを終つて直ちに帰還したのである。世良田近年の発掘調査で認められたとおり西と南とを早川で、他を二重の堀で包んだ環濠集落で、西極に義重館を置き、主軸を東西から転じて鎌形に配し、南を平塚、中津に指向している。

伝治2年（1241）、政義失脚により新田氏の館は別所に移つたのである。

現在寺尾地域には、上・中・下の3城と、茶臼山城・根小屋城がよく遺っている。このうち根小屋城は、永祿13年（1570）頃、武田信玄が築いた城だが、他は、南北朝期の築城と推定される。中城以外は戦国期に改修を受けているが、中城は尾根上4か所に、とびとびに支点を設けた南北朝期そのままの遺構を示す。これらと、和田城・倉賀野城を合せると、河内の楠木谷や、越後妻有と同じ南北朝時代地域城と見ることができよう。

「信濃宮伝」と「浪合記」に応永の末期（1420頃）、尹良親王が寺尾に在城したことが記されているが、その両書は江戸時代中期、尾州津島の神官真野時綱の著といわれ、内容に疑点が多く、史籍とは言い難いものである。尹良親王の名もこの両書以外には見当らないので、その実在も疑われる始末となつてゐる。しかし、親王が討死したと伝えられる信州伊那郡の奥地浪合には、親王を祭神とする浪合神社に隣接して陵墓まで存在し、寺尾には南北朝期地域城が現存、その中央、「館」の集落には館跡も認められるのである。尹良親王に関する研究も今後、放棄さるべきではない。



第27図 寺尾下城（山名城・189） 略側図

(2) 和田城

文化14年（1817）11月下旬と註した「御城御土居通御植物尺附絵図」という縦2m、横1.3m程の図がある。高崎城の土居上や川岸にあった目通り1尺5寸以上のすべての木の、樹種と太さを正しい位置に記した図であるが、現代測図のものと全く同じ地形が表現されていて、測図技術者の技能に驚嘆される。

その図の鳥川崖端部に和田城遺構の空堀と土居が明記してある。それらは国道17号線が通るまでよく遺っていたのだが、今は最南側土居の西端にあった櫓台（烽火台であろう）だけで、それが高崎市の史跡に指定されている。昭和53年国道拡張の際の調査で断面の状態も明確にすることができた。

和田城の創建については、正長元年（1428）、和田義信の築城と和田記に記されているほか拠るべき史料がない。この地は古名赤坂で、和田最後の城主和田信業さえ「赤坂にて」と、常に書状に記している程である。しばしば言われる「和田の庄」とは莊園名ではなく和田氏領の意であろう。和田の地名の史料初見は、「両界口伝奥書」に、惠範が文亀元年（1504）3月1日、和田常楽寺で両界口伝抄の書記を終ったと記したもので、この時には既に和田氏がここに居住して和田の地名が固定し、和田城の存在も可能性があろう。因みに、この前日の2月30日、永正元年と改元されているのである。

次の史料は確実に和田城に関するもので、永禄6年（1563）4月9日、上杉輝虎から富岡主税助に、「今月13日向和田及行候人数打振罷急北条丹後守ニ令与力可走廻候」と命じたもの（竜泉院所在富岡文書）で、「高崎近郷村々百姓由緒書」中に認められている武田信玄の感状に、「和田之地籠城別而被相持之趣神妙候殊者（次カ）七日敵乃行弱羽田突落之条戦功無比類次第候」と、5月9日付、新井刑部少輔宛のものあるのはこれに対応しよう。但し、「謙信公代御書集四」に、5月10日付で、「今度和田城以越衆取詰候處和田喜兵衛令調儀相違刺城下江被立出無十方仕方ニ付昨九日我等手討ニ仕候首畢依茲今朝外張攻破候砌我等自身

鎌を取候付越衆一命捨持申候我等手廻侍共鎌合數度之場国衆驚目候、此節宇佐美駿河守鴻巣表相勧候間貫老申合早々廻橋迄馳參尤候武田北条申合近日発向仕隸ニ候我等弥和田城下近隣ニ候間不可有油断候」と、謙信から太田資正への書状が載せられているが、謙信の署名といい内容といい偽文書である事明らかで、このような原本なしの第2次資料は、史料として取上げるに厳しい検討を経なければならない。「和田記」中のものなどについても同様である。しかし、この年12月17日付、武田氏が出した条目（旧落合村文書）を見ると、和田業繁が甲府に赴いて逆心のない事をのべて聞き届けられ、妻子を信州に移すことを希望したが、それは託されず、母を人質に出すよう定めたあるので、業繁が信玄に従ったのはこの頃で、それから40日後の閏12月27日、和田城は輝虎の攻撃を受けている。妻子を信州に移したいという切迫した事情も窺ける。

業繁が甲府に向う直前の11月末、信玄は木部に陣どて倉賀野城を攻め、甘利昌忠らの機動部隊は箕輪領を蹂躪し、長年寺の受連は木部にかけて信玄の制札を乞うた（浦野文書、長年寺文書）。業繁と同道して横田康景の率いる鉄砲隊が和田城に着いて防備を固め、輝虎を撃退するといいき詰まる駆け退きが、その2か月のうち信玄・輝虎両雄の間に展開されたのである。半年後の7年6月1日、倉賀野城は陥くも陥落した。

その翌永禄8年（1565）、和田城は再び上杉方の攻撃を受けた。「永禄日記」の8月23日、「自埴生閑宿へ南動ト注進ニ附而和田之陣俄ニ引ケル也トキヨウ」とあって、和田攻めの上杉方は北条勢（南）が羽生、関宿に攻めかかったので、攻撃を中止して廻橋へ引き上げたというのである。大将は北条高広であった。これは輝虎の西毛尋還作戦の一環であって、輝虎が大槻信玄に進出したため信玄は信州に転進し、高広の率いた上杉方は廻橋に集結して利根川を渡り、先鋒の箕輪勢は若田原で武田方と戦い、高広の越後勢は和田城を突破して甘楽地方に向おうとしたのである。「永禄日記」8月25日には、「昨日甘四雨降舟橋押切左右ニ候程先々河内へ諸勢ヲ可被入北丹被申間廻橋へ打返し候」と、この大作戦の挫折を報じている。ただ、信玄の転進によって箕輪城の危機は一応救われたのだが、翌9年春落城の悲運に泣くこととなる。

天正3年（1575）5月の長篠合戦に、業繁は武田信豊に属して君が臥戸の砦に陣した。5月21日朝、信豊の鳶が巣山の陣を襲った酒井忠次勢に反撃した業繁は奪戦中敵弾のため重傷を負った。それを反町大膳亮が扶けて信州駒場まで退いたと大膳亮の覚書にある。業繁はそこで討死する。これがため潰走する和田勢を殿りして扶けたのが和田七騎で、その人々は矢中の地衆であるから矢中七騎とも呼ぶ。近年その環濠遺構群を高崎市教委で発掘調査し成果をあげている。業繁の後を受けて和田城主となった信業は跡部勝資の子であった。

和田城には、上並櫻・上飯塚・大類と下之城の支城があったが、上飯塚を除く3城は1部発掘調査が行なわれ、殊に大類城跡では70%の遺構を解明し、中世城郭の理解に大いに貢献している。

下之城は、下之城城主和田左衛門尉正盛（信景）に北条氏直の与えた天正11年（1583）正月9日付宛行状に「永禄12年己巳武田信玄以証文于今拘來候倉賀野治部少輔分弥無相違可有知行」とあることから、永禄12年（1569）、信玄が倉賀野領の1部を正盛に与えて築城させたと推定できる。正盛は業繁の弟であった。昭和2年刊の高崎市史に、業繁が永禄11年弟正盛に2百貫文を分けて下之城城主としたとあるのは、出典不明であるが、或は信玄がそれに所領を加え独立させたのかも知れない。

両和田氏は武田滅亡後北条氏に従い、前記宛行状に統いて、2月28日付で40人の着到が定められ、その後段に「和田兵衛太夫前去年之春以来相離各別之由」と、正盛が信業（右兵衛太夫）から分離したこと記している。信業が跡部勝資の子で、武田氏滅亡により和田正系の正盛が分離する事が生じたのかも知れない。信業の書状は、高崎市の進雄神社や甲州昭和町の石原氏方に十数通あり、左衛門尉（正盛）宛のものは、武州の本庄市と小川町奈良梨の鈴木氏方に残っている。和田氏諸城砦は天正18年小田原没落と共に廃城となつたのである。



第28図 高崎城（附1.一部和田城・110） 略側図

(3) 倉賀野城

吾妻鏡の建久6年（1195）3月の項に、頼朝の東大寺供養隨兵中に倉賀野三郎の記されているのが倉賀野氏の史籍初見である。古来関東は馬と舟によって、政治的にも発展を遂げて来た地域であるが、利根水系の内陸舟運の末端に当つて倉賀野が発生発達し、鎌倉幕府の出現によって舟運の重要性が加わったことは申す迄もあるまい。それに先立つ新田義重の寺尾城も倉賀野の河津を1つの条件として成立したと推定できよう。

倉賀野氏がここに居館を構え、それが後代、倉賀野城に発展していったという考え方もある、誤りではあるまい。倉賀野城地内のほか居館に適した場所が考えられないからである。

下って永享10年(1438)、鎌倉の公方持氏と革執を生じた上杉憲実が平井に築城し、そこに退避した時、平井選地の条件に8キロ北の倉賀野河津が重要であったことは申すまでもない。

(ママ)

勅使河原家所伝に「倉賀野十六騎与云來候由当城不築先十六騎之者共文明年中平井冠領聞八州下知従此時^(ママ)節即十六騎も從冠領…轉…此節平井ヨリ金井善八与云者細野佐渡守錫ニテ有之付倉賀野へ牢人ト成^(ママ)參候」と、倉賀野十六騎は築城以前からの地衆であったことを記している。十六騎中に倉賀野氏は含まれていないことも注意を要する。天文15年(1546)4月、川越の戦に倉賀野行政が討死し嗣子が幼少だったため、この十六騎が城を守ったと伝えるが、この時上杉憲政が金井善八を倉賀野に送り込んだのである。倉賀野掌握の意図からであろう。関八州古戦録に云う「碓氷峠の戦」は、天文16年の小田井原志賀城の戦のことであろうが、甲陽軍鑑には、「此侍大将衆くらぬ六郎を大将ぶんにして都合武万あまりの人数にてうち出る」とあり、倉賀野町の須賀系図には、「この大将を倉賀野六郎秀高」と書いてある。八州古戦録のように金井秀影ではない。この秀高は、永泉寺の金井家由緒書には天正3年、萬が巣山で討死とある。金井秀影は高勝となっていて、秀景と記された史料は1通も見当らない。ここでは由緒書に従い高勝としておく。

天文20年、上杉憲政の平井脱出後、この附近には小田原勢が進出し、弘治4年(1558)6月19日付で北条氏が築田晴助に与えた覚書には「利根川舟路并古河へ遂兩人船不可横合」等、舟航を規制しているので倉賀野城もその支配下に入っていたことであろう。



第29図 倉賀野城(171) 他、略側図

永禄3年(1560)、長尾景虎は憲政を奉じ、北条氏を覆滅すべく関東に出陣した。その時景虎に従った諸将を列記した「関東幕注文」の箕輪衆中に倉賀野左衛門五郎(直行又は尚行)がある。以後直行は景虎に従って終始した。永禄6年11月末、信玄は木部城を修復して対城とし倉賀野城を攻め立て、機動部隊を出して箕輪領を焼き払った。しかし倉賀野は落ちず、輝虎(景虎改)は直行を扶けて戦った橋爪若狭守に感状を与えた。ところが半年後の7年6月1日、信玄再度の攻撃に倉賀野城は脆くも陥ってしまった。今度は若狭守の名が見えず、その後も出てこない。落城には謀略の匂いが強い、輝虎は「西上州倉賀野左衛門五郎若輩故以油断地歩被奪凶徒候然間相殊味方一段窮屈」と里見義弘に切歎して報じ、西毛奪還の大作戦を立てたが中断、9年春には箕輪城も落ち西上州は全て信玄の手裏に入った。このため、甲相間に隙を生じて氏康は輝虎と結ぼうとした。信玄は信州の諸勢を入れて倉賀野城を強化し、対岸に根小屋城を築いて備えた。信玄が金井高勝を倉賀野淡路守と改めさせて倉賀野城主としたため、十六騎の人々は不満で、福田加賀守らは倉賀野を去った。

天正10年(1582)、武田氏滅亡後廻橋に進駐した滝川一益は、織田信長の急変に遭い、6月19日・20日倉賀城を拠点として北条氏と神流川に戦って敗れ、伊勢の本領に帰った。北条氏はここに、堺和康忠を置いて上州を奉行させたが、天正18年の小田原の役には、堺和、金井両将共小田原に籠城、城は北国勢に陥った。

倉賀野城は自然濠を外堀として築かれ、二の丸堀の南端には舟入りが設けられ、西・北・東の支城もあった。

(4) 箕輪城

この城は、丘城部を主体とし平城郭を添えた構えで、西面は白川、南面は椿名沼に拠っていた。主要部である白川東側の丘は、西北一東南をとる馬背状の低尾根であったことが、本丸南部の発掘調査でわかった。そこに堀を掘った土で郭面を造したのである。頂面の削平は認められなかった。

築城計画の基本は、軸線に添った4筋程の縦線と、それに直交する7-8条の横線による方眼プランで、横線は巧みに喰い違わせて縦線との十文字交叉を避けている。

丘城部は、中央の大堀切りで南北に両断され、只一筋の土橋だけを通じているが、北半部の工事は南半部に比して著しく大規模で近世的様相を見せ、終末期の改修を示す。しかし、同じ長野氏により前後して築かれた鷹留城と対比して当初の姿を推定するのに困難はなく、現状から基本の方眼組織を見得るのもそれを裏付ける。

本丸と御前曲輪は、専守防禦の中心郭、二の丸は作戦拠点で、四通八達の攻勢防禦の網である。

椿名沼は悉く埋め立てられてしまったが、その周辺を構成する数個の馬蹄形地形が示すように、榛名火山扇状地の湧水地帯に当り、最奥の法峯寺のある一郭は、「長野信濃が持城にこれあり」と讀えられた理想的な水の手で、この形のものを「扇の要の網」と称するという。

要害を欠く北面、東面には外堀をめぐらして新曲輪の平城部を設け、これと対照する西南には内宿曲輪を置いて白川寄りに追手戸口を開く。そこには丸戸張の郭馬出を附し、新曲輪北戸口には大横矢を構えている。

城の要脇に当る大堀切土橋前には顯著な郭馬出があるほか、搦手戸口の真の角馬出、虎船門前の郭馬出は古図に佛を残すばかりだが、本丸門の曲尺馬出、玉木山下の丸馬出は痕跡をうかがうことができよう。玉木山は丘城北端の最高所で、烽火台と考えられるが、そこに附された馬出は、後期の本丸堀の拡幅増深によらなければ説明できない。御前曲輪西戸口の存在も同様である。

虎船門郭馬出に附された白川口埋門は、既に半ば失なわれているが、本県では他に見られぬものである。



第30図 箕輪城（578） 略側図

この城の追手は初め東面し、後に南に振り替られたと推定される。創築当時の目的と、井伊氏の使命とを較量すれば、そのことを肯定できよう。

大永7年（1527）12月、元總社の城主長尾景虎が長尾景に救いを求めた書状がある。箕輪の長野左衛門大夫（信業）と、厩橋宮内大輔（信業の弟方業）に挟撃されて滅亡に瀕しているからという。箕輪城は当時既に存在したのである。信業の父憲業が大戸城略取を株名神社に祈った永正10年（1513）には、長野氏は猶、^{（抄）}鷹留城に居た筈であって、この15年の間に箕輪城は築かれたと推定できる。

当時、関東管領で上野の守護でもあった上杉憲政の守護代の元總社長尾氏が北条氏に内通し、憲政はそれを抑止しなければならなかった。それには長野氏の実力が必要だったのである。浜川から鷹留に移ったばかりの長野氏が箕輪に築城して移るには、憲政の関東管領としての支配権行使による援助が必要であったこと申す迄もあるまい。この優れた大城郭は、上杉氏の総力を挙げて築かれたのであろう。

元總社に向って築かれた城とて、追手が東面していたと考えるのが常識的である。やがて總社長尾、白井長尾は屈服し、長野氏はそれに代って西上州を掌握することとなる。

天文20年（1550）、北条氏の圧迫にたえられず憲政が越後に遁れた後は、名実共にこの城は西上州の牙城となり、長野業政は、よく付託に応え、諸将を結集して上杉氏回復の日を待った。ところが意外にも、憲政を奉じた長尾景虎の関東越山は、北条・武田の同盟を誘発し、箕輪城は武田信玄に備えて、作戦態勢を西に向って立て直さねばならなくなつたが、その時既に国峯の小幡氏、丹生の新田氏らは武田方に投じ、防衛線の一角は崩壊し去っていた。

永禄4年（1561）、景虎は小田原遠征の目的を達せず帰国、上杉家を継いで政虎と名のり、更に輝虎と改めると、九月には信州川中島に進んで信玄と空前の激戦を交える。続いて11月、信玄は国峯城を陥れて小幡信実を復帰させ、上州経略の拠点を設定した。翌5年の信玄は、吾妻の鎌原、大戸浦野の両氏を味方につけ、倉渕村の下氏には諏訪（松井田）城の略取を謀らせ、和田業繁らに来属を促し、安中忠成の内通を得るなど、活潑な謀略行動を展開している。11月開始された甲相連合軍の武州松山城の攻囲戦は、翌年4月の落城で終る。

永禄6年4月、和田業繁の信玄帰属を機に上州の戦雲は俄然急を告げる。信玄はそこに横田康景の鉄炮隊を入れ、大戸城にも援兵を送って固め、9月には大戸勢に鷹留城を攻撃させる。11月には信玄自ら木部に陣取って倉賀野城を攻め立てる一方、機動部隊を発して箕輪城に迫り、長純寺をはじめ領内悉しくを焼き払い、収穫を奪い、城は裸城となり、庶民は流棄して山野は荒廃した。長年寺の受連が木部にかけつけて信玄の制札を請うたのもこの時である。箕輪落城永禄6年説の生まれたのもこれに起因したのであるまい。しかし、倉賀野城は落ちず、安中、松井田両城も健在で、これらを連ねた箕輪城外防線の破綻を恢復すべく、上杉輝虎は閏12月27日、和田城に攻撃を加えたが奪取することはできなかつた。その頃岩櫃城は、真田幸隆によって信玄の手に落ちている。

永禄7年6月1日、倉賀野城が脆くも陥落した。橋爪若狭守の消失、金井淡路守の抬頭等、謀略的な匂いが強い。「倉賀野左衛門五郎若輩故以油断地歩被奪凶徒…付而長野左衛門大夫弥以窮屈」と輝虎は切歎し箕輪の危機を報じている（荻野文書、富岡文書）。その9月、安中・松井田両城も陥り（白川文書）、翌8年2月、信玄は諏訪・新開両明神に祈願をこめ箕輪城覆滅を期して進発した。25日には漆原に達して、上杉方渡河点の抑えに原孫次郎を置き（永禄日記、漆原文書）、一旦帰国、5月再び安中に現われた（歴代古案）。

輝虎は箕輪城を教うべく次の作戦を立てた。先づ輝虎自身が深々と信州に進出し、信玄の退路遮断に出る。信玄は当然これに対応し、上州勢も合せて信州に転進し西毛諸城は手薄になるであろう。東上州の諸勢はそ

れに乘じ厩橋に集結、北条高広を大将とし、箕輪勢を嚮導として碓氷・甘楽等の失地を一挙に奪還しようと/or>のである。信玄と同盟していいる北条氏康は、西毛の手薄を補うためそこに移駐しようとするから、里見義弘ら東関東勢は北条領を攻撃して牽制しようと討策した。

永禄日記 8月25日に、「氏康鉢形へ昨廿四被寄陣ト告来…昨廿四両降舟橋押切左右ニ候程先々河内ヘ諸勢ヲ可入北丹波申間厩橋へ打返シ候重明後日小幡谷へ可動トノ文鉢也」とあるのが、この作戦の結果であった。箕輪軍記の若田原の戦は、この時嚮導の箕輪勢と武田残留部隊との間に起ったものと推定するよりほかない。

長年寺受連の手記に「…同永禄九年九月廿九日箕輪落居之上晴信以御自面當寺々領如前無相違渡被下者也」とあるこの日付は、落城の日を記したものではなく、「同」とあるように、この前にのせられている二つの制札と並べた安堵状の日付でなければならない。この手記が写本であることは、原本が、これら3通を入れた箱の箱書であったと推定させる。箕輪落城はこの日付より若干以前でなければならない。由良成繁が7月既に北条に属したこと、長野の家臣木暮弥四郎が6月22日付の安堵状を受けていることは、その年6月より早く落城したと推定させよう。箕輪軍記に記す永禄6年は誤りであるが、2月22日の日付は過去帳などから伝えられたもので正しく、永禄9年2月22日落城と考えるのも案外誤りとは言えまい。落城の日付がこのように不明なのは、信玄の感状が1通も存在しないためで、落城時さ程の激戦のなかったことを断言できる。

この城の長野氏時代は30数年、武田時代16年、灘川一益時代3ヶ月を挟んで北条氏・井伊氏の8年づつがあり、武田氏時代には内藤昌豊・同昌明。北条氏時代には北条氏邦も在城している。

井伊直政が着城したのは天正18年(1590)8月4日で(小幡文書)、高崎に移って、箕輪城が廃されたのは、慶長3年(1595)であった。

(5) 後閑城

後閑氏は、岩松新田礼部家の別系である。岩松明純の子景純が岩松満長以来の所領丹生に住し、憲純を経て景純に至った。「上野志」では、景純を新田義貞の義義重の裔とする異説を伝えている。

「関東幕注文」中に景純の見えないのは、当時(永禄3年)既に丹生を去って武田信玄の許に投じていたからである。信玄はこれを高家とし300俵の扶持を与えていた(群大図書館蔵後閑文書)。

箕輪城を落して西上州を手に収めた信玄は、永禄10年(1567)6月27日付で、景純の子信純に丹生に代えて碓氷郡後閑1千貫文の地を与えた。「以先忠小幡知行候間無是非候因茲後閑を進置候」とことわっている。丹生の本領は小幡氏の知行になっているからである。ここに信純は後閑氏と改める。

後閑城は、嘉吉、文安(1445頃)の頃、依田忠政が築いたと伝えられ、後閑の長源寺にある文明2年(1470)10月3日付の依田信濃入道寄進状もその裏付けともなる。依田光慶は長野兼政の女婿とあって、箕輪城と共に没落、信玄はその跡に信純を入れたのである。上州故城星記には、新田景純が後閑城主北条政時を亡ぼしたと記され、長源寺には弘治元年(1555)9月13日付の寄進状(疑問)もあって、新田氏は、より以前から後閑とかかわりをもっていたかも知れない。

この城は、大堀切で両断された箕輪城との類型であって、東の分郭は、やはり独立性が弱い。西端は2条の堀切とそれから続く堅堀で厳重に守られているが、その外側の高所に、のろし台跡と推定される所がある。

信純は信玄の命で上条氏を称し、長子重政がそれを継ぎ、次男信久が別家した。武田滅後は北条氏に従がい、重政も復して両後閑と呼ばれていた。三男信重も別家を興して總社に移り、小田原の役には、重政は小田原に籠城、信重の子信定(又右衛門尉)は松井田に、信久は厩橋城と別れ別れに立籠り、後閑は明城になつた。



第31図 後関城（422） 略側図

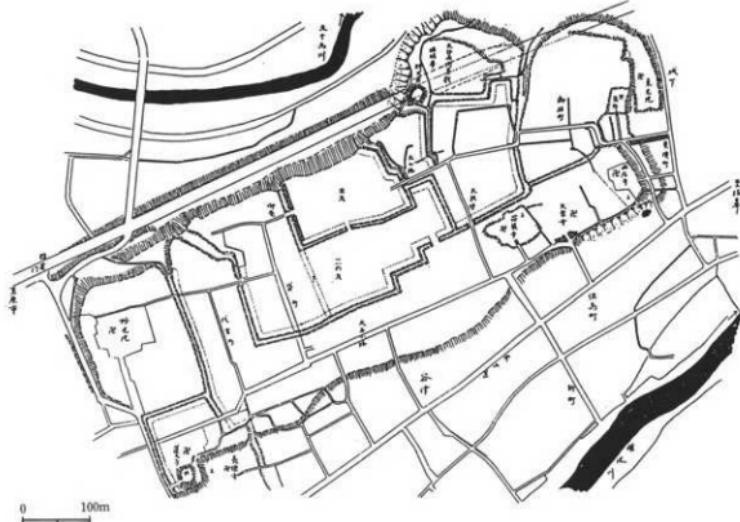
(6) 安中城

昭和62年の発掘調査で、中世安中城の西部の堀が出現した。それにより城の全貌をほぼ把握することができた。九十九川の崖端に、西から突出した台地上東西900m、南北400mが城域で、中央の本丸は東西170m、幅110m、北面は崖、他の3面は空堀をめぐらし、それぞれ戸口があった。東北の太郎兵衛屋敷曲輪と西南角とに櫓台（烽火台）があったが、前者は国道造成で失われてしまった。「上野志」に、「安中越前守忠政、正嫡左近忠成、野尻の窪庭図書を退けて永禄二己未四月枝下城より此野尻へ移り」と、この城の創立が記されている。翌3年（1560）長尾景虎の越山に当り、それに属した諸将の陣幕紋を列記した「関東幕注文」中で安中氏は箕輪衆でなく純社衆の劈頭に記されている。松井田の諏訪氏もその中にいる。同衆に入っているの

第3章 県内主要中世城館跡解説

は鍋川谷、碓水谷の諸将と荒井、苅部両氏だけである。永禄5年5月12日の市ヶ谷八幡文書を見ると、「今度世上付而拙者進退有同前被引切候条以誠無比類忝次第候本意の上者堅萬疋之地可進置候」と、景繁（忠成）らしい人物から安中丹後守（五郎兵衛家繁か）に約したのがある。万疋の地を与える程の重大事に關してである。この年の景繁進退の問題といえば、武田信玄が上州諸將に対し懐柔工作を活潑に行った頃で、景繁も亦、当然懲懲を受け、五郎兵衛から北条氏を通じてそれに応じたのではあるまい。同八幡に残る6通の文書は、五郎兵衛が北条氏と想であった事を証している。それからあらぬか、永禄7年信玄の進攻に当り、景繁は安中城を明けて、所領を安堵され、父忠政は松井田城で苦戦の末、降伏して自決させられている。家と所領の存続と繁栄をはかる使命觀に立っていた戦国期の人々に多く見られた例に該当しよう。諸戦記の伝える所を見直す所もあるろう。

天正3年(1575)、景繁に率いられて長篠に出陣した人々は遂に1騎も帰らず、城地は荒廃して畠と化したと伝えられるが、北条氏直の命により沼田城受取り向った安中左近大夫など、安中氏は存続している。



第32図 安中城（446） 略側図

(7) 板鼻城

板鼻城には、惑星をめぐる衛星のように、鷹ノ巣・小丸田・徳昌屋敷の支砦（出丸）が西・西北に設けられている。同様な構成が、和田・倉賀野・大類3城にも見られるので、地域的慣習かとも思われる。

このうち、鷹ノ巣は烽火台、小丸田は近世初頭里見氏の陣屋となり、徳昌屋敷は板鼻本城に先行する館で

あった。本城と各支砦との間には幅200乃至100mの谷地がある。

本城は径3~400m、比高40m程の平頂丘に築かれているが、1辺100m内外の本丸堀から放射する空堀が螺旋状に曲折して城縁に達し、各末端に堀戸口を形成する。城兵はこれら交通壕によって移動し、隨時隨所から出撃し得るのである。この類例を見ない構造を案出した築城者の創意は称嘆に値しよう。尤もその反面には弱点も認めないわけにはいかない。昭和60年1部発掘調査により、本丸北堀は薬研に掘られ、底に添って1筋の歓が検出された。それは粘土で固めてあり、堀内の障礙物で、この堀は明らかに交通壕ではなかった。因みに県下で発見された歓堀は、この外牆城の1か所だけであるが、その歓は3筋であった。柱穴による建物の確認はなかったが、出土品の量等から、この城は少くとも20年は使用されたと推定した。

徳昌屋敷は殆んど全面調査され、北面薬研堀の「折」と中仕切、東西・南面の腰郭、戸口のほか西北部に溝で区切られた別郭が見出された。建物跡の少なかったのは、北部を削って南に均した造地と後代の耕作によるのであろうか。

この城に関する直接の史料は、天正11年(1583)6月6日付の後北条氏城捷書と、天正18年(3月24日付と推定される上杉景勝の感状(小森沢文書)との2通にすぎず、創築の時機は、構造からの考察と、この地方の歴史から推定するよりほかない。

交通濠を螺旋状に配した、稀有ともいえる繩張りは、戦国晚期の築城を思わせるが、堀の規模は、鉄炮の充実した時期の城郭ではないことを教える。従って、武田氏の創築と考えるのが妥当であろうが、武田氏に



第33図 板鼻城(449~451) 略側図

この城を築く必要の生じたのは何時であろう。1つは、安中、松井田を手に入れた、箕輪城攻略の直前の、上杉方の反撃に備えた永禄8年（1565）頃、もう一つは、長篠合戦に敗れた天正3年（1575）の危機であろう。後者の場合、内藤昌豊討死後の箕輪城代に、その子昌月を送るのが2年も遅れた程で、勝頼には築城の余猶はなかったと思われる。出撃を重視した板鼻城の構造は情勢に合わない。永禄8年頃の築城と考えるのが至当である。若田原の戦は、築城中のこの城の前面に展開されたのであろうか。

しかしこの附近には築城に先行する館跡が存在した。文亀2年（1502）8月28日と永正3年（1506年の同じ日に、上杉頤定が板鼻海竜寺母の法要を営んでいる。前時は「談柄」に、後のことばは「玉罈和尚語録」にあるのだが、その海竜寺跡は板鼻城跡北側にある。「談柄」の内容は非常に詳細で、その中に「頤定の御館ハ依田徳昌軒也」と、現徳昌屋敷の支城跡がそれであったと記している。昭和61年、安中市教委によりその全面発掘が行われ、板鼻築城と同じ頃改修されているのが明らかとなった。永正6年（1509）連歌師宗長「東路の津登」に「可淳九月廿五日太守佳例の法楽連歌依田中務少輔光幸宿にして『菊さきてあらそふ秋の花もなし』則懐紙を越後の陳へとなん」としたのもここであろう。宗長は大戸から浜川への途中ここに立寄り、越後遠征中の頤定のために連歌の席を設け、それを送ったので、海竜寺法要を意に描いてであろう。

天正18年4月24日、板鼻城は上杉景勝に攻略された。攻撃を担当した小森沢刑部少輔への感状には「□相拘候板鼻□御成□乗取之段誠□敵數多討捕之由心地□談合候て其地備堅固□用所有之而使可□遣候猶万吉重可申候謹言 □月廿四日 景勝 小森沢刑部少輔殿□ とある。

□は欠損。月は3月かも知れない。

（8）宇田城

宇田城は、本城・北城・西城・東小谷の根小屋・西小谷の居館と宿まで備えた城郭である。宿を除いた部分は、東西・南北共600mの拡がりをもつ。本丸は標高250m、宿より60m程高い。山城部は3条の尾根に築かれ、西城のある尾根は正しい南北の方向をとり、他の2筋は西北一東南に延びる。東、中の両尾根は最高所の北端部が連結し、西尾根は中央部で中尾根の北部とつづき、それぞれ鞍部を形成している。

両鞍部とも掘り切られて各城独立性を付与され、それぞれ北端に本郭を置く。全城の構成が独特な形を示すほか、北城北部の武者屯や戸口など目をひくものがある。西城は昭和63年の発掘調査で全貌が明らかにされ、西面の犬走りが注意を惹く。このような犬走りは新治村の箱崎城と吉井町神保城の各東面にも見られるだけだが、山城の急斜面には多数設けられているであろう。

水の手は中、東両尾根間最奥にあって理想的な「扇の要の繩」となっているほか、各所に井戸の存在が考えられる。法華堂の東、北城の下段にその1つが現存する。神守寺は居館跡に建立されたのであろう。

東麓を南北に通る宇田の街村は、中世末城下町として立証される可能性がある。

明治初年に書かれた「郡村誌」に、「伝へ言フ、永禄六年城主小幡図書、宮崎城主小幡彦三郎ト戰フト、遭事詳ナラズ」とあるのは「小幡伝説」の轟村宝積寺合戦のことであろう。また「上州故城墨記」には、「甘楽大夫友政住居セリ…其村名久右衛門長野系図所持ナリ云々」と記され、法華堂墓地に長野氏墓のあることは、この城が箕輪城と同じ「一城別郭」の構えで、同類の城は甘楽地方には他に存在しないことと、「扇の要の繩」の存在は、箕輪城と宇田村との関係を暗示しているとも言えよう。



第34図 宇田城（394～395） 略側図

(9) 丹生城

丹生城は新田氏の城であった。ここ的新田氏は、金山城を築いた岩松家純の孫、顯純を祖とする。義貞の弟義重を祖とした別説もある。原文書の所在は不明だが、応永32年(1425)、岩松満長が鎌倉公方持氏から丹生郷を与えられ、地頭代成次を置いたのが新田氏丹生領のはじめという。小栗合戦の直後であるからその行賞であろう。16世紀半ごろ、そこを領知していたのは新田景純であった。

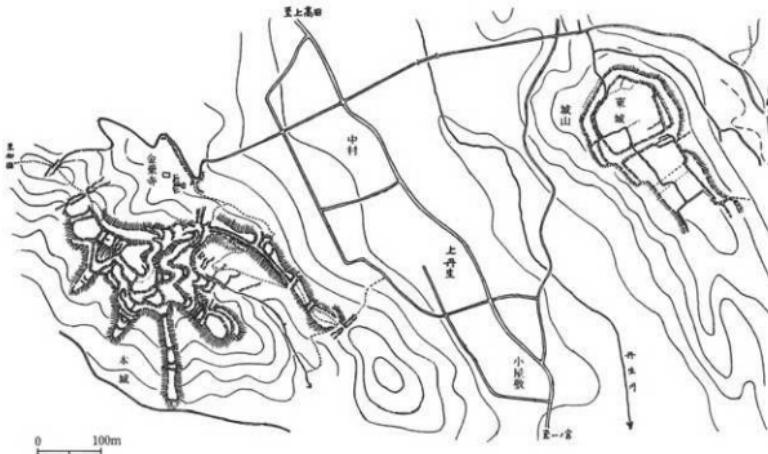
永禄5年(1562)3月9日付の、武田信玄から小幡尾張入道(憲重)への宛行状に、「新田岩松方被拘来候知行并丹生之地在郷之被官等以下之儀向後不可有綺候」とあって、この時点、新田景純が臣民を残したまま丹生を退去していたことがわかる。「関東幕注文」に景純のないことから、長尾景虎を避けて信玄の許に奔ったと推定されよう。信玄が西上州を占領した永禄10年6月27日付で、景純の子信純が丹生に代えて碓氷郡後

閑を与えられ、以後後閑氏を称すのだが、その文中に、「本領安堵之儀雖可申候以先忠小幡知行候間無是非候因茲後閑を遣進置候」とある。永禄5年、小幡憲重が丹生を宛行われた頃、景純は信玄方に居なかったのであろうか。以後丹生城は小幡氏の番城となり、天正18年（1590）に廃される。

この城は、手指状に岐れた、比高40m程の丘に築かれ、東方700m距てた丘に支城をもっていた。

信玄は景純が新田氏であることを認めていて、某年9月29日付書状で、信州塩田の工藤源左衛門に、「南栗林之内三百俵新田宮内少輔殿ニ進候就之自身其地へ御越候彼仁ノ事不私高家ト云武辺等無ニ之心懸御方之条則懇切申候有其心得無疎略馳走可被申候」と指出し、「猶新田殿へ無疎略可被致指南候」と、追書している。

丹生の地名は赤色土から生まれたもので、酸化鉄による赤色土中には砂鉄も多く、それを原鉱とした製鉄、小鋳冶も起り、ここには現在も鋳冶の伝統がある。金山・平井・白井等、産鉄に関わる大城郭が多数見られる。



第35図 丹生城（391～392） 略側図

00 内匠城

昭和63年、発掘調査の結果、追手戸口外に長さ100mの土居が発見された。北側からの高さ2.5m程で、中央部に「折」が1か所ある。北外堀に並行せず西に向いラッパ状に開く。おそらく馬出し土居であって、西に開いているため出撃に都合がよい。馬出しつき、丸馬出し角馬出しなど分類し、規格まで定めたのは近世の人々の仕業で、中世の武人は、戦の経験から、自由自在に工夫し、このようなものも作られたのである。平井金山城の発掘調査で検出された、北第二堡星木戸前の20m四方の平坦地も馬出しで、山城では土居なしでも敵方からの通視が不可能な場合、これでよいのである。城跡の考察には、所謂築城法の規範をかなぐり捨

てて実体と対する必要がある。

内匠城は、雄川が直角に屈折した所の崖端を選んで築かれ、团郭式と呼ぶ平城の4分の1象現をとって見事に綱張りされた遺構がよくのこる。只、26年前の調査では存在した二の丸北堀が埋め立てられて跡方もない。この城跡で特筆されるのは、本丸の西南隅に1段高く構えられた天守曲輪とも呼ぶべき1小郭で、そこには更に高く上面の径10m程の櫓台がある。整然としたこの城の姿は、一見して後期のものと推断させ、後北条氏の築城と考えられよう。県下で後北条氏の創築の城で明らかなのは、赤城村と昭和村境の長井坂城・高山村の中山城・高山村と月夜野町境の榛名峠城（権現城）で、山城である榛名峠城は別として、他の2城はよく類似する半折团郭城である。内匠城は4分の1團郭であるが遺地も規模もこれら2城と相似である。

この城に関する文書が全くないのは、活動期間の短かい事を示し、城主だったと伝えられる倉又大炊助は、慶長10年3月の水帳に内匠の本百姓と記され、帰農したことが確かである。北条の家臣であろう。

昨年発見された下鎌田城石組み中の墓石の、天正16年記年は、豊臣勢に備えた北条氏の内匠城築城も裏付けよう。



第36図 内匠城(415) 略側図

⑩ 松井田城

天文2年(1523)2月、北条氏綱の依頼で、鎌倉八幡再建勧進のため上州諸将を歴訪した快元僧都の記中に、諏訪右馬助がある。また、永禄5年(1562)頃、武田信玄が下諏訪宰相に、諏訪城略取を謀らせた三通の書状が、倉渕村川浦の「武井文書」中にある。前者の居た諏訪城は松井田西城らしいが、後の諏訪城は松

井田城だったと思われる。この40年の間に松井田城が生まれたと推定される。

永禄7年2月1日のものと推定される上杉輝虎から富岡主税助宛書状(竜泉院文書)に、「諏訪晴信取恵無心元之間延引於彼国安中得大利」と記され、これに先立つ永禄4年11月4日、武田信玄が信州松原明神に持げた祈願文に「西牧高田諏訪之三城二十有日而或降参幕下云々」とあって、これらが安忠政の守る松井田城を指すと思われるが、現城跡の1部であろう。現本丸・二の丸の東に、これらより小規模ではあるが、繊細巧妙な構造を示す2郭がある。そこに認められる逆字状の空堀・枱形状戸口及武者屯・横矢・腰郭等々、本丸・二の丸部の豪快さはないが、行き届いた工事はそれを凌いでいる。この2郭を中心とした部分が安中氏時代の松井田城と推定して憚らない。今、これらを含み、東西900m・南北1300m(城下町共)の大城郭が構成されている。北の高梨子には既に商業活動の萌芽が認められ、根小屋から城下町に進んでいたと判断される。北の追手から本丸北下の廻曲輪までは馬上で行くことが可能であった。本丸の北200mの梅ヶ谷津底の水門様施設を挟み両側の尾根を連ねる堀切・土橋・堅堀・戸口で編成された防禦線は目立って顯著である。本丸・二の丸間の郭馬出し、本丸東下の水の手の構造、二の丸の西側北側の洗濯板状阻障、本丸北尾根両側斜面の堅堀列、各所の武者屯、堀切り、堅堀等注意すべき普請が全山を覆っている。

後北条氏は城主として大道寺政繁を据え、碓氷峰に備えて銳意城の強化を重ねたが、小田原の役には、政繁自身は川越城を守り、嫡子直昌を城代として松井田に立籠らせた。

この城の攻略に立向ったのは、上杉景勝、真田昌幸、松平康國らの北国勢であって、総大将には前田利家が任せられた。天正18年(1590)3月8日早くも碓氷峰に達し、15日、馳せ向った直昌勢と緒戦を交えた。北条氏直は直昌に感状を与えていた(微古雜抄)。北国勢は松井田城に迫ったが、やがて附城して抑え、西上州各城の攻略に向った(鍋島文書、管窓武鑑)。

その後、寄せ手は松井田に集結して攻撃に移り、4月10日には水の手を占領した(旧記集)。松井田落城は4月21日だったようである(上杉家文書)。小田原落城の後、大道寺政繁は芝高輪で自決させられた。

後北条氏の増改修した上州の山城には、この城のほか、大戸城・新田金山城・五乱田城があるが、松井田城に最も力を入れていたように思われる。上方勢を阻止するには当然であろう。

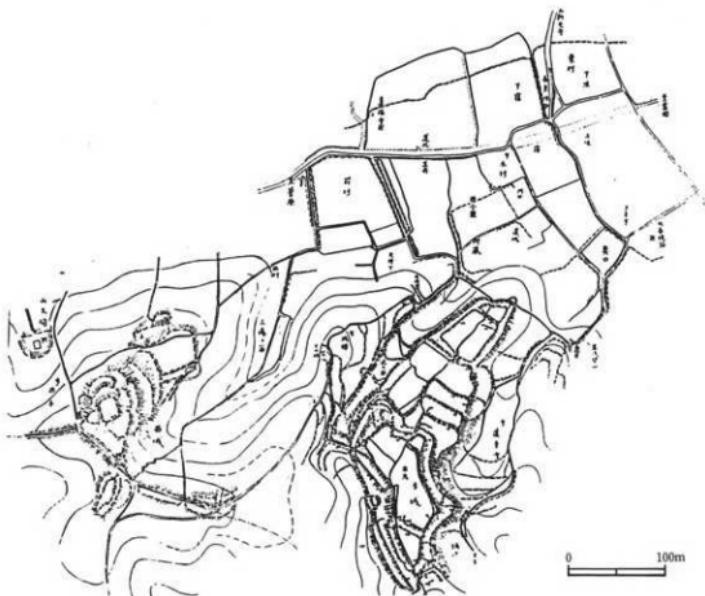
02 高田城

「廿四日卯刻ヨリ午刻迄志賀ノ城へ為被為取詰候廿五日未刻水ノ手被為取…八月大己酉細雨敵城ノ雲布ノコトクナリ六日甲寅卯刻板駿其外動闘東衆數多討捕申刻一戰十日午刻外曲輪燒子丑刻二ノ曲輪燒十一日己未午刻志賀父子高田父子被討捕」。これは天文16年(1547)小田井原、志賀城合戦の武田信玄側近駒井高白斎の手記である。ここに高田父子とあるのは、上州甘楽郡高田・菅原の城主高田小次郎憲頼父子のことをいう。

天文15年、川越の戦に敗れた上杉憲政は、武田晴信を破って威信を回復しようという菅野大膳(高田憲頼)・上原兵庫(松井田大王寺城主)の勧めに従って兵を信州に出したとして、関八州古戦録等はこの両将を謀臣扱いにしているが、憲頼自身志賀城に立籠って武田勢を抑留し、小田井原の上杉勢を有利に戦わせようとして討死したのであるから、必ずしもそうとは考えられない。弘治2年(1556)6月、晴信は南牧の羽沢に砦を築き新属の小幡重定(信実)を入れ、市川兄弟ら南牧衆に協力させて上州侵略を開始した(市川文書)。その矢面に立ったのは、高田憲頼の子繁頼で、本城を高田から菅原に移して悪戦苦闘を重ねたが、永禄4年(1561)11月、信玄(晴信改)自ら松原明神に西牧・高田・諏訪の攻略成功祈願して兵を進めるに及び、11月19日降伏した。西牧地区の各城には高田小次郎苦戦の伝説をさまざまとのこす。(松原神社文書、鎌原文書)。繁頼も通称は小次郎で、「関東幕注文」には箕輪衆中に高田小次郎とあり、永禄10年の「生島足島起請文」に



第37図 松井田城（745） 略側図



第38図 高田城（689・609） 略側図

は、大和守繁頼として信玄への忠誠を誓っている。快元僧都記（天文2年）中の高田伊豆守は右衛門佐憲頼（工藤文書）の別称であろうか。繁頼は天正元年（1574）、三方ヶ原の戦に重傷を負い、帰陣してから死去、その子兵庫助信頼が跡をついだ。信頼の子小次郎直正の書状3通を、下仁田の里見哲夫氏が所蔵しているが、江戸の幕臣となった頃のものである。

吾妻鏡文治4年（1188）3月15日の条の、頼朝鶴岡八幡大般若經供養臨席隨兵中に高田源次あり、同嘉承4年（1238）2月17日の条、將軍頼経上洛の隨兵中には高田武者太郎がある。これらは、この高田氏の祖系と思われるが、同仁治2年（1241）2月25日には、高田武者所盛員が長掃部左衛門尉秀連と上野菅野庄内の境を争い、敗訴の結果、所領の1部を召放されたとある。菅野庄は高田城の附近をいい、高田氏には菅野の別名もある。その頃の高田氏館跡が高田城の北東400mにあり、先年の発掘調査で東面の堀などが確認された。後に高田氏は、菅原に館を移したが、現陽雲寺がその跡と推定される。当時、陽雲寺は西隣の高所にあったらしく、その墓地に信頼までの高田氏累代の墓がある。

高田城は、高田本村の南の丘に築かれている。西南部にある本丸は、本村集落より25m程高い。東北下の根小屋には堀と土居をめぐらしていたらしく、その1部が残存する。そこには今も、当時の家臣団の子孫に当る人々が住んでいる。三場ヶ谷と呼ぶ谷を距てた西300mに西城と呼ぶ支城がある。その最高所はのろし場であろう。

下仁田町の城郭には、高田氏のものが多数あるが、妙義町のものと異り、主体部を山麓の平坦部におき、

第3章 県内主要中世城館跡解説

背後の山頂に物見郭、のろし場を設けたものが多い。地形が險しく、山頂は狭くて、築城に適さないからであろが、地域的慣行も見のがせない。その代表的なものに西牧城がある。前に記した信玄の松原明神祈願文に、「西牧高田源方之三城不經二十有日而或降幕下或擊碎散者」とある中の高田は、高田氏でなく高田城で、西牧城も高田繁頼の城だったかと思われる。天正十八年（1590）の小田原の役に西牧城は多米・大谷両将が守り、松平康国に攻略された。豊臣秀吉から康国に「上野之内西牧城以計策落居殊武主多米周防守大谷帶刀左衛門成敗之段尤候」と感状を与えている。日付が4月29日となっているので、4月26日、康国が石倉城で不慮に討死した後である（依田文書）。

⑩ 国峯城

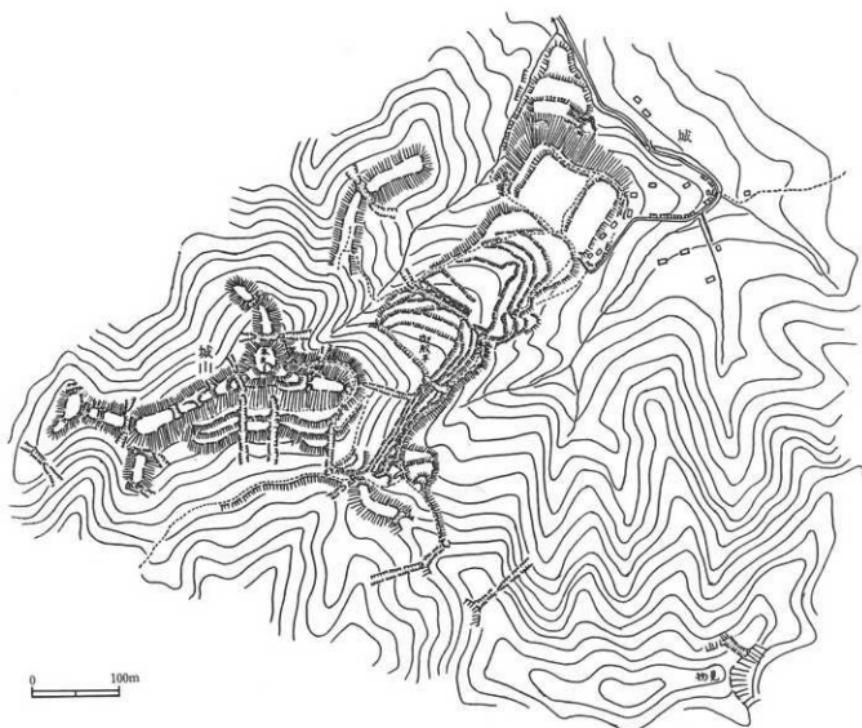
国峯城は小幡氏の城であるが、小幡氏は小幡に居て小幡氏を称し、後、国峯氏を却けてここに移ったのであろう。国峯氏は今国峯には居住せず、現高崎市の鼻高等にある。国峯氏の居所は、国峯字竹の内（館の内）にその跡があり、元屋敷と呼んでいる。また小幡の旧館跡には、一族の熊井土対馬守が居たが、近世には織田信雄がそこに楽山園の名園を造りその後、小幡藩の陣屋となつた。今そこを御殿と呼び、県指定史跡となつた。

高白斎記天文22年（1533）9月の条に、「廿八日小幡父子出仕」と簡略に記されているのは、小幡憲重、重定父子が、信州塩田の陣所に武田晴信を訪ね、その幕下に属した記事である。天文20年、上杉憲当の平井脱出後、上州諸将はそれぞれの方途を選んだ。大部分は憲当の復帰による鎌倉府体制の再興を期待し、その推進力たる長尾景虎に属して関東出陣を待った。憲当、景虎もその結果につとめ、景虎越山の永禄3年（1560）、それを集録したのが「関東幕注文」である。それに記載されていない人々のうち、東上州南部の赤井・富岡・那波の諸将は北条に属し、高山・長井・小幡・新田の四氏は武田に通じ、或は投じたのである。

景虎方の西上州衆の頭梁長野業政は、憲重の一族で宇田の城主である小幡景定を国峯城に移して甘楽地方の掌握に当らせ、晴信は弘治2年（1556）頃、南牧に砦を築かせて憲重（尾州）を入れ、市川右馬助兄弟に支援させている（浅利市川文書）。永禄4年（1561）10月11日、信玄（晴信改）は「其地出陣之由辛劳察入候年来小幡殿申談議此時條一途相持懇入候」と、作戦を開始した市川三兄弟を励まし、11月2日、松原明神に祈願して上州に向った。その7日後には高田繁頼を降し、11月2日国峯に向った（鎌原文書）。難なく景定を追い落し、重定父子を復住させたのである。翌年3月9日の丹生を宛行った文書のとおり、憲重は既に入道して居り、重定が跡を受けたことであろう。永禄10年の生島足島神社起請文には重定は右衛門信実とある。この人はよく名のりを改めた。勝頼の時は信貞、滝川一益に従つては信貞、北条に属した時は信定となったことが、その発給文書から知ることができる。但し、期間が短いためか信貞署名の文書は一通も存在しない。

生島足島起清文の小幡関係のものは、25人を算え最多数を誇っている。そのうち、親類家臣の人々は、熊井戸重満宛で、信実に忠誠を誓い、信玄への忠節を間接に表現しているのが特徴である。甲陽軍鑑に「小幡上総守（赤備忍騎馬千騎之内）五百騎」とあるように、小幡勢は武田軍団の中核をなす騎馬隊で、鎧も旗も馬飾りも真紅に染めた赤武者であった。後に井伊の赤備えとして、関ヶ原や大坂の役に勇名をはせた兵団は、武田滅亡後、小幡赤武者の生き残りを収容し、それを基礎に箕輪城で編成したものである。

天正17年（1589）の小田原役關係信定文書は8通を算えるが、それは18年2月6日、庭谷左衛門大夫に庭谷城、国峯城の守備を命じたもの（高崎佐藤文書）を最後として途絶え、小幡兵衛尉（右兵衛尉）が替って登場する。前日の2月5日のものは、北条氏直が兵衛尉の高山城守備をねぎらつたもので、3月11日の2通は小田原城内の備えと普請を命じたもの、兵衛尉はこの間に小田原へ入城したこととなる。6月3日付書状



第39図 国峰城（本城・721） 略側図

では城内から退去した兵衛尉を氏直が呼び戻そうとしているが、7月1日には降伏の意を記し、兵衛尉本領は相違ないと氏直から伝える。その後は戦後のもので、岡田新八郎の仲介で、兵衛尉の身上につき取扱おうとしていた井伊直政が、8月4日箕輪に着き、小幡は奥平信昌にきまったくと報じている。これらは前田利家を頼って加賀に居た兵衛尉の許にあつたらしい。加賀には小幡播磨守信昌も居た。神農原の茂木文書は、信

昌から野宮与十郎に父駿河守の客死を告げた長い書状だが、その中に、「いづれ時刻を以於上方表か又者先祖之ゆかりを以於郷表令立身候て其刻可令対面候」とある。31年後の元和7年、主従の絆は尚、かくの如く強く結ばれていた。この人達は上越市大瀬の大干拓を行い、そこに、小幡と同じ神原の名の村をのこしている。

播磨守は宮崎の城主で、宮崎城は国峯の別城であったが、両小幡の間に軋轢もあったようである。また貢前神社の社人一の宮氏も小幡の分派で、尾崎氏を圧倒した事件も伝えられている。

管窓武鑑に、小田原役の際の、宮崎・国峯両城の攻略戦が述べられているが、読み物としての粉飾が豊かに感じられる。その中の小幡彦三郎は信定の養子で、津軽の貴田文書に、文禄2年(1593)2月20、朝鮮の役出動中の前田利家から彦三郎の年賀を謝して「我等も令渡海候彼表無程可相済候」と報じている。(ママ)

信州塙田安楽寺の塔の銘に「西上州一郡之城主仁聖と朝臣小幡上総守信州塙田郡生縁既終」と、文禄3年3月12日の信定の死去を記し、同所生島足島神社には、天正19年(1592)12月の、小幡信繁17歳除厄の願文がある。

小幡氏は、信定の甥直之が安中市野殿に千石の地を与えられてのこり、後、千百石となって幕末まで継承した。野殿の字北にある「お屋敷」は、小幡在地の屋敷跡であろう。

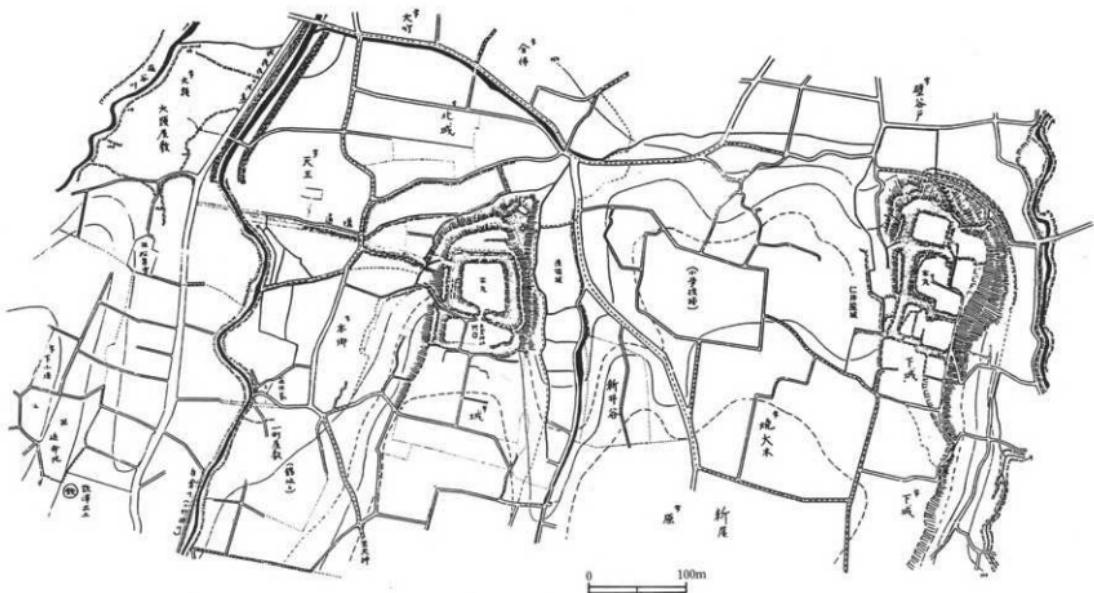
国峯城は、城山の山城部、御殿平の丘城部と、中ツ沢、遠田(恩田)の平城から成る。東西2300m、南北1900mの大城域であるが、城外との隔絶は困難であるから、城域に侵入した敵を捕捉して殲滅するのがこの城の作戦方針となろう。所謂攻勢防禦、防戦の格、陽の城である。その行動の拠点として、また寡兵の場合、持久戦を行うよう、山城部、丘城部は企画されているのである。

県下で同様な構想で成了城郭を求めれば、桐生城をあげることができよう。その城では、桧山が山城部岡平が丘城部、桐生市街地が平城部で、谷口を閉塞すべく新川堀が掘られたのである。先年岡平の1部発掘調査で、「大炊助の井戸」近くに、下級武士の住いと思われる計画的な集団掘立住居群が発見され、中世城郭内における将士の生態の一端をのぞくことができた。国峯城の御殿平の発掘調査による解明が切に希望される。この城の、新川堀に相当する堀は、善慶寺の遠堀で、谷口を塞いで300mの長さに掘られ、中央に戸口がある。両側丘上の砦からの堀前面に対する側射で敵を阻止する。新川堀は長さ2300mとこれより遥かに大規模で丸山、浅間山、今井宿の3砦で守られている。国峯城では、遠田、中ツ沢の間がもう1つの堀で仕切られていた。

04 白倉城

白倉城は、浅場・仁井屋の両城と浅場城西南下の居館から成る。鏡川の南1.5m程につづく、比高20m内外の段丘端に、500mを距てて二つの城が、巨蛇が頭を並べたように北の平地を睥睨している。「譬如率然率然者常山之蛇也擊其則尾至擊其尾則首至擊其中則首尾俱至」と孫子九地篇の両頭の蛇そのままの姿である。こういう相互救援の城群を別城一郭と江戸時代には呼んだ。この孫子思想は思いのほか強く中世武人を支配していた。近世城郭ではあるが高崎城の図を見ると、本丸、複曲輪、西の丸の間にその貌が見事に具現されている。但しその場合は1城内の繩張りであるから別城一郭ではない。

白倉の両城は、同一規模に築かれているが、首尾が明らかに区別されている。浅場城は本丸をめぐる堀が深く広く、本丸戸口は南面只一つで、そこに土橋がある。当に極陥の構えである。これに対し仁井屋城は戸口配り、折り重みすべてが出撃を企図して構えられ陽の城、攻勢防禦の繩である。鉄砲の使用、動員兵力の増大、戦闘の長期化により、この形式の城群には各個撃破の弊が生じ、一城不落の城に改められて行った。因みに仁井屋、新屋、二位谷等のあて字をした地名の所には、支城の存在する所が多いことを附記する。



第40図 自倉城他 (728~732) 略側図

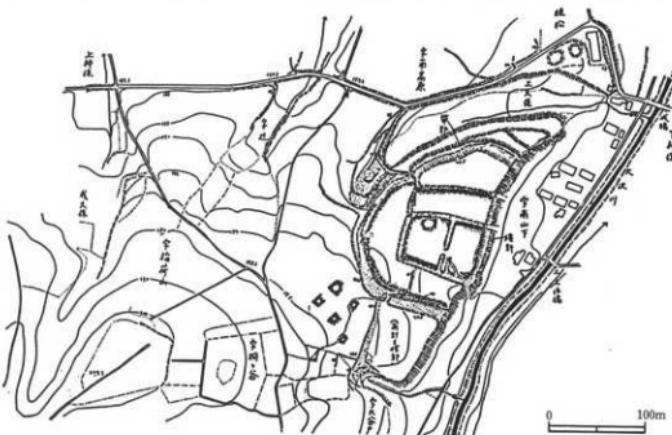
白倉城居館跡の西北部に、白倉道佐の碑が建っているが、関東幕注文中小幡道佐がその人である。同文書で小幡道佐は小幡次郎（庭屋城主小幡兼行か）と並んで足利衆中に記されている。国峯小幡の宗家重定（信実）父子は、天文20年（1551）既に武田方に投じているので、同幕注文中にはなく、1族中の二人だけが長尾景虎に味方したのである。小幡氏存続の策かも知れない。しかし、武田信玄が西上州を占拠した永禄10年（1567）には2人とも信玄に従がっていて、その年8月7日、武田方諸将が信州生島足島神社に捧げた起請文には、兼行は単独で、自徳斎道佐は小幡親類中五人の連判で、それぞれ信玄への忠誠を誓っている。

(5) 神保城（植松城）

この城は、辛科神社の社人神保氏の城である。社人の武装した目的は、その神社の保全であって、単独でその目的を達することは難しいので、近くの領主などに属して神社の保護を求め、そのかわり、有事の際武力奉仕をするのである。従って、その附近での戦には参じるが、遠征軍には通常従軍しない。神保氏は長根衆中に含まれ、永禄10年（1567）の生島足島神社起清文にも、神保昌光は小河原重清との長根衆連署で、信玄に対する忠誠を誓っている。信玄の進攻に際し長根雅楽助は武州に避け、一族の小河原重朝が城に残って降伏したのである（元亀元年7月朔安保文書、某年正月18日勝頼文書）。

関越自動車道建設のため、昭和63年、神保城跡過半部の発掘調査が行われた。その結果は整理中であるが、表面観察で、外堀と思われていたものの内側に外堀が掘られて1部は2重堀の形となっていた。その北部は、上段腰部と考えられた面に統いて東の崖端に達していた。東部50m程は堀の外縁の高さ50cmに過ぎず、堀底の幅も広く、むしろ武者屯といるべき形になっている。これと同じ形式のものが、長根城・甘楽倉内城にもあり、昭和63年の発掘調査で発見された下鎌田城ではそれが東面の崖端1帯に認められ、未調査の北面、西面にも存在すると思われる。それらは、同様な地形の縁辺部に設けられていて、この地方の慣用手法のようである。

内郭は、東西に並んだ2つの郭の南に細長い郭が付いた形に配され、土居跡・石垣・柱穴の分布から北東



第41図 神保城（651） 略側図

3. 西群馬の中世城館跡

のものが詰めの郭と推定された。その西の郭の南面中央に古墳跡が発見されたが、古墳東に接して戸口が開いていたらしく、古墳は城の中央を占める重要な櫓台に用いられていたことであろう。戸口は内郭東南角と外郭西北部の坂戸口、外郭北面の土居上戸口と同西面のものがある。内角東面の崖の中程にある犬走りと同様のものが宇田西城にも発見された。

⑩ 平井城

永享10年(1438)、上杉憲実が築いて退避した平井城は、鮎川の断岸上にある平井城の中心部だけであったと推定される。現在の、金山の要害城をもつ遺構は、文正元年(1466)上杉家に入って関東管領となった頤定が増強し、憲当(憲政改)の放棄する天文20年(1551)迄、修築を重ね、北条氏もそれを受けて成ったのである。

本城は、南部に本丸、二の丸等の主要部があり、その北の現西平井集落を、庚申堀(荒神堀)と呼ぶ堀で囲んだ総曲輪を備える。西平井集落は当時から商人等による経済活動が盛んで、中世ながら城下町をなしていたと推定される。本丸が直接南の城外に曝露するのを防ぐため南端に「ささ曲輪」と呼ぶ1部がついている。白井城や、武州鉢形城など、同型の同時代城郭のいくつかは、ささ郭の小郭をもっている。

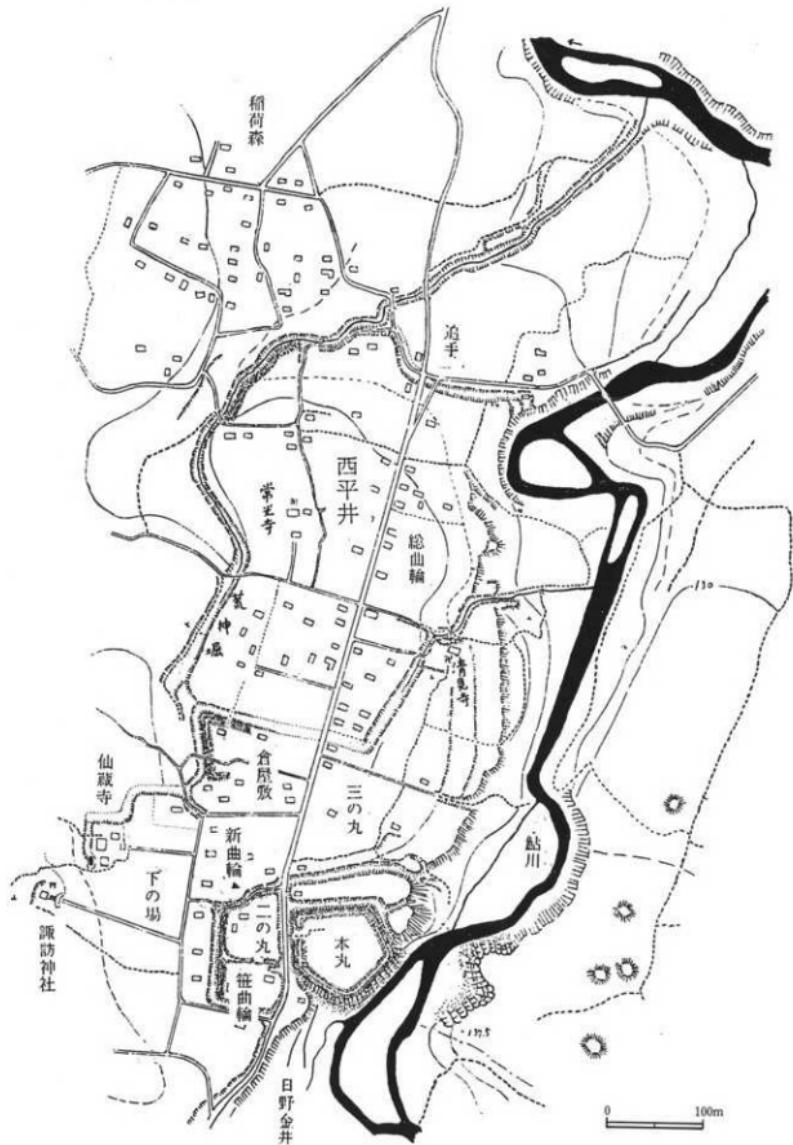
金山の要害城は、本丸の西南1.2キロに頂点をもつ、麓からの比高160mの所を中心とする山城である。東に向って開口する馬蹄形の尾根上に築かれ、最高所の本郭とその周辺の戸口・土居・堀切・武者屯など見るべき遺構が多い。西側地区に計画されたゴルフ場の1部が北尾根にかかるため、その部分の発掘調査が、昭和60~62年に行われ、思いがけぬ遺構が検出された。角柱を用いた2か所の門・2か所の木戸・櫓台・堀の基礎石組・岩盤まで刻んだ堀切りと豎堀・2か所の喰違い戸口・腰郭・土橋・土台据えの建物・焼け残りの土台・多くののづら積み石垣・武者屯・馬出し等々が、巧みに配されて2か所の支点を形成していた。天文20年から10年近くこの城を保持した北條氏が相当の改修を行った公算は充分にあるが、永禄3年(1560)、長尾景虎の越山に当り、沼田・厩橋等から1当てもせず撤収してしまった北条氏が、この城だけ、これ程手を尽して強化したという点に疑問がある。関東管領の権威により、上方の築城手法がここに突出したのであろうか。

永享10年、憲実を追って平井城に迫った足利持氏は脆くも敗退し、幕軍の追討を受けて滅んだ、やがて起る持氏の子、古河公方足利成氏と、幕命を真向に、錦旗を掲げた関東管領上杉氏の抗争は、宝徳2年(1450)から文明10年(1478)まで30年近く続くが、上杉方は平井城を根拠地とし、白井城を中継として越後上杉氏と連繋し、武州五十子に築城して前進拠点として戦った。当時の城郭である五十子の砦、古河の成氏館、結城合戦の結城城、館林攻めの古館林城(大袋城)等を見ると、皆、湿地中に突出した台地に構えた小城であつて、平井・白井・鉢形・新田金山の諸城は別種のものであった。

上杉氏は古河公方との戦が終戻すると間もなく、川越城を本拠とする同族の扇谷上杉との戦に鎧を削り、伊豆から起った北条氏に跳梁の隙えてしまった。その上杉氏に衰亡の楔を打ち込んだのは越後の長尾為景(謙信の父)の反逆であった。実兄上杉房能の復仇を期し、関東勢を率いて越後に向った頤定は、永正7年(1510)8月敗亡し、憲房(憲実の孫)は平井城に帰った。関東管領は頤定の養子憲実(古河公方成氏の子)がついで鉢形城に居たが、憲房はそれを却けて関東管領となり、その跡は古河公方高基の子憲広が山の内上杉に入つて継ぎ、享禄4年(1531)9月2日、憲房の子憲政に譲った。

当時北条氏は益々勢力を張り、憲政は上杉朝定(扇ヶ谷家)に協力し、しばしばこれを討つたが勝たず、天文15年(1516)4月20日、古河公方晴氏の旗を掲げ全関東を擧げて戦った川越の決戦にも一敗地に塗れた。

翌16年8月、碓氷峠を越えて武田信玄と戦った小田井原・志賀城でも惨敗、万策つきて長尾景虎に援助を



第42図 平井城 (359) 略側図

求めた。天文18年6月のことである。同21年正月、憲政は越後に達している（武州竜渕寺年代記）ので、天文20年、平井城を放棄したこととなる。関八州古戦録等に、この時神流川の激戦があったと記すのは誤伝である。平井城には北条長綱が入ったと伝えられ、同古戦録の21年景虎奪還のことも誤りで、天文22年3月18日付で、北条氏が平井の市日にに関する規制を高山彦五郎宛に提出して居り（高山茂氏所蔵文書）、その時尚、平井城は小田原の手にあった。景虎が初めて関東に出現したのは永禄3年（1560）9月である。

② 高山城（東日野金井城）

高山城は、鮎川を挟んで平井城の東側にある。これ程の大城郭同士が、これ程近々と並んで築かれている例は少いであろう。両城の密接な関係がうかがい知ることができる。この城のあるじ高山氏は、秋父将恒の裔で、秋父郡上我野郷高山（飯能市）にて高山を氏としたと伝えられるが、上野国高山の御厨を本地としたと考える方が無理がない。中世の頃は藤岡は存在せず。高山の御厨が中心で、高山氏とその同族小林氏が支配者の立場にあった。吾妻鏡によれば、治承4年（1180）9月、平家討滅の兵を起した木曾義仲は、父義賢の縁をたよりに多胡（吉井町）を訪ね味方を集めたが、その年12月末には高山氏らを従えて信州に戻った。翌養和元年6月14日、横田河原の合戦に高山党は大いに奮戦している（源平盛衰記）。しかし、当時は高山城は存在しない。この城の創立は、永享12年（1440）の平井築城と同じ頃であろう。

永正4年（1508）、越後の守護上杉房能が、長尾為景の叛逆に斬られた時、房能の子長寿丸（3歳）は、高山満重に引き取られて成長、上杉憲政はこれを満重の養子として高山氏を継がせた。山城守行重がこれである。これがため満重の長子彦兵衛定重は分家して武州久城（上里町）に移った。高山茂氏所蔵文書中に天文22年（1553）3月18日付で北条氏が高山彦五郎宛に市日につき示した印判状がある。この彦五郎はおそらく彦兵衛で、高山の支配が行重から定重に替ったことがわかる。天文20年、憲政（憲政改）が平井を去った後、定重は高山に戻って城主となり、行重は高山を離れたと推定される。永禄3年（1560）の「関東幕注文では、高山山城守は小林出羽守と共に白井衆中にあり、その後も山城守は原之郷の金山城（富士見村）、出羽守は行幸田城（渋川市）の城主となり、現在も裔孫がその附近に居住する。同幕注文に高山定重の見えないのは、既に武田信玄に従っていたためではあるまい。しかし、信玄が藤岡、鬼石に地を宛行ったのは永禄10年で、西上州平定を終った時点である。その年、武田方諸将が生島足島神社に捧げた起請文中に定重は勿論行重もあるので、既に信玄に従っていたようである。同起請文中の高山泰重は定重の嫡男で、多比良（吉井町）の城主であったが三増峠の戦で討死する。行重は、武田方が白井を占領した元亀元年（1570）の12月、鬼石の所領に替えて、若田郷の地を信玄から宛行れたが、翌2年6月死去した。

永禄12年、北条氏康が信玄との同盟をすて、上杉輝虎と結ぼうとした時、武田氏は定重に、5月17日付で次のように命じている。「武上之境取出之地利占浅利右馬介令談合築可在城然其方以調略被相集人数等可為同心之旨被仰出者也」。しかし、これに該当する城砦址は発見できない。定重らは新城を築くより、高山城を強化するのを得策としたのではあるまい。

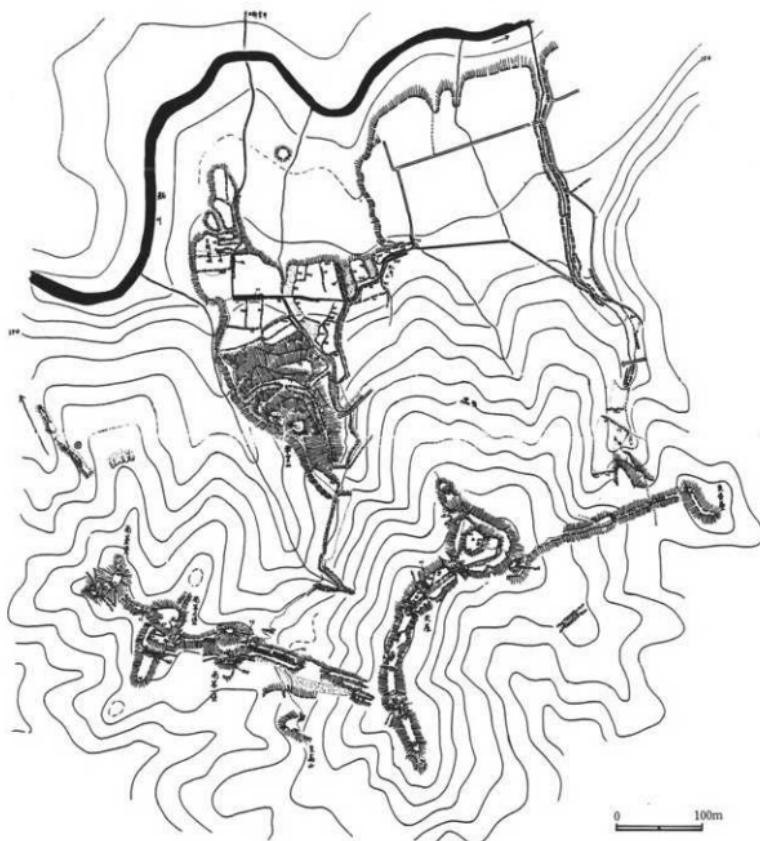
高山城は、天星・要害山・百間築地の諸砦で平城部を囲んだ複合城郭であるが、武州に面した東南面が薄弱だった。だった。現城跡では、天星城の南西中腹から西に向ってのびる長さ350m程の枝尾根上に、3か所の堡壘を設け、それらを2段走りの武者走りと縄で結び、東寄りに戸口を設けた、斬新で堅固な遺構が見られ、近年ゴルフ場造成で発掘調査により解明された。これがおそらく、この時の築城と推定される。このほかこの城で注目されるのは、西北端部、鮎川に向って突出した百間築地の砦の石壁である。東西の崖端を塞いで造られた長さ70m、高さ2.5mの、大形石を用いた石壁であったが、東寄りの戸口から西は取払われて跡

第3章 県内主要中世城館跡解説

形もない。この石塁から南が本城の居住区で北外側がテ字形の深い空堀をもつ蕃址である。この城の追手戸口は、そこから東150mの崖端に構えられた2筋の堀と土居とから成るもので、内外の通路は筋違いとなり、間が桟形である。

武田氏滅亡後、小田原に従った定重は、天正13年(1585)11月、新田金山の西城に置かれた。金山西城と、同じ金山城の八王子の砦には、高山城と同様な2段構え武者走りの遺構がある。偶然の符合であろうか。

小田原の役に高山城は小幡兵衛尉が守り(天正18年2月5日付小幡文書)、戦後廃城となった。



第43図 高山城(379~384) 略側図

第4章 調査の成果と課題

1. 調査の成果

確認された城館跡数は地域域による重複も含め、およそ1,000を数えた。市町村別の内訳は下表のとおりであるが、これを築城年代の知りうる遺跡と地域とを一覧表でみてみると、当時の本県（上野国）の一様相をうかがい知ることができる。すなわち、平野部における館の築造は12世紀から15世紀にかけて行われ、太田・新田周辺に集中している。また、高崎周辺の遺跡は16世紀と後発するものであることがうかがわれ、開発の時期差を暗示させる。一方、城砦等の要害施設は16世紀に至って規模・数ともに爆発的に拡充され、地域的には西上州・北上州に顕著である。このことは、本県及び周辺諸地域の事情のみならず我が國中世史の動向を反映したものと考えられる。

市町村別調査数

市町村名	計	群馬郡		松井田町	9
		榛名町	29	吾妻郡	
前橋市	78	倉渕村	6	中之条町	17
高崎市	120	箕郷町	14	東村	6
桐生市	24	群馬町	12	吾妻町	26
伊勢崎市	31	北群馬郡		長野原町	9
太田市	50	子持村	6	嬬恋村	7
沼田市	20	小野上村	8	草津町	1
館林市	15	伊香保町	2	六合村	2
渋川市	13	棟東村	8	高山村	8
藤岡市	40	吉岡村	10	利根郡	
富岡市	32	多野郡		白沢村	12
安中市	34	新町	0	利根村	0
勢多郡		鬼石町	10	片品村	3
北橘村	7	吉井町	34	川場村	2
赤城村	13	万場町	6	月夜野町	12
富士見村	13	中里村	4	水上町	2
大胡町	9	上野村	2	新治村	5
宮城村	7	甘楽郡		昭和村	5
柏川村	10	妙義町	11	佐波郡	
新里村	11	下仁田町	15	赤堀町	6
黒保根村	2	南牧村	13	東村	2
東村	8	甘楽町	15	境町	10
		碓氷郡		玉村町	34

第4章 調査の成果と課題

新田郡		
尾島町	13	
新田町	27	
戸塚本町	3	
笠懸村	9	
山田郡		
大間々町	3	
邑楽郡		
板倉町	8	
明和村	5	
千代田町	4	
大泉町	3	
邑楽町	13	
合 計	1,008	

2. 今後の課題

今般の中世城館跡分布調査により、群馬県内所在の城館及び関連諸遺構は概ね網羅できたものと考えられた。しかし、本報告書の編集にはいった昭和63年度に至っても、発掘調査によって北橘村の塙田城・宮城村の三本木城・下仁田町の下鎌田城が新たに発見され、また、宇田城・塩ノ入城・神保城・安養寺館・岩松城・箱田城は修正の必要が生じた。今後も小型の城砦や平野部における埋没した館跡等が発見される可能性は大きく、このような追加・補正は続くに違いない。従って、本書に掲載された遺跡がすべてではないことは自明である。

一方、文化財の保護・活用と開発との適正な調整を責務とする文化財保護政策には、現時点での知りうる限りの資料を社会に提供することが求められており、本書はこうした状況を踏まえた追補可能な体裁をとっている。

本書の活用と、今後の調査の進展等によってさらに精度の高いものとなるよう努めなければならない。